2021 年度　広島大学総合科学部
「社会調査演習 I・II」研究成果報告書

大学生の生活と意識に関する調査研究

2022 年 3 月

園井　ゆり 編
広島大学大学院人間社会科学研究科

2021 年度　広島大学総合科学部
「社会調査演習 I・II」研究成果報告書

大学生の生活と意識に関する調査研究

2022 年 3 月

園井　ゆり 編
広島大学大学院人間社会科学研究科

はしがき

本報告書は、2021 年度広島大学総合科学部「社会調査演習 I・II」授業科目（通年科目）の研究成果報告書である。本報告書は、本授業における「大学生の生活と意識に関する調査研究」（以下、本研究と記す）の考察結果をまとめたものである。本研究では、「大学生の生活と意識に関する調査」（以下、本調査と記す）を実施し、4 年制大学に在籍する大学生の生活と意識についての分析考察を行った。以下、本研究の目的と構成、本授業科目の構成員、および本調査の概要について記す。

本研究の目的は、現代の大学生が社会的な自立に対してどのような認識を持っているか、ということを明らかにすることである。本研究では、大学生が抱く、社会的自立に関する価値観――特に結婚観、家族観、職業観――に着目し、その分析を通して、大学生の自立に対する認識を解明する。本研究では、これらの価値観を、主に、大学生の生活における次の 3 つの時点から考察した。すなわち、大学入学前までの生活（過去）、大学入学後の現在の生活（現在）、大学卒業後の将来の生活（将来）の 3 時点である。本研究では、これら 3 つの時間軸における大学生の家族観や職業観の変遷過程を分析することによって、大学生の社会的自立観がどのように形成されるかを考察する。

本研究は、結婚観および家族観編と職業観編の 2 編から構成される。結婚観・家族観編では、大学生の家事実践経験と性役割意識との関係性、大学生の結婚観および将来の家族形成に対する認識、家庭生活と職業生活との両立に対する大学生の認識等の分析課題を中心に検討する。職業観編では、大学生の職業／進路選択や就労の場の選択に対して大学生の家族や地域はどのように関わるか、ということを中心に検討する。

本授業科目は、本科目を受講した次の 7 名の学部学生から構成される。山田真理子（広島大学法学部 4 年）、竹弘楓花（広島大学総合科学部 3 年）、加島菜々子（広島大学総合科学部 3 年）、永山葵（広島大学総合科学部 3 年）、加藤陽菜（広島大学総合科学部 3 年）、平谷佳子（広島大学総合科学部 3 年）、鍵山敬一（広島大学文学部 3 年）。このうち 5 名（山田、竹弘、加島、永山、加藤）は結婚観・家族観についての研究を行い、2 名（平谷、鍵山）は職業観についての研究を行った。また、本授業では受講者とは別に、1 名の学部学生（寺岡桃花・広島大学総合科学部 4 年）が通年にわたり TA として携わり、授業資料等の整理を担当したほか、本調査の項目別集計（巻末に所収）の作成を担当した。

本調査の概要について、本調査は 2021 年 7 月から 10 月にかけて実施した。本調査の調査対象者は、4 年制大学に在籍中の学部の大学生である。本調査では、これら調査対象者に対する聞き取り調査を実施し、最終的に 38 名の大学生から調査データを得た。聞き取り調査は、半構造化面接法により行った。聞き取り調査における調査項目は、受講者間での共通の項目として事前に設定した。聞き取り調査実施に際しては、調査対象者の基本的な属性のほか、調査対象者の結婚観および家族観や職業観についての意識を測るため、調査票調査（巻末に所収）も聞き取り調査とあわせて実施した。なお、本調査の実施期間中は、新型コロナウィルス感染症が続いていたため、調査実施に際しては、感染症予防に十分配慮した上で、対面ないしオンラインにて行った。

最後に、本調査の趣旨をご理解頂き、快く調査にご協力頂いた皆様に厚く御礼申し上げる。

2022 年 3 月

広島大学大学院人間社会科学研究科准教授　園井　ゆり

目　次

はしがき

序　章　大学生の社会的自立についての調査研究 …… 園井ゆり　1

結婚観・家族観編

第 1 章　大学生の家事実践経験が生み出す性役割に関する意識についての研究
…… 山田真理子　7

第 2 章　定位家族での家庭環境が大学生の就労・子育て意識に及ぼす影響
…… 竹弘楓花　25

第 3 章　家庭環境が大学生の結婚意識に及ぼす影響に関する調査……加島菜々子　37

第 4 章　ワーク・ライフ・バランスに関する女性大学生の規範調査 ……永山葵　51

第 5 章　女性大学生が求めるゆたかな人生について …… 加藤陽菜　61

職業観編

第 6 章　大学生の進路決定に見る青年期の精神的自立…… 平谷佳子　71

第 7 章　大学生の地元志向とその背景…… 鍵山敬一　87

付録 1　大学生の生活と意識に関する調査　調査票 …… 園井ゆり　103

付録 2　大学生の生活と意識に関する調査　項目別集計表…… 寺岡桃花　111

序章　大学生の社会的自立についての調査研究

園井　ゆり

1．本研究の背景

現代の大学生において、社会的な自立を達成することは、大学生における重要な問題関心の一つである。大学生における社会的自立という主題は、これまで国内外の先行研究においても検討されている（Henri et al. 2018; Lewis et al. 2015; 奥村ほか 2019; Wray-Lake et al. 2010）。本研究は、4 年制大学に在籍する大学生を分析対象とし、現代の大学生における社会的自立に対する認識を解明することを目的とする。大学生の自立を、アメリカの教育社会学者である R.J.ハヴィガースト(Robert J. Havighurst)（以下、ハヴィガーストと記す）の発達課題論に従いみると、ハヴィガーストは、人間の生涯にわたる成長段階に発達課題（*the developmental tasks* of life）という概念を適用し、人間の生涯を、各年齢段階における発達課題の達成との関わりから分析した。ハヴィガーストにおいては、人間には、幼年期から老年期に至る成長段階において、各段階で達成すべき課題があり、これらの課題を適切に達成することが、次の成長段階に移行するために不可欠であると考えられている(Havighurst 1953)。

本研究における分析対象との関わりから、ハヴィガースト学説における発達課題を捉えると、本研究の分析対象である大学生は、ハヴィガースト学説における青年期に相当する年齢段階といえる。ハヴィガースト学説における青年期の発達課題は、概ね、経済的独立のための課題と（両親からの）情緒的独立のための課題との 2 点に整理できる。経済的独立と情緒的独立は、ともに社会的自立を達成するうえでの重要な基盤であるため、青年期における発達課題とは、すなわち社会的自立を達成するための課題であると要約できる。社会的自立を達成するうえでの具体的課題として、ハヴィガーストは、経済的自立達成のために職業選択のための準備を行うこと、および情緒的自立達成のために結婚と新たな家族形成のための準備を行うことを指摘しており、これらは青年期における重要な発達課題の一部として捉えられている(Havighurst 1953)。

以上をふまえ、本研究では、大学生の社会的自立についての認識を、次の 2 つの価値観の解明を通して行った。すなわち、大学生の結婚観ないし家族観の解明と職業観の解明で

ある。本研究では、これら 2 つの価値観の解明を通して、4 年制大学に在籍する大学生の社会的自立観について検討を行った。

2. 本研究の目的と調査概要

2.1 本研究の目的

本研究の目的は、現代の大学生における社会的自立に対する認識を明らかにすることである。本研究では、大学生が抱く、社会的自立に関する価値観――結婚観および家族観と職業観――に着目し、これらの価値観の解明を通して、大学生が将来の自立した生活に対して、どのような認識を持つかを分析した。本研究では、これらの価値観を、大学生の生活における、次の 3 つの時点から考察した。大学入学前までの生活（過去）、大学入学後の現在の生活（現在）、大学卒業後の将来の生活（未来）の 3 時点である。本研究では、これら 3 つの時間軸における価値観の変遷過程を分析することで、大学生の社会的自立観がどのように形成されるかを分析した。

本研究は、結婚観・家族観編と職業観編の 2 編から構成される。結婚観・家族観編では、大学生の家事実践経験と性役割意識との関係性、大学生の結婚観および将来の家族形成観、家庭生活と職業生活との両立に対する大学生の認識等について分析した。職業観編では、大学生の職業／進路選択や就労の場の選択に対して、大学生の家族や地域はいかに関わるか等について分析した。

2.2 調査概要

本研究では、本研究の目的を検討するため、「大学生の生活と意識に関する調査」を実施した。本調査の概要について、以下、本調査における、調査目的および調査対象者、調査時期および調査方法、ならびに主要調査項目の 3 点について述べる。

第 1 に、本調査の調査目的と調査対象について、本調査の調査目的は、現代の大学生が社会的自立に対してどのような認識を持つかということを、大学生の家族観や職業観を通して明らかにすることである。本調査の調査対象は、上述した通り、4 年制大学に在籍中の学部の大学生である。

第 2 に、本調査の調査時期と調査方法について、本調査は 2021 年 7 月から 10 月にかけて実施した。調査方法については、本授業を受講した学生の、4 年制大学在籍中の友人な

いし知人等を調査対象とする聞き取り調査により実施した。聞き取り調査は、半構造化面接法により行った。調査対象数については、受講者 1 人につき 5 人程度に対して調査を行い、最終的に、合計 38 名の大学生から調査データを得た。調査は、受講者と調査対象者との、1 対 1 の対面形式による聞き取り調査により行った。ただし、調査期間中は新型コロナウィルス感染症が続いていたため、状況に応じてオンラインを利用した調査に切り替えた上で聞き取り調査を実施した。特に対面形式による調査実施の際は、感染症予防に十分配慮し行った。調査時間は概ね 1～2 時間程度である。調査対象者のプライバシー保護については、本調査の全過程において、調査対象者のプライバシーを厳守し、得られたデータについては適切な管理を行った。

聞き取り調査実施に際しては、調査票調査も聞き取り調査とあわせて実施した。この調査票調査は、調査対象者の基本的な属性のほか、調査対象者の結婚観および家族観や職業観等についての意識を測るために実施した（調査票および各質問項目の項目別集計については巻末に収めた）。

第 3 に、本調査の主要な調査項目について、聞き取り調査における調査項目は、受講者間での共通の項目として事前に設定した。その際、上述した通り、大学入学前までの生活（過去）、大学入学後の現在の生活（現在）、大学卒業後の将来の生活（未来）の 3 つの時点に着目した上で、これら 3 時点における家族観や職業観について調査項目を設定した（巻末の調査票を参照）。例えば、大学入学前の生活については、大学への進路選択において誰からの助言が役立ったか等について、現在の大学生活については、親や家族は生活の維持や将来の進路選択に対してどの程度関わっているか等について、大学卒業後の将来の生活については、将来の家族形成や職業／進路選択に対し、どのような認識を抱いているか等について、共通の調査項目を設けた上で考察した。

2.3 調査対象者の属性

本調査における調査対象者の状況について、調査票調査の結果をもとに考察する（巻末の項目別集計表を参照）。まず、調査対象者の基本的属性についてみると、本調査の調査対象者は、概ね国立大学に在籍する大学 3 年生の文科系の女性であり、学業成績については良以上である。生活状況については、概ね一人暮らしをしている。生活費については、生活費のうち約 7 割は親からの援助により賄っており、学費については、学費のうち約 8 割は親からの援助により賄っている。両親の学歴については、調査対象者のうち約 6 割が両

親ともに大学卒である。家族構成については、特に高校 3 年時における家族形態についてみると、調査対象者のうち約 8 割は核家族世帯である。暮らし向きについて、同様に高校 3 年時における家庭の経済状況についてみると、調査対象者のうち約 8 割は比較的豊かな生活状況にあった。

次に、調査対象者の意識についてみると、家族観については、特に性別役割分業についての固定的な意識――女性は家事や育児を担い、男性は仕事を担う――については、すべての調査対象者がこの考え方に否定的であった（問 11 の C)。男性が家族を養うべきであるという考え方についても、約 6 割が否定的であった（問 11 の A)。職業観については、ほとんどすべての調査対象者が、将来正社員として働くことを希望している。職種については、約半数が、公務員等の事務的職業に従事することを希望している。女性の仕事と結婚との関わりについては、調査対象者の過半数が、女性の望ましい生き方として、結婚、出産後も就業継続する生き方を挙げている。

以上から、本調査の調査対象者においては、経済的自立については、将来正社員として職業生活に従事することで、経済的自立を達成し得ること、また情緒的自立については、固定的な性別役割分業意識にとらわれずに家族を形成することで、情緒的自立を達成し得ることが推察される。

3．本研究の知見

本研究の聞き取り調査および調査票調査から得られた知見をまとめると、第 1 に、結婚観および家族観についての分析結果からは、調査対象者の大学生においては、職業に従事することと､自身のための自由な時間を確保することとが第一義的目標に据えられており、結婚や将来の家族形成については、必ずしも成し遂げるべき目標には据えられていない傾向にあった。一方、調査対象者の（定位）家族における、親の、結婚や家族形成についての価値観や行動は、調査対象者の結婚観や家族形成観の構築に対して何らかの影響を及ぼすことがうかがえた。従って、調査対象者においては、結婚や家族形成についての親の価値観や行動を内面化した上で、将来の結婚や家族形成についての自己の態度を決定しているということが推察される。

第 2 に、職業観についての分析結果からは、親の職業ないし就労形態が、調査対象者の職業／進路選択や将来の働き方についての判断に対し、何らかの影響を及ぼすこと、また

調査対象者の将来の進路選択に対する不安軽減のためには、相談等を行うことができる、信頼関係にある身近な他者（友人や先輩等）の存在が、ある程度有効であること等が示された。さらに、就労の場の選択についてみると、調査対象者が、自身の生まれ育った地域（地元）に対して愛着をもつ場合や、（地元における）親との関係性が良好である場合等においては、就労の場として、地元も選択肢の一つになり得ることが示唆された。これらの知見についての分析および提言については、続く章で明らかにされる。

以上から、調査対象者においては、将来の結婚や家族形成、また職業選択における態度を形成するうえで、特に親や家族の価値観ないし行動が、何らかの影響を及ぼしていることが指摘できる。すなわち、調査対象者の大学生においては、親の価値観や行動を内面化することによって、結婚に対する価値観を形成する、あるいは親の就労状況を内面化することによって、職業選択や就労形態についての態度を決定する等の傾向がうかがえた。したがって、調査対象の大学生において、親や家族のような、大学生における身近な存在は、大学生が将来の家庭生活や職業生活に対する価値観や態度を形成する際の、重要な準拠的個人ないし準拠集団として位置づけられていることが推察される。ゆえに、親をはじめ、大学生と信頼関係にある身近な（年長の）他者が、大学生に対し、家庭生活や職業生活についての多様で豊かな経験を示すことは、大学生が社会的自立のための価値意識を形成するうえで重要な役割を果たすといえるだろう(Merton [1949]1957=1961)。

文献

Havighurst, Robert J. 1953. *Human Development and Education*, 1st ed. New York: Longmans, Green.（＝1995. 荘司雅子監訳. 『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部.）

Henri, D. C., L. J. Morrell, and G. W. Scott. 2018. "Student Perceptions of Their Autonomy at University." *Higher Education.* 75(3): 507-16.

Lewis, Jane, Anne West, Jonathan Roberts, and Philip Noden. 2015. "Parents' Involvement and University Students' Independence." *Families, Relationships and Societies.* 4(3): 417-32.

Merton, Robert King. [1949]1957. *Social Theory and Social Structure*, revised ed. Free Press.（=1961. 森東吾ほか訳.『社会理論と社会構造』みすず書房.）

奥村弥生・森田愛望・青木多寿子. 2019. 「大学進学時の進路選択における親の関与と進学後の自立および適応との関連」『心理学研究』90(4): 419-25.

Wray-Lake, Laura, Ann C. Crouter, and Susan M. McHale. 2010. "Developmental Patterns in Decision-Making

Autonomy Across Middle Childhood and Adolescence: European American Parents' Perspectives." *Child Development*. 81(2): 636-51.

結婚観・家族観編

第 1 章　大学生の家事実践経験が生み出す性役割に関する意識についての研究

山田　真理子

1.　問題の所在

日本では、戦後「夫は仕事、妻は家事・育児」という性役割によって分業を行う夫婦のスタイルが定着していた。しかし、2000 年ごろから夫婦共働き世帯がサラリーマンの夫と専業主婦の妻からなる世帯を上回るようになった。男性の育児休業の取得が奨励されたり、「イクメン」「専業主夫」が注目を集めたりと、それまで女性が担うべきものとされてきた家庭での家事・育児を行う男性が今日では評価されるようになっている。また女性では、1986 年の男女雇用機会均等法の施行により雇用において男女を平等に扱うことが定められ、働く女性の活躍に期待が寄せられるようになった。性役割意識の面においても、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に否定的な人々は男女ともに年々増えており、今後ますます男女が平等に仕事でも家庭でも活躍することが希求されていくように思う。

しかし、男女共同参画社会が目指され外で働く女性が増えている一方で、男性の家庭での家事参加は進んでいない。2016 年の男女の家事時間（家事、介護・看護、育児、買い物の合計）は、男性で平均 44 分、女性で 3 時間 28 分となっており女性に大きく偏っている（総務省 2017）。共働き夫婦に限定しても、家事の女性への偏りは顕著であり、今日の日本社会では「男は仕事、女性は家庭と仕事」という新たな性別役割分業が求められていると言える（森本ほか 2000）。こうした現状をふまえ、本章では、大学生の視点から男性の家事参加を促進し男女平等参画社会を実現するための考察を行うこととする。

2.　先行研究

本節では先行研究による知見として、男性の家事参加に関する研究、大学生の性役割意識に関する研究、大学生の家事実践に関する研究の 3 点を紹介する。

2.1　男性の家事参加に関する先行研究

「性役割」とは、「男女という性別を理由に、社会的に割り振られた一連の性格・態度・行為の類型」（社会学小辞典[1977]2018）と定義されるもので、生物学的な男女の差異に由来する役割というよりも、文化や社会に応じてとりきめられた役割を意味する。

日本の夫婦の就業形態の変遷をたどると、日本では高度経済成長期に、性役割によって分業を行う、ホワイトカラーのサラリーマンの夫と専業主婦の妻というスタイルが定着したとされる。しかし、その後女性の雇用労働への進出が進み、2000 年ごろからは、「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」よりも「雇用者の共働き世帯」が上回る実態となっている（内閣府 2020）。

夫の家事参加をめぐっては、さまざまな仮説が提唱されている。相対的資源論は、家事分担は男性と女性が互いの関係に持ち込む資源の大きさを反映しているとする理論である。この理論によれば、多くの資源（学歴、収入、職業威信など）を保有している方は、それらの資源を利用して家事分担から免れようとするとされる。時間的制約論では、男性も女性も必要に応じて、時間の制約の許す範囲で家事を行なっていると考えられる。イデオロギー/性役割論によると、性役割に関して平等志向を持つ男性や女性は、伝統的な性別役割意識を持つ男性や女性に比べて、家事をより平等に分担しようとする。ニーズ仮説は、家事や育児のニーズそれ自体が大きければ夫の家事参加が増すと考える説であり、代替資源仮説では、日本において特徴的な同居世帯における母親の家事参加が夫の家事参加を減少させると考えられている。また、情緒関係仮説は夫婦の良好な情緒関係が夫の家事参加を促進するというものである（岩井・稲葉 2000）。

2.2　性役割意識の形成における親の影響についての先行研究

大学生の性役割意識の形成における親の影響を論じた研究では、研究者によって見解が異なっている。桑畑（1997）は、母親の就労形態と父親の家事への関わり方によって大学生の性役割意識に違いが見出され、それらの影響は父親の家事参加より母親の就労の方が大きく、女性大学生より男性大学生がその影響を受け、特に専業主婦の母親を持つ大学生ほど男女の共同参画に否定的な態度を示すと述べている。一方、山下（2002）は、男性大学生では母親の就労形態による性役割意識への影響に差が見られないものの、どちらかといえば母親が就労している者の方が、母親が専業主婦の者よりも伝統的な性役割意識をより抱いているのに対して、女性大学生では母親が専業主婦の方が特に伝統的な性別役割意

識を抱いていると示している。

2.3　大学生の家事実践に関する先行研究

大学生の家事実践状況に関する先行研究では、一人暮らしの大学生の方が実家生よりも、より家事をしていることが明らかとなっている（藤田 2016）。また、一人暮らしの者よりも実家で生活している者の方が伝統的性役割志向を強く持つ傾向があることを示した研究（山下 2002）では、その理由について、一人暮らしをすることで男女関わらず最低限自分の生活を営むための作業を自力で行わなければならなくなるため、女性のみが家事を負担すべきという考え方に賛同しなくなる、また、実際に家事を自分でこなすことでスキルが身につき、男女ともに結婚後に家事をすることに抵抗がなくなる、と考察されている。

3. 研究の目的

一人暮らしの大学生の大半は、大学入学前の時点では家族と暮らしているために家事経験が乏しく、大学生になってから家事を行い始める。筆者は、大学生期に一人暮らしをして家事を行う経験が、家事に関する性役割意識に影響を及ぼす可能性があると推察する。また、大学生は卒業後の生活についても真剣に思い悩むようになる時期である。高校までは親が全面的に行っていた家事を自分自身で行う経験が、例えば、「家事の大変さがわかったので、将来は夫婦平等に家事を分担するようにしたい」「家事は大変で不得意なので、将来は自分の代わりに家事をしてくれる専業主婦/主夫と結婚したい」というように、大学卒業後の将来設計に何らかの影響を与える可能性が考えられる。そこで本章では、大学入学前（過去）、大学在学中（現在）、大学卒業後（未来）という 3 つの視点から、大学生の家事実践経験がもたらす影響を検討すべく「大学生の家事実践経験が、性役割意識や大学卒業後の将来設計へ何らかの影響を及ぼす」との仮説を設定する。そして得られた知見から、男女共同参画社会の実現へ向けた提言を行う。

4.　調査の概要

2021 年 9 月に、大学生 4 人に対して聞き取り調査を行った。表 1.1 は、本章の調査対象者の属性についてまとめたものである。対象者の過去（大学入学前）、現在（大学在学中）、

未来（大学卒業後）という 3 つの点から、家事に関する様々な質問をした。なお、家庭内での労働には、家事に加え育児も含まれる場合が多いが、本調査では対象者を大学生としていることから、家事にのみ焦点を当てることとした。

表 1.1　調査対象者の属性

	学年	性別	居住形態	高校 3 年生の時の家族構成
A くん	4 年生	男性	一人暮らし	父（専門職）、母（専業主婦）、兄
B さん	4 年生	女性	一人暮らし	父（会社員）、母（専業主婦）、姉、妹
C くん	2 年生	男性	実家暮らし	母（パート）、兄
D さん	4 年生	女性	実家暮らし	祖父母・母（自営業）、姉、妹

5.　調査の結果

5.1　過去（大学入学前）

調査対象者の生まれ育った家庭における家事の実施状況や親の持つ性役割意識は、対象者自身の性役割意識に影響を与えている可能性が考えられる。そこで、過去（大学入学前）に関する質問として、＜家庭での家事がどのように行われていたか＞と＜家庭（親）の家事に対する意識＞の 2 点を尋ねた。

＜家庭での家事がどのように行われていたか＞

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

父親はほとんど家事には参加せず、母親が家事のほぼ全てを担当するといった具体でした。兄と私は、例えばお風呂の掃除とかゴミ出しとか、たまに皿を洗うとかそれぐらいの家事はしていました。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

私が家にいた頃はほとんどお母さんがやってくれてて、料理とか洗濯、洗い物とかも。お風呂掃除はたまにやってって言われたらするぐらいで、自主的にお手伝いをするってことは本当にほとんどなかったです。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

食事に関しては基本母が行っていて、たまに僕とか兄とかが作ってっていう感じでした。掃除に関しては基本的には自分の部屋を自分でやるみたいな感じで、共同のリビング的なところは基本は母がやっていました。あと洗濯とかも基本は母がやっていました。

D さん（4 年生、女性、実家暮らし）

ちょっと言うの恥ずかしいな、私全然何もやってないから……。入学前は特に、主に家事をやっていたのが母親で、掃除と炊事と洗濯と大体の家事は今もなんですけど、大学入学前も（母が）やってくれておりまして、で、おじいさんがお皿洗いや細かい掃除などを担当しておりまして、他の家族は特に何も、あの言われたら皿洗いしたりゴミ出ししたりするレベルですね。ちょっと恥ずかしい。

対象者の家庭では、家事は主に母親によって担われており、対象者は頼まれた時に少し手伝う程度で家事はほとんどしていなかった。父親のいる家庭では、父親の家事参加は全くなかった。

＜家庭（親）の家事に対する意識＞

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

父親は代表的な家父長制の考えを色濃く持っている人間でしたので、家事をやるということに関して全く乗り気ではないというようなタイプでした。母親は、逆にそういう父親を反面教師として育ちなさいというふうに我々は子育てを受けてまいりましたので、男性だから女性だからということは関係なく家事をできる者が家事をしなさい、ていうかどっちもやりなさいというふうに（母が）主張しておりましたし、私も兄もそのような教育を受けて育ってまいりました。

【A くんの父親が、息子である A くんや A くんの兄に対して男性は家事をする必要はないと説くことはありましたか？】

ありませんでした。自分（父親）の中だけでそういう考えを持っていたようです。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

多分人それぞれ違うくて。お父さんは口には出してないけど、全然家事を手伝ったりしないから、おそらくお母さんが専業主婦ってこともあるんだけど、家事はお母さんがするものっていうふうに多分思ってる。お母さんは全然（家事を自分一人で）してるけどそれが普通やとは思ってなくて、全く何にも手伝いがないことに多少の不満は感じてる。けど、多分お母さんの価値観的に「女の人は家の中」っていうのがなんかあるから、心の中では、多分不満はあるけど家事は女の人がするものみたいなのはあるのかなとちょっと思う。お姉ちゃんとか妹、子ども三人に関しては、実家におった頃とかは、お母さんが（家事を）してくれてるから特にすることもなくて、誰がするものとか女の子だからどうこうとかっていうことはなかったかな。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

特に強制されてやるとかっていうイメージはなかったかなって思います。（家事を）やれって言われたこともないし、やらなくていいとか言われたことも特にないかなって感じで、割と僕らの興味というか、やりたいみたいなこと言ったら、じゃあやっていいよってやらせてくれる感じだったかなって思います。

D さん（4 年生、女性、実家暮らし）

私たちは女きょうだいしかいないから、男女のことは言われんかったね。女だからこれしなさいとかは言われてはなかったんですけど、特に年齢のことを口出されてました。あなたお姉ちゃんなんだからって言うのはよくよく小さい頃特に言われたましたね。でもある程度大きくなったら、私もすごい昔から不満に思ってたんだけど、もう妹も小学校高学年くらいになったら（家事をできる年齢のはずなのに、家族から家事をするように言われていなくて）、妹も同じように家事やって欲しいなって思うこともありましたね。でもお姉ちゃんだからするっていうふうによく言われてモヤモヤする気持ちはありました。

父親のいる家庭では、父親は家事に全く参加せず、そうした父親に対して母親は多少なりとも不満を抱いていたようだ。また、「年上のきょうだいが家事をしなさい」というよう

に、年齢に基づいた理由で家事をするよう言われた経験を持つ対象者もいた。

5.2　現在（大学在学中）

調査対象者の現在（大学在学中）の家事実施状況や、家事に対する思いを明らかにするため、＜現在行っている家事＞＜家事をする際の大変なところや悩み＞＜家事をどこで学んだか＞＜家事について誰かと話すことはあるか＞＜一人暮らしを始めた当初と現在で、家事に対する考えや家事スキルに変化はあったか＞の 5 項目を質問をした。

＜現在行っている家事＞

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

家事一般、いわゆる料理、洗濯、掃除、それぐらいだな。料理は週末しかやらないので、週に 2 回。掃除、これは週に 1 回日曜日。洗濯、できる日は毎日、できなくても最低でも 2 日に 1 回。その中で頑張っているもの、料理かな。レパートリーはないんですけども、自分が食べるものなのである程度自分が食べる中でも満足度を高めるようにしています。逆にあんまり頑張っていないものは、掃除はあんまりしてないよね､正直｡特に自分で掃除をしていて初めて気づくんですが、例えば水回りとか窓など、そういう今まで思いもよらなかったところの汚れというものが取りづらく、掃除をする気も起きなくなる。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

自炊は、現在大学入ってから（するようになった）っていうけど、1 年 2 年の時と 3 年 4 年で結構違うくて。1、2 年の時は学校行く機会が多かったしミールカードとかもあったから、家で作るって言ってもそんな大したものは作らん。ご飯になんかかけて食べるとか。学校で食べることが多かったから、そんなに 1、2 年の時は自炊してなかったけど、3 年生なって自粛期間とかもあったし、あと学校行くこともなくミールカードもなくってなったら、バイトがあったらせんけど、毎日ほぼ何かしらを作ってるかな。毎日作るけど、（自炊に）かける時間と、毎回ちゃんと考えてするかには結構差がある。洗濯。2 日 3 日に一回で、洗濯が溜まったらするぐらい。掃除。頻度は 2 日 3 日に一回、掃除機をかける。髪の毛が目立ってきたら掃除機をかけるぐらい。あとはその辺に溜まった埃とかはほんまに不

定期。人が家に来るとかちょっと夜中に気になった時にやるとか。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

（大学入学前と現在とで比較して、行う家事は）基本的にはほぼ同じ（掃除、料理)かなって思います。大学入ってからの期間でもちょっと変化があったりして。最初の入りたての頃とかは基本的に全部授業もオンラインだったので、それなりに時間はあるみたいな状態だったんですけど、でもその頃アルバイトとかしてて、結局料理を作る時間は減ってたような気がします。で、大学が一時的に対面ができるみたいな時は、やっぱり通学に時間がどうしてもかかってたので、その頃も料理とかの頻度はだいぶ少なかったかなって思います。2 年生になって、一時的にアルバイトが入ってなかった期間があって、その時とかは、大学も（対面授業があるのでキャンパスに）行ってはいたんですけど毎日ではなかったので、空いてる日とかで家にいる時とかは、お昼ご飯を自分で作ってみたりはしてたと思います。

D さん（4 年生、女性、実家暮らし）

（行なう家事は大学入学前と）全く変わってない。（家事をするように親から）言われるっていう変化もなかったな。

一人暮らしの学生は、大学入学を機に料理・洗濯・掃除といった家事全般を行なうようになった一方で、実家生の行う家事に変化はなかった。また、大学での授業の頻度や実施形態（対面・オンライン)、アルバイトの状況に応じて、行う家事の内容に変化が見られた。

＜家事をする際の大変なところや悩み＞

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

一人じゃ自分の持っているツールじゃどうにもならない汚れ、特に窓周り。だから処理するには業者を呼ぶなりなんなりしなきゃなんないな、というところは非常にめんどくせえなと思う。料理するときに、一人で一人用のものを作るっていうのは時々楽しくない。なぜかというとそれを食べるのも一人なので、大体結果が見えてるからっていうところが、結果というか気分の高揚具合だよね。それが

予想できるからっていうものがあり、楽しくない時はあるかなって感じですね。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

意外と一人暮らしし始めて初めて（家事を）やったけど、全然家事自体は負担じゃなくて。まあ掃除とかは家が散らかり始めると「あー掃除せな」っていう負担にはなるぐらいで、料理もめっちゃ嫌いなわけでないし、洗濯掃除もそこまであんまり負担って感じはないかな。当たり前、ルーティーンとしてやってるって感じ。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

困ってるというか、同時並行で進めることが僕あんま得意じゃなくて。特に料理とかなんですけど、なかなか同時にこれもやりながらあれもやらなきゃみたいなのがあんまり得意じゃないので、そこら辺はちょっと苦手だなって思ってます。

D さん（4 年生、女性、実家暮らし）

家事をする上で嫌なことはないけど、よくおじいちゃんから、おじいちゃん結構口うるさい性格で（家事について）言われるんだけど、「何も家事もしないくせに、よう人のこと言えるな」みたいに口喧嘩するとき。まあすればいいって話なんだけどね、私がね。でもちょっとやだなってふうに思いますね。ただ（私が家事を）やらんってことを（おじいちゃんが）すごい根に持ってるみたい、がちょっと嫌かな。

簡単には取り除けない汚れの掃除が大変、一人で料理を作って一人で食べるのは楽しくない、家事の同時進行が苦手、といった家事の実施そのものに関する苦労のほか、同居する家族から家事をしていないことを非難されるのが嫌という意見や、家事は負担ではないという意見など、さまざまな回答が得られた。

＜家事をどこで学んだか＞

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

洗濯。母親から学びました。私は大学入学までは洗濯機の回し方も知らなくて、

洗濯機回すよりパソコン使う方が簡単だと思っていたようなタイプの人間なので、まず洗濯機の回し方を教えてもらった。干す、乾かすぐらいは（入学前も）やってたから、今までの経験の中で自然に覚えていったんだけども、例えば洗剤と柔軟剤、漂白剤の違いとかね、そういうものも教えてもらって。掃除。これは経験です。特に誰かからスキルを身につけてということはない。料理なんだけど、それまでも家庭科の授業とかで軽く料理を教えてもらうってこともあったし、日々の生活の中で母親が料理をしている姿を見て、それを思い出しながら作るってこともあるんだけど、大学生になってからはいわゆるレシピサイトですね。そういうものを自分で色々調べながら使えるものを学んで料理は覚えていったのかなと思います。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

掃除はどこで学んだかはわからんくらい。お母さんがやってるのを見たり、学校でも掃除してきたやん。洗濯は全くやり方わからんかったけど、こっちにきて初日にお母さんが洗濯機の使い方教えてくれて。お母さんと一緒に買いに行った洗剤、柔軟剤、漂白剤とかを使っとったけど、そのあとは友達と話しててこの柔軟剤いいらしいよとか､実際使うかどうかは別にして洗濯については学んでるかな。自炊は YouTube かな。あんまり家で学んだ記憶がなくて。だから最初とかは、お鍋作ろうと思って、トマト鍋作ろうと思って、水にトマトを切って入れて潰してみたいな、ほんまに（大学入学当初は）全く知識がなくて。だから（学んだのは）家ではないかな。あと友達から聞いたり。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

掃除は見様見真似というか、兄とか母とかがやってるのを見ながら、多分こうするんだろうなみたいな感じでやってると思います。料理はいわゆるレシピサイトというか、そんな感じのやつとかを見たりしながらって感じです。

D さん（4 年生、女性、実家暮らし）

私がやる家事の範囲じゃけ、本当にもう簡単なものなんだけど、基本家族に教えてもらうかな。お風呂掃除初めて頼まれたときに、こうやるんよって初めは一緒

にやったりとか、あとは米とぎもそうだね。お米とぐ時も最初はこうやるんだよって教えてもらいながら、ありましたね。

掃除は家庭や学校で見様見真似で身につけ、料理はレシピサイトや YouTube などのネットを活用して学んでいた。また、一人暮らしの学生は一人暮らしを始めた際に、母親から洗濯機の使い方を教えてもらったと述べた。

＜家事について誰かと話すことはあるか＞

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

ありますよ。まず母親。これは困ったときに「助けてママ」と言うことが（一人暮らしを始めた）最初の方ございましたので、そこで教えてもらったりしてたかなと思います。友人。そうですね、一人暮らしの洗濯が大変だねえ、ぐらいの話をすることは稀にありますが、そこまでめちゃめちゃ話をするということはございません。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

お母さんと電話した時とかに「ちゃんと家事やってる？」みたいな。で話すついでに「今日こんなん作ってね」とか「今日ちゃんと掃除した？」「した」とか。自炊に関しては友達から何々作ったとかいう話を聞いたり、じゃあその作り方教えて、とかはあるけど、洗濯とか掃除に関しては友達と喋ることはあんまりないかな。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

あんまりないかなって思います。

D さん（4 年生、女性、実家暮らし）

うーんないね。全く家事のことは言わないね。私の周りじゃあちょっと、家事は話題にならないね。

一人暮らしの学生は、母親と家事について話すことがある。友達と家事について話すこ

とは少ないものの、今までには料理のレシピや家事の苦労について話したこともあるようだ。実家生は、家事について誰かと話すことは無いと回答した。

＜一人暮らしを始めた当初と現在で、家事に対する考えや家事スキルに変化はあったか＞
現在一人暮らしをしている A くんと B さんにのみ質問を行った。

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

ありますまずスキル。時短で作れる料理が増えた。あとは世の中で売ってる食品の適正な値段がどれぐらいかっていうことがわかったし、作れる料理のレパートリーが増えている。母親に対する感謝の気持ちがかなり芽生えてきている、などなど。あとはそうですね。家にいる時は、まあ母親がやるだろうという考えのもとで積極的に（家事を）やることはなかったんですが、一人暮らしをすると僕しか掃除をする人はおらず、洗濯をしてくれる人もおらず。自分がやらないとゴミ屋敷になるので、積極的にやるようになった、というところは変化だったのかなと思います。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

帰省した時に、今まで洗い物とかは全部シンクに水につけて置くだけだったけど、洗い物はするようになったな。「それもやらなきゃ」「お母さんが大変だからやらなきゃ」っていう感覚よりも、あるから洗うっていう感じ。別にお手伝いのつもりではなく、ルーティーン的に洗い物はしてる。スキルの変化は、自炊に関しては作れる料理の幅が増えたりとか、時間が短くなったとか味が美味しくなったとかが変化。洗濯は、私全く知識なかったからとりあえず全部詰め込んで昔はやってたけど、ネットに分けることとか色落ちするものがあることとか、入れすぎると洗濯機が爆発するとか、あんまり洗濯機回すと良くない服があるとか（今は気をつけるようになった）。

一人暮らしをしている学生は、一人暮らしを始めた当初と比べて、現在は家事の知識やスキルが身についたと回答した。また、母親に対する感謝の気持ちや家事を自主的に行おうという積極的な姿勢が伺えた。

5.3　未来（大学卒業後）

調査対象者の性役割に関する意識を探るため、＜将来の家事について＞＜専業主夫に対する考え＞の 2 項目を尋ねた。

＜将来の家事について＞

＜結婚願望あり（B さん、C くん、D さん）＞

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

理想は私もずっと働いていたいって思うから、（家事の分担は夫婦で）完璧なる五分五分がいい。ちょっとでも六四ぐらいになった時点で多分どっちかの不満が溜まるんかなって思う。私が家事は女の人がするものっていう考え方が一切ないから、だからおんなじ仕事をしているのに、家事の量が差が出てくるとどっちかが不満に思いそうだから、完全な五分五分がいいって感じ。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

（家事は）僕ができる範囲とかはなるべく僕もやりつつって感じで。それこそ掃除とか料理とかはある程度はできるかなって思うので、なるべく僕もそういうところはしながら、で、他は洗濯とかは相手にも頼りながらって感じになるのかなって思います。

D さん（4 年生、女性、実家暮らし）

結婚しても専業主婦じゃなくて正社員でずっと働いていきたいなって思ってますね。お仕事やめたらどうしても配偶者の人の収入に頼って生きていかなきゃいけないってなるじゃんか。それが私のプライドっていうか、なんだろうな、家事も十分お仕事の、お金の発生しないお仕事のうちの一つだと思ってるんだけど、どうしても自分の力でお金を稼いで家族を支えていきたいっていう強い気持ちがありまして、そうするとお仕事辞めるっていうのは嫌かなっていうふうに思ってます。でも家事をやりたくないっていう気持ちもある。

＜結婚願望なし（A くん）＞

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

まず（家事を）週末に管理しなければならないので、なるべく時間をかけずに全てを終わらせるということが一つ。もう一つは、将来的に給料その他の事情によりお金に余裕が出たら、ハウスキーパーの人の仕事を使うのもいいかなと思ってます。

結婚願望のある 3 人は、夫婦で家事を分担して行いたいと回答した。特に女性大学生 2 名においては、家事は平等に分担し、対象者自身も正社員として働き続けたいという強い願望がうかがえた。一方結婚願望のない対象者は、なるべく時間をかけずに家事を行いたい、また将来的には家事の代行サービスの利用も考えていると述べた。

＜専業主夫に対する考え＞

専業主夫とは、「妻が経済的扶養機能を担い、フルタイム職に就かず、家事や育児に重点をおいている男性」（柳 2018）のことである。

A くん（4 年生、男性、一人暮らし）

まずスキルを持っていて大変素晴らしいと思います。ただ、社会から受ける外圧的な目線は厳しいものがあるだろうなというふうに思いますね。理解は進んでないと思いますし、理解する必要もないんじゃないかと思う方々もいらっしゃると思いますね。（女性が）自分より給料が高い男性との結婚を志向するという話があるということを考えると難しいんじゃないかな。

B さん（4 年生、女性、一人暮らし）

働きたくなくて専業主夫するよって言って、でも家でぐうたらしてるって感じだったら一緒に働けたらいいなとは思うけど、本当に家で専業主夫やりたいって感じだったら全然それはいいと思う。ヒモになりたいみたいな感じだったら素直に応援はできなさそうだけど、積極的な専業主夫だったら全然いいと思う。

C くん（2 年生、男性、実家暮らし）

お互いに納得してれば、どっちがどっちとかはあんまり関係ないのかなって思

ってて。パートナー同士で納得が合意ができれれば、特に僕らが口を出すことじゃないんかなって思います。

D さん（4 年生、女性、一人暮らし）

できるんだったら旦那さんに専業主夫してもらうっていう気持ちもありますね。私自身の力でめちゃくちゃ稼いで一馬力で行けるんだったら、旦那さんに家庭のこと一切任せて生きていけるんだったら生きていきたいっていうふうに思いますね。自分がお仕事辞めるのはちょっと考えらえないけど、旦那さんが家庭にいてくれるっていうんだったら全然歓迎しますね。

社会では未だ主夫に対する理解が進んでいないのではないか、名ばかりの主夫となってしまって家で怠けて過ごされるのは歓迎できない、などの意見も出たが、全体的には対象者皆が専業主夫に対して肯定する態度を示した。

6. 考察

6.1 先行研究との比較

性役割意識の形成における親の影響についての先行研究（桑畑 1997、山下 2002）では、研究者により見解は異なるものの、性役割意識の形成に親が何かしらの影響を及ぼすことが示されていた。しかし本研究では、先行研究で明らかにされたような傾向は観察されなかった。調査対象者の大学生 4 人は皆、大学入学前の家庭環境や家事実施状況に関わらず、そして対象者の性別関係なく家事をすることに肯定的であった。

加えて本調査では、一人暮らしの大学生の方が実家暮らしの大学生よりも家事を行なっていることが明らかとなった。この結果は、大学生の家事実践状況について検討した藤田（2016）により示された知見と同様である。一方で大学生の性役割志向については、山下（2002）の研究では、一人暮らしの者よりも実家で生活しているものの方が伝統的性役割志向を強く持つ傾向があるとされているが、こうした傾向は本研究では見られず、一人暮らしの学生と実家生との間に、顕著な性役割志向の違いは見出されなかった。

6.2　本研究の知見

今回の調査では、一人暮らしの大学生の家事実践経験は、スキルや家事へのより積極的な態度の習得につながることがわかった。一方、一人暮らしの大学生と比較して、家事をあまり行っていない実家暮らしの学生が一人暮らしの大学生よりも強い性別役割分業的な考えや将来設計を持っているというわけではなく、一人暮らしの学生と実家生との間に顕著な違いは見出せなかった。本調査では対象者が 4 人と少なかったが、大学生の家事実践経験は、家事の技能にのみ影響し、性役割や将来設計など意識面には直接的な影響を及ぼさない可能性が示唆された。ただ、今回は大学生のみが対象であったが、大学生に限定せず既婚者を対象に、結婚以前に一人暮らしをしたことがあるか否かに着目して今回と同様の調査を実施すれば、一人暮らしの家事実践経験と性別役割意識や将来設計との関係について異なる結果が得られるのではないだろうか。

7.　おわりに

今回の研究を通じて、今の大学生は家事に関して、性役割的な意識を強く持っているわけでは決してないことが垣間見えた。日本は無償労働の男女比が女性：男性＝1：5.5 となっており、他の OECD 諸国と比べ、無償労働が女性に偏るという傾向が極端に強い（内閣府男女共同参画局 2020）。家庭内での家事に男性が積極的に参加することが求められているものの、有償労働に目を向けると、日本男性の 1 日あたりの有償労働時間は OECD 諸国の中で最長の 452 分となっており、男性は家庭外での労働に多くの時間を費やしている（OECD 男性平均は 317 分）（内閣府男女共同参画局 2020）。つまり日本では、男女ともに有償・無償あわせた総労働時間が極めて長いのであり、こうした限界まで働いている現状で、安直に男性の家事に対する意識変革を求めるだけでは男性の家事参加は進まないだろう。「男は仕事、女は家庭と仕事」という日本の現状を打破するには、家庭内の労働だけでなく家庭の外も含めた労働全般における見直しが必要であることを痛感した。

文献

藤田智子,2016,「大学生の家事実践状況と母親の就業状況及び高校時代の家事実践との関連」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』67(2),東京学芸大学学術情報委員会, 303-310

岩井紀子・稲葉昭英,2000,「家事に参加する夫、しない夫」森山和夫編『日本の階層システム 4 ジェン

ダー・市場・家族』, 東京大学出版会

桑畑美沙子,1997,「性役割に関する大学生の意識と教育課程研究（第 2 報）: 父母の生活形態の違いによる性別役割分業意識と学校教育のあり方」『日本教科教育学会誌』20(19),日本教科教育学会, 17-25

森本恵・中嶋有加里・山地健二,2000,「大学生女子の結婚、出産、育児および就業に関する意識調査」『高知医科大学紀要』16, 高知医科大学, 65-76

内閣府男女共同参画局,2020,『男女共同参画白書令和 2 年版』（2022 年 1 月 5 日取得, https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/html/column/clm_01.html）

濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘,2018,『社会学小辞典』新版増補版第 6 刷,有斐閣

総務省統計局, 2017『平成 28 年度社会生活基本調査――生活時間に関する結果――』（2022 年 1 月 5 日取得, https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf）

柳煌碩,2018,「現代日本社会を生きる主夫たちの男性性――8 人の主夫のライフストーリーを手がかりに――」『家族社会学研究』30(1),日本家族社会学会, 57-71

山本玲子,2002,「母親の就労形態が男女大学生の伝統的性役割観に及ぼす影響について」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』(2), 埼玉学園大学,89-97

第 2 章　定位家族での家庭環境が大学生の就労・子育て意識に及ぼす影響

竹弘　楓花

1. はじめに

1.1　本章の目的

本章の目的は、定位家族から生殖家族への移行期に当たる大学生へのインタビューを通して、定位家族における生育環境や家族との関係性が、彼らの就労・子育て意識にどのような影響を及ぼしているのかを検討することだ（定位家族・生殖家族の定義は 1.2 で後述する）。その際、①就労に関する意識、②子どもを持つことに関する意識、③子育てにおける性別役割分業意識の 3 つの観点から考察を深める。なお、性別役割分業とは、「男は仕事、女は家庭」というように、社会生活において性別によって固定的な役割を期待されることである（デジタル大辞泉「ジェンダーロール」）。

この目的の背景には、少子化の課題がある。1973 年におよそ 200 万人だった出生数は、2019（令和元）年には、その半数以下の 87 万人にまで減少しており、今後も減少し続けると予想されている（厚生労働省 2019）。このような現状の要因の 1 つに、子どもを持つことが選択肢の 1 つにすぎなくなっていることがある。女性のライフコースの多様化や性別役割意識の変化に伴い、昨今、必ずしも結婚して子どもを産むことだけがスタンダードではない。これからライフコースを選択する大学生には、就労・子育てに関して、今まで以上に多くの選択肢が用意されていると言える。したがって、大学生の就労・子育て意識の形成要因を検討することは、これからの社会を考えるうえで重要性が高い課題だと考えられる。

1.2　家族形態の変化

本項では、若者の就労・子育て意識を検討するうえで、家族形態に注目したい。一般に、人々はその生涯に 2 つの家族を経験する。1 つ目は、自分が子どもとして生まれ育った家族のことであり、これを定位家族という。2 つ目は、自分が結婚や出産によって新しくつくる家族であり、これを生殖家族という（日本大百科全書「家族」）。生殖家族においては、結婚や出産・子育てにより新たな家庭を築くこと、また、就労により家庭の生計を自ら立

てることが主な機能となる。筆者は、若者の就労・子育て意識の形成には、自身が育った家庭環境、つまり定位家族での経験が影響力を持つと仮説を立てた。1.1 で述べたように、本研究では、大学生へのインタビューを通して、定位家族での家庭環境が、大学生の ①就労に関する意識、②子どもを持つことに関する意識、③子育てにおける性別役割分業意識に及ぼす影響について検討する。

2. 先行研究の検討

まず、就労意識に関する調査・先行研究について、村上（2000）は、有職の母親やロールモデルの存在が、女性の就業継続を促進する要因になっていることを指摘している（専門職に従事する女性 381 名を対象とした「働く女性の生活と意識についてのアンケート」）。また、大脇ら（2009）によると、就職先企業を最終決定する際の相談相手を尋ねた質問では、母親と回答する学生が最も高い割合となっている（大学 3 年次生・4 年次生 302 名を対象とした「大学生を対象とした就職意識調査」）。このことから、就労意識の形成においては、母親との関わりが大きな影響力を持つと考えられる。

次に、子どもを持つことに関する調査について、厚生労働省（2013）の調査によると、「子どもがいると生活が楽しく、豊かになる」「子どもを持つことは自然なことである」と回答した若者が多い。このことから、子どもを持つ事に対して肯定的な感情を抱いている若者が多いことが分かる（15 歳～39 歳の男女約 3000 人を対象とした「若者の意識に関する調査」）。

最後に、子育て意識に関する研究について、安東（2013）は、男女平等を理想としつつも、「子育てはやはり母親でなくては」「自分優先は母親失格」などの質問項目について支持する学生が多い現状を指摘している（大学生 150 名を対象としたアンケート調査）。また、平岡（2019）は、日本の学生が「子どもが小さいうちは母親が面倒を見るべきである」という保守的な考えを持つ傾向があると指摘している（女性大学生 150 名を対象としたアンケート調査）。このことから、現代の大学生は、男女平等を理想としつつも、子育て意識に関しては性別役割分業の影響力を強く受けていると推察される。

3. 本稿の分析

3.1 調査の概要

2021（令和 3）年の 8 月～9 月にかけて、大学生男女 6 名にインタビュー調査を行った。

調査対象者はすべて仮名で表記しており、基本的な属性は表 1 のとおりである。なお、アオキさん、テラウチさん、ホンダさんに対しては対面でのインタビュー調査を、マツモトさん、アイカワさん、ユハラさんに対しては、Web 会議システム Zoom を用いてインタビュー調査を行った。

表 2.1　調査対象者の属性

仮名	年齢	性別	これまでの両親の就業形態
マツモト	20	女性	両親フルタイム
アオキ	21	男性	両親フルタイム
テラウチ	20	女性	両親フルタイム　＊子育ては祖母の助けを得る
アイカワ	21	女性	父親 フルタイム 母親 専業主婦の後、子が成長してからパート
ユハラ	21	男性	父親 フルタイム 母親 専業主婦の後、子が成長してからパート
ホンダ	20	女性	父親 フルタイム 母親 専業主婦の後、子が成長してからパート

3.2　就労に関する意識

結婚や出産などのライフイベントに際して、自身の仕事は継続したいかどうか尋ねたところ、今回の調査対象者は、全員が結婚・出産後も仕事を継続したいと回答した。そのような考えに至った理由として、「就業を継続するのは自然なことだ」「お金を得るために仕事を継続したい」という意見を得ることが出来た。

まず、「就業を継続するのは自然なことだ」と考えている学生として、マツモトさん、アオキさんの語りを挙げたい。両親が教師であることが幼いころからの自慢だったというマツモトさん（女性）は、次のように語っている。

小さい頃から両親が教師っていうのが嬉しかったので、寂しかったとかはないし、自慢だったのかな（中略）（自身の将来については）仕事しっかりしたいなあとは思っているので、今のところは、仕事いっぱいして結婚しない、仕事に生きるみたいな感じの自分が一番想像できるなあと思います。両立っていう方法ももちろんあって、それを選択する未来も全然あるけど、いかんせん私が小さい頃から自分結婚しないみたいな感じで思ってきたのがあるので、仕事いっぱいして、仕事命、仕事に生きるみたいな自分が一番想像しやすいだけかなと思います。

同じく、母親のフルタイム就業に言及したアオキさん（男性）は、将来のパートナーに求めることとして、「できればフルタイムで働いてほしい」と話す。

母親がしっかり働いて今も収入もそれなりにあるから、すごいことだなあと思います。しっかりと遅くまで働いているのに、家事も育児もやってくれてるし、いろいろ話し相手とかになってくれているし、なんだかんだ、見習うとしたら母親かな（中略）（パートナーに求めることは）できれば働いてほしいかな。今までの固定観念というか、母親が働いてるからそういうものだと思ってるし。

このように、マツモトさん・アオキさんは、母親のフルタイム就業の影響を受けて、「就業を継続するのは自然なことだ」と語っている。2 名が生まれた 2000 年代初頭は、就業を継続する女性よりも、出産を機に退職する女性の方が多かった（国立社会保障・人口問題研究所 2015）。そのような時代背景の中で、就業継続が自然だという意識を形成するには、母親の就業形態の影響力が大きいと言える。

一方で、マツモトさん・アオキさんとは異なり、テラウチさんは、母親とは違う職業観を持っており、次のように語っている。

（母親の）仕事のキャリアの方が、あんまり昇進とかが少ないみたいで、それを悩んでるみたいなことをチラッと聞いたことがあるから、子育ての方に力を注いだから、キャリアの方は上手くいってなかったりするんかなって（中略）（テラウチさん自身のキャリアについては）結構仕事をするのを、自分のやりがいを満たすよりも、お金を稼ぐため、生活資金を得るためっていう風に捉えてる側面が強いから、もしお

金が有り余るくらいあるなら、仕事っていう条件が無くなっちゃうかもしれない。

このように、テラウチさんは、母親のキャリア重視志向とは異なり、仕事において収入面を重視する意識を持っている。母親の就労が子どもの職業観に直結するケースばかりではないことが窺える。

3.3　子どもを持つことに関する意識

次に、子どもを持つ事についてどのように考えているか尋ねた。子どもを持つことに積極的な意見としては、「子どもを持つのは自然な事だ」「子育ては楽しそう」という回答が得られた。一方で、「子どもをつくるのは責任を伴う行為である」として、子どもを持つことに消極的な意見も見られた。

まず、「子どもを持つのは自然なことだ」と考えているホンダさん（女性）は、幼少期に母親が作る「ママ友コミュニティ」と関わった経験を語った。

周りとか見てて、「（子どもは）いた方が良いよね」っていう観念があるような気がするけん、普通つくるんかなくらいの認識。お母さんが作るコミュニティが「ママ友コミュニティ」が多くて。実家がマンションなので。そのママ友さんに可愛がられることが結構あったので、単純に、知ってる大人にお母さんが多い。そういうの見てて、子ども作るもんなんかなって思う。

また、「子育ては楽しそう」と話すアイカワ（女性）さんは、子育てにおけるやりがいを重視している。

自分の親も含めていろんな周りの親も見てて、（子育ては）すごい楽しそうだなって思うし、大変そうだなって思う場面もあって。ただ、どっちも経験してみたいなって思ってて。大変そうだなって思ってることの中にも、楽しさとか嬉しさとかがあると思うので、そういう発見もしてみたいなって。

一方で、子育ては責任を伴う行為であるとして、子どもを持つことに消極的な意見も得られた。テラウチさん（女性）は、自身の幼少期について、「やりたいことはやらせてくれ

た」「（習い事は）習字と、ピアノと英語。今思えば、すごいお金かけてもらってる」と話した。そのうえで、将来、子どもの希望を尊重できる環境を整えない限り、自身が子どもを持つことには消極的だと話した。

可愛いからとかそういう理由だけで軽はずみに（子どもを）作るっていうか、そういう風にしていいものじゃないなって。自分にとって、子どもと言えど人の人生を預かることになるから、敷居が高いみたいなのもあるし……将来ちゃんと育てていけるかの不安とか。子どもが「ここに行きたい」とか「これしたい」って言った時に、「ごめんそれお金足りないからちょっと諦めて」みたいな状況は絶対に嫌で。でも、自分の将来の仕事とか相手の選択とかで、そういう環境が作れるかはまだ分からんから、そういう不確かな状況で無責任なことは出来んかな。

また、同じく子どもを持つことに消極的な意見として、マツモトさん（女性）の語りを挙げる。マツモトさんは、母親が自分にした育児に関しては「すごいなあ。よくやってくれたなあ。」と語る一方で、将来の自分が育児の責任を負う立場になれる自信はないと語った。

自分が子どもを育てられるような人間か、って考えちゃいますね。生まれたその瞬間から、その子の人生の責任をある一定の期間、その子の人生を左右しちゃう立場にいるわけで、そんな立場になれる人間か自分はって考えます（中略）自分が責任をもって（子どもを）育てなきゃいけないなっていう気持ちが強い、だから、そんなに、今すごくほしいという事ではないし、むしろ怖いかな。

さらに、ユハラさん（男性）は、自分が出産できるわけではないので、パートナーの意見を尊重するべきだと考えており、自分から軽はずみに子どもが欲しいとは言えないと話した。このように、大学生の語りには、子育てに対する肯定的な姿勢だけでなく、責任感を伴う行為だと考える姿勢も多く見受けられた。

3.4　子育てにおける性別役割分業意識

最後に、子育てをする際の両親の関わり方について、どのような考えを持っているか尋

ねた。その際に、「3 歳児神話についてどう思うか」と問うことで、子育ての関わり方における性別役割意識について検討した。3 歳児神話とは、子どもが 3 歳になるまでは母親が育てるべきだという言説のことだ。その結果、調査対象者の全員が 3 歳児神話を否定し、「子どもにとって適切な環境を作ることが重要だ」「両親どちらもが頼れる存在になることが重要だ」「なるべく 1 人の時間を作らないことが重要だ」という意見が得られた。

まず、「子どもにとって適切な環境を作ることが重要だ」という意見について、自身が「お父さんっ子」だったと話すマツモトさん（女性）は、誰が育てるかよりも、どのような信念を持って、子どもにとって良い環境を作るかが重要だと語った。

自分も、育ててくれたのは基本的に母ですけど、どっちかというと父にべったりだったし。母親が育てるか父親が育てるかっていうよりは、母親とか父親がどういう考え方、どういう気持ちを持って……どういう風に自分の子どもと接しようっていう心次第なのかなって思います（中略）子どもにとって良い環境なら、それが一番いいのかなと思います。その子どもにとって何が一番いいかは、その子にしてみなきゃわかんないから……その子どもがこういう環境だと良いなって思えるものを選択できるような、複数の選択肢がある環境だといいなと思います。

次に、「両親どちらもが頼れる存在になることが重要」という意見について、自身が幼少の頃、父親と関わる経験が少なかったと話したテラウチさん（女性）の語りを挙げる。テラウチさんは、家事についてはパートナーと柔軟に分担を変えることを理想とするのに対して、もし子育てをする機会があれば、育児については必ずパートナーと半々で担当したいと話す。

（父親が）関わらんとかは嫌かな。そういうことしてて、将来認識されなくなるのはそっち（父親）だからっていう。冷たい対応されてかわいそうってなるのはそっち（父親）だから。自分は、お父さんのことあんまり好きじゃなかったから、もっと好かれるように、ちっちゃい頃から接しとけば、今ももっと対応がよかったかもねって感じではある。（父親は）厳しいっていうか、わがままな人っていうか。あんまり好きじゃなかった（中略）（育児を）全部母親がやるから、（子どもは）多分母親に対して一番、基本的信頼感ってのができてくから、そこの部分（育児の分担）を半々にすれば、両方のこと

を信頼できる人間（子ども）ができるんかなって。別に（両親のうち）1 人だけに最初に信頼感を抱く必要はないかなって思うから、初期の世話こそ、半々でやれば、父親も母親も信頼を持てる人になるんじゃないかな。

同様の意見として、父親が物静かだったと話すアオキさん（男性）は、「父親と、もっと砕けた会話もしたかった」と語り、自分が父親になるときは、子どもに頼ってもらえる存在になるよう、積極的に育児に関わりたいと話した。

最後に、「なるべく 1 人の時間を作らないことが重要だ」という意見について、テラウチさん、ユハラさんの語りを挙げる。フルタイムで働く母親に代わって、祖母に世話をしてもらうことが多かったと話すテラウチさんは、将来、子どものそばに誰かがいる環境を作りたいと話す。テラウチさんは、まず、自身の定位家族について話した。

基本おばあちゃんが家にいたから、寂しいとかは思ったことないかな。（母親については）昔は何も思わんかったけど、今は（子どもを）育てるのと仕事両立させるってすごいなっていうのはある。でもやっぱその生活で、今まで親が病気になったりせずに成り立っとったのは、おばあちゃんの力が大きいなとも思う。近くに助けてくれる人がおったから、お父さんほぼ家事ゼロでも、成り立っとったなっていうのはある。

そして、自身の理想の子育てについて、次のように述べている。

フレックスとかテレワークとか、そういうのを上手く使って子育てと仕事を両立できる感じが良いなとは思う。お母さんも両立してたけど、それっておばあちゃん、第三者の手が結構かかってるものだったから（中略）自分がしてもらったみたいに、あんまり子どもがちっちゃい頃に 1 人の時間を作らんような対応ができる仕事と、家庭の両立がいいな。

さらに、テラウチさんと同様の意見として、ユハラさんも、家族と同じ時間を過ごすことを重視している。幼少期に母親が専業主婦だったユハラさんは、「ちっちゃい頃に（母親が）一緒にいる時間を作ってくれたのはすごいありがたかった。」と語り、自身が家庭を築くときも「家の時間を大切にしたい」と話した。

このように、子育てに関する意識については、父親との関わりを理由に「子どもにとって適切な環境をつくることが重要」「両親どちらもが頼れる存在になることが重要」と挙げる学生と、母親・祖母との関わりを理由に「なるべく 1 人の時間を作らないことが重要」と述べる学生が見られた。

4. 考察

前項で整理した大学生の語りと先行研究を照らし合わせ、①就労に関する意識、②子どもを持つことに関する意識、③子育てにおける性別役割分業意識の 3 つの観点から考察を深める。

まず、就労意識についてだ。先行研究からは、大学生の就労意識の形成には、母親との関わりが大きな影響力を持つと指摘されていた。本調査でも、多くの学生が母親の就業に言及しており、おおむね先行研究と同様の結果が得られたと言える。例えば、母親のフルタイム就業の経験から、「就業継続は自然なことだ」と話したマツモトさん、アオキさんなどだ。このことから、大学生の就労意識の形成には、定位家族での母親との関わりが一定の影響力を持つと言える。一方で、テラウチさんのように、母親とは異なる就労意識を持つとの意見を得ることもできた。

次に、子どもを持つことについてだ。先行研究で示した量的調査からは、子どもを持つことに積極的な考えを持つ若者が、消極的な考えを持つ若者を大幅に上回っていた。確かに、本調査でも、アイカワさんは、定位家族での母親との関わりを根拠に子育てに対するやりがいを重視していた。しかし、本調査では、子どもを持つことに消極的な姿勢を示す大学生が複数見られた。例えば、子どもを持つことは人の人生を預かることだと話したマツモトさんやテラウチさんなどだ。このことから、先行研究で挙げた調査とは異なり、現代の大学生は、子育てに対して、やりがいだけでなく責任感を重視する傾向があると言える。

最後に、子育てにおける性別役割分業意識についてだ。先行研究では、子育て意識は性別役割分業の影響を強く受けるという傾向が指摘されていた。しかし、本調査では、すべての調査対象者が 3 歳児神話を明確に否定し、複数の学生の語りから、子育てに関するジェンダー平等志向を読み取ることが出来た（ここでのジェンダー平等志向とは、性別役割分業を支持しないという意味である）。例えば、「誰が育てるかよりも、どのような信念を持って育てるかが重要」と話したマツモトさんの語りや、「父親と母親のどちらもが子育て

に関わるべき」と話したテラウチさん、アオキさんの語りなどだ。このことから、先行研究とは異なり、現代の大学生は、子育てに関してジェンダー平等を志向する傾向があると言える。したがって、これまでのような「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業は、現代の大学生の子育て意識とはかけ離れたものになっていると考えられる。

このように、本調査のインタビューと先行研究の比較を通して、大学生の就労・子育て意識には、①就労意識形成における母親の影響力、②子どもをつくることにおける責任重視志向、③子育てにおけるジェンダー平等志向 の 3 つの傾向があると示唆された。

5. 結論

前項で挙げた大学生の就労・子育て意識に関する 3 つの傾向の形成に、定位家族の影響力がどのように関わっているのかについて、改めて整理する。

まず、就労意識についてだ。前述したように、大学生の就労意識形成には、定位家族における母親との関わりが一定の影響力を持つ傾向があると確認できた。「母親が働いているから就労継続は自然なことだ」という発言からも分かるように、定位家族における母親の就労が、子どものロールモデルとして果たす役割は大きいと考えられる。

次に、子どもを持つことについてだ。現代の大学生は、子育てにおいてやりがいや楽しさだけでなく、責任感を重視する傾向があると確認できた。この傾向の形成には、定位家族における大学生自身の被養育体験が関わっていると考えられる。つまり、幼少期に自分がきちんと育ててもらったのだから、将来、自分が生殖家族を築くときには、半端な気持ちで子育てに臨んではいけないという意識があるということだ。これは、自身の習い事の経験から、子どもの希望を尊重する責任を感じており、子どもを持つことに積極的ではないと話したテラウチさんの語りなどに表れている。なお、本章の調査対象者は、定位家族における経済状況や家族との関係性が比較的良好であり、自身の被養育体験を肯定的に捉える学生が多かった。そのため、自分自身がきちんと育てられたからこそ感じる責任を、特に強く持つ傾向があると推察される。

最後に、子育てにおける性別役割分業意識についてだ。現代の大学生は、子育てにおいてジェンダー平等を志向する傾向にあると確認できた。注目したいのは、たとえ定位家族での両親の子育てが性別役割分業に基づくものであったとしても、学生はジェンダー平等を志向していたことだ。例えば、父親がほとんど子育てに参加していないかったテラウチさんは、将来、育児はパートナーと半々で分担したいと話していた。加えて、定位家族で

の経験を継承したいと話す学生もいた。例えば、幼少期の父親との積極的な関わりを根拠に「誰が育てるかよりも子どもにとって適切な環境をつくることが重要」と話すマツモトさんなどだ。つまり、子育て意識における定位家族の影響力については、プラスの経験は継承し、マイナスの経験は反面教師として改善することで、理想の子育て環境を実現しようとする傾向があると考えられる。

このように、本研究では、大学生へのインタビュー調査を通して、定位家族での家庭環境が、彼らの就労・子育て意識に及ぼす影響を検討した。その結果、①就労意識形成における母親の影響力、②子どもを持つことにおける責任重視志向、③子育てにおけるジェンダー平等志向の 3 つの傾向を見出すことが出来た。そして、これら 3 つの傾向に関して、定位家族での経験が一定の影響力を持つという可能性が示唆された。大学生自身だけでなく、その 1 世代上である親の影響も検討することで、就労・子育て意識における定位家族の影響力を改めて指摘できたと言える。

文献

安東知子. 2013. 「日本社会の性別分業の動向——大学生のジェンダー意識に関する調査から」『高知大学教育学部研究報告』73:131-137

平岡敬子. 2019. 「女子大学生の子育て意識の差——日本, アメリカ合衆国, インドネシア共和国の比較」『日本助産学会誌』33(2):165-172

国立社会保障・人口問題研究所. 2015. 『第 15 回出生動向基本調査』

厚生労働省. 2019. 『令和 2 年版厚生労働白書——令和時代の社会保障と働き方を考える』

————. 2013. 「若者の意識に関する調査」

デジタル大辞泉. 「ジェンダーロール」. Japan Knowledge（2022 年 2 月 14 日取得. https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001029851500）

村上あかね. 2000. 「女性の就労とライフコース——専門職女性を対象に」『年報人間科学』21:207-224

日本大百科全書（ニッポニカ）.「家族」. Japan Knowledge（2022 年 2 月 2 日取得. https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000051197）

大脇錠一. 2009. 「大学生の就職意識に関する調査研究」『流通研究』15: 41-68

第 3 章　家庭環境が大学生の結婚意識に及ぼす影響に関する調査

加島　菜々子

1. 問題の所在

日本における婚姻率は年々低下傾向にあり、生涯未婚率も増加傾向にあるといえる。これらの問題の背景には多くの要因が考えられるが、そのうちの一つに結婚に対するイメージの変化があげられる。本稿では、本人の生まれ育った家庭環境に焦点を当て、家庭環境が結婚意識にどのような影響を与えているのか調査を実施した。また、ここでいう家庭環境とは、定位家族のことと位置付ける。定位家族とは、生まれ育った家族のことを指し、それと対比して、生殖家族を結婚して自分たちでつくりあげる家族のこととする。

2. 先行研究の分析

山内・伊藤（2008）は、両親の夫婦関係が青年の結婚観に影響を与える過程を、結婚観へ直接的に影響を及ぼす「直接ルート」と、青年自身の恋愛関係を媒介して間接的に影響する「モデリングルート」の 2 つに分類した。この研究によると、直接ルートは、両親の夫婦関係が青年自身の恋愛関係及び主観的評価にかかわらず成立するのに対し、モデリングルートは両親の夫婦関係に対する青年の主観的評価が高いときのみ青年自身の恋愛関係に影響を及ぼし、その恋愛関係を媒介した上で結婚観に影響を及ぼすとした。これは、両親の夫婦関係が青年の結婚観へ他の影響を受けず直接的に作用するだけでなく、青年の結婚観が、青年自身の恋愛関係や主観的評価といった他の要素を媒介した上で変化する可能性も示唆できる。さらに、池田・西脇（2008）は、母親に対する肯定的な感情、親の育て方の満足度、家事の手伝いといった要因が「乳幼児好意感情」「育児への積極性」に影響を及ぼし、母性を形成するとしている。

以上の先行研究から、両親の夫婦関係や家庭環境が本人の恋愛や結婚に何かしらの影響を及ぼしていること、とりわけ母親に対する本人の主観的な感情が重要であるといった仮説を立てる。

しかし、R.J.ハヴィガースト（1995）は、青年期の発達課題の中で、青年期の男女は家庭で性的満足を見出せないことから、家庭外の人びとと情緒的に交際せざるをえなくな

り、それによって、両親との情緒的結合になんらかの変化が起こることを示唆している。また、多々納ら（2008）は、大学生男女 406 人を対象にしたアンケート調査を行い、将来、結婚するか否かについて尋ねたところ､男女ともに極めて高い割合で結婚すると回答した。結婚する理由としては、大学生という理想を語ることができる時期であるためか、精神的な安定や愛情を重視する回答が目立った。結婚相手に求める条件としては、男女差がほとんどなく､「性格・人柄」が最も多く、次いで「愛情」という順位であり、結婚する理由との共通点が見られた。

この先行研究から、両親の夫婦関係の中でも、情緒や愛情という要素が重要になること、また、結婚意識に影響を与える家庭環境以外の要因も合わせて検証していく必要がある。

3. 本稿の分析

3.1 調査の概要

2021（令和 3）年 9 月に、女性大学生 5 人を対象に対面のインタビュー形式での聞き取り調査を行った。本稿では、女性の方が結婚を仕事や親といった多くの要素と結びつけて考えるといった観点から、大学生の中でも女性大学生を対象に調査を実施した。聞き取り調査では、過去・現在・未来という 3 つの時間軸に沿って、結婚及び家庭に関する質問を行った。今回は先行研究を参考に､「親の馴れ初め」「結婚相手に求める条件」「母親の家庭への満足度」を必須の質問項目にして調査を行い、以上の質問に関しては、＊マークをつけて明記している。調査対象者の属性は下記の表 1 の通りである。また、母親の就業形態の変遷は別紙の表 2 を参照されたい。

表 1 調査対象者の属性

名前（仮名）	年齢	性別	交際相手の有無	現在の住居
マツムラ	21	女性	アリ	一人暮らし
サトウ	20	女性	ナシ	一人暮らし
コバヤシ	20	女性	アリ	実家暮らし
ハブ	20	女性	ナシ	実家暮らし
イノウエ	20	女性	アリ	一人暮らし

3.2　本稿の構成

本稿の構成は以下の通りである。

A. 結婚願望（ある／ない）

B. 結婚相手に求める条件（子ども主体／相手主体）

C. 家庭環境

D. 家事や育児など家庭における役割分担

3.3　調査内容

上記の 4 項目に区分して、実際のインタビュー調査での語りを紹介していく。語りの前にそれぞれの対象者の名前を記している。また、対象者の基本的な属性は前頁の表で示したが、本項目でも対象者の名前の横に簡易的に示してある（一人暮らし→一、実家暮らし→実、交際相手あり→〇、交際相手なし→×　※調査時点での属性）。

A. 結婚願望

結婚願望の有無について尋ねたところ、2 名が、結婚願望がないと回答し、3 名が、結婚願望があると回答した。まず、結婚願望がないと答えたマツムラさんとサトウさんは結婚願望について以下のように述べる。また、この項目では、設問として親の馴れ初めを必須で回答してもらった。

A.1　結婚願望がない

・マツムラ（一・〇）

過去：＊親の馴れ初め…出会ったのは大学で、お母さんが先輩で、同じ部活で知り合って、付き合いだした感じ。何年か離れて仕事をして、そこから結婚するに至る経緯は聞いたことはないかな。お母さんが結婚したそうにしてたからお父さんから言ったみたいなことは聞いたことあるけど実際のところはわからん、（卒業して）結婚するまで 3、4 年くらい続いたと思う、離れても一緒におりたいと思ったから結婚したって。

未来：結婚願望はないかな。前はないって言いきっとたけど今は親のことを考えるようになった、結婚せん娘って不安やろうなっていうか、孫の顔を見せてあげたいというか（中略）あとは、一人で死ぬのはさすがに寂しい。結婚はしたいというよりかはした方がいいやろうなって感じ。（彼氏が別の就職先で内定が決まっているのに、それを蹴って私の就職

先についてきたいって言って両親と揉めているみたいで）今の彼氏と付き合って結婚観に変化はあった、当事者だけの問題じゃないなって思う。親とか就職とか場所とか仕事の内容とか、気持ちの問題だけじゃどうにもならんのんやなって。好きで結婚できるならだれでも結婚しとるよ。家庭環境によって結婚する重みとかも違うと思うし、親がどうかとか実家がどこにあるかとかそういうのだけで結婚すること自体の重みが違うなって思った。

・サトウ（一・×）

過去：＊親の馴れ初め…それがまじでなんも知らんくて、親と恋愛話できん。でも多分職場結婚だと思うよ、（お母さんは）お父さんと出会うまで恋愛したことない人だと思う。

未来：（子どもは欲しいけど、結婚願望はないから）子どもを作る上で結婚という過程はないといけんしどうしようって感じ。結婚願望がなくなった経緯としては、理想がお母さんと思っててでも最近あれ（姑との同居や父親の相手）に耐えれん人じゃないと結婚生活送れんのかなって思ったのが一つと、自分の恋愛を経て、家族とさえ三日もおれんのにそれ以上に一緒におる人を見つけられる自信がない、この二点かな。

結婚願望がないと答えた 2 名も全く結婚について考えていないわけではなく、自分なりに結婚について考えていることが伺える。また、マツムラさんは現在交際相手がいるにもかかわらず、結婚願望がないと答えており特徴的な回答といえる。

次に、結婚願望があると答えたコバヤシさん、ハブさん、イノウエさんは結婚願望について以下のように述べる。

A.2　結婚願望がある

・コバヤシ（実・○）

過去：＊親の馴れ初め…母さんと父さんは同じ会社の違う部署にいて、職場の共通の知人の紹介で知り合って、半年くらいで結婚したみたい。父さんの方が 3 歳年上。結婚したのがちょうど 30 頃、遅めだよね。

未来：結婚願望はめっちゃあるってわけではないけど機会があるならしたいかな。30 歳までには結婚したい、スムーズに子育てできるのは 30 までなのかなって。これは親の影響かも、結構親の結婚遅いなって思ってたから。これも機会があったらなんだけど子どもも欲しいかな、めっちゃほしいわけではないけど、いたら可愛いなとは思う。人数は 2 人ま

でかな、30 歳までに結婚したいってのも含めてこれも親の影響なのかも。(子ども 2 人が)一番ちょうどよい人数かなって思う、今まで（弟と）暮らしてきて。

・ハブ（実・×）

過去：＊親の馴れ初め…両親がどういう感じで結婚したかはわかんない、ほんとに何も聞かされたことがない。馴れ初めは別に興味ないかな、親の恋愛話を聞きたくない。

未来：結婚願望は普通にある、憧れだけで生きてきてるから。具体的に（結婚は何歳までに）どうとかはないかな、だって卒業するの 26 とかなんだよ（進路が医歯薬系で浪人経験があるため)、何歳なのって逆に聞きたいよね、今彼氏いないし。

・イノウエ（一・○）

過去：＊親の馴れ初め…親の結婚はお見合いかな、父方のおばあちゃんの紹介でお見合いした感じで、父親が 30 歳で母親が 25 歳の 5 歳差で結婚している。

未来：結婚願望はある。結婚したいっていうのはずっと小さい頃から思ってる、結婚するのが夢、家庭を持ちたいと思う。きっかけは特にないかな、なんとなく憧れを持った感じ。結婚する時期は早い方がいいんじゃないかな、それは子どもが欲しいからなんだけど。子どもを作るってなったら結婚はできるだけ早い方がいいと思うから。

今回の調査では、5 人中 3 人が「結婚願望がある」と回答したが、その中でも、イノウエさん以外の 2 人からは積極的に結婚を考えているイメージは感じられなかった。

以上の調査内容から結婚願望の項目に関しては、結婚願望の有無で回答の差は出たが、仕事や子どもといったそれぞれのライフスタイルを考慮した上で総合的に判断していることが伺えた。また、親の結婚からの影響に関しては、親の馴れ初めを聞いたことがない対象者もいる中、結婚の時期や子どもを考える上で、親の影響を受けている回答もみられたため、一概に親の影響の有無を判断することは困難であるといえる。

B. 結婚相手に求める条件

結婚相手に求める条件を尋ねたところ、条件の特徴を、「1. 子ども主体」「2. 相手主体」の 2 つに分類することができた。これらの分類で特徴的な点としては、A. 結婚願望の項目で、結婚願望がないと答えた対象者は、「1. 子ども主体」で条件をあげており、反対に結

婚願望があると答えた対象者は、「2．相手主体」で条件をあげていた。

B. 1　子ども主体

・マツムラ（一・○）

未来：結婚するってなったら多分子どもは考えると思うから、子どもからみて恥ずかしくない父親になれそう（な人）だったら結婚できるかな。これだったら（結婚）できるってよりかはこういうのがあったら無理っていうのが多くなってきたかも（中略）最低限の常識とかがない人は嫌かもしれん、空気を読めるっていうんかな。あと最近思うのは周りの人の評価が高いかどうか、これは彼氏と付き合ってからっていうのもある、最近思い始めた。

・サトウ（一・×）

未来：結婚願望が今のところなくて、子どもがなんとなくほしいっていう気持ちしかないから、子どもがいい感じに育てられたらいいかなって、たしかに子どものためって思ったら相手の細かいところとかどうでもよくなるんかな。もう自分の理想のロボット作ってその人と結婚したい、うざいときは電源切ってさ（笑）。私の恋愛の理想像はお兄ちゃんなんよね多分、最近気づいた。

B. 2　相手主体

・コバヤシ（実・○）

現在：母親に相談事はめっちゃする。恋愛系の話も小学校の時は普通に話してたよ、大学生になってからはあんまり触れてほしくなくて、でも彼氏いるってばれて、そこからは現状報告じゃないけどちょくちょくは話してるよ、嘘つけないんだよね。

未来：結婚に一番求める条件は、価値観。価値観が合わなすぎると円滑な家庭築けないよなって、それは今の彼氏と過ごしてて少し引っかかるところがあるから、（逆に）根底のところの価値観は似てるから今まで付き合ってこれたってのはあるけど。引っかかってるのは男女関係、（彼氏がサークル内の男女で旅行に行ったり家に集まったりし、それを指摘しても改善されない経験から）人づきあいの仕方が自分とちょっと違うのかな、そこさえ合えばいいのになとは思う。そこがこの人と結婚したいと思わない理由の一つかな。価値観が合う人がいいかなって話は母親と雑談程度に話すかな、そこはちょっと母親の考えが

反映されているのかも。

・ハブ（実・×）

過去：なんもしないからね、父が。（母親は）それはちょっと文句言ってるけどね、でももう（母親が父親に）慣れたんじゃない、長年いるから。

未来：価値観は大事だよね、だって価値観違う人とずっと一緒に入れなくない、普通に。経済力も大事だけど、自分が稼げばいいかなって思っちゃう、しかも（今、医歯薬キャンパスにいるから）今の学部（歯学部）にいてそんな経済力ない人と出会うかなって思う。まじでいい人と結婚したい、家事してくれる人、お父さんみたいな人はやだ。お父さん（考え方が）古いんだよね。

・イノウエ（一・○）

現在：彼氏は半年前くらいから付き合ってるかな、毎日会ってるとかではない、私が忙しいのも考えてくれて会う頻度は調整してくれてる。
そういうのも含めて優しい人、この人とおったら楽しいって思うから付き合ってるかな。

未来：優しさかな、しんどい時に励ましてくれる優しさ。

このように、前項目で、結婚願望がないと答えた対象者は、子ども主体の条件をあげており、結婚願望があると答えた対象者は、相手主体の条件をあげていた。ただ、そのような条件をあげた理由を尋ねたところ、「自分自身の恋愛経験が影響している」と回答した対象者は調査時点で交際相手がいたのに対して、「親の考えが影響している」と回答した対象者は交際相手がいなかったといった違いがみられた。

C. 家庭環境

ここでの家庭環境とは、対象者の父親と母親の関係や夫婦の勢力関係のことと定義する。対象者 5 人は、自身が生まれ育った家庭、加えて、これから自身が作る家庭の理想像について以下のように述べる。また、この項目では、対象者が主観的にみた「母親の家庭への満足度（最大値 100%）」を必須の設問として質問した。

・マツムラ（一・○）

過去：お母さんが家庭の愚痴を言ってたりとかはゼロ、お父さんの愚痴とか聞いたことないあんな父親なのに。お母さんはもう聖母みたいな感じ。

うちの父親は相談は受け付けん人やけん報告、こういうことにしましたんで応援よろしくお願いしますって。お母さんに相談して父親に報告、もうね会社。

＊母親の家庭への満足度…100%だと思うよ、満足しとるかはわからんけど、母親をみて嫌だなって思ったことは全くない。母親ができた人すぎて、ちゃんと旦那さんがおって子どもがおって子どもも旦那さんも元気で健康に暮らせてるので（母親は）100％の幸せを感じれる人やと思う。

未来：仕事はせんと生きていけんと思う、仕事せんと無理、（自分の気持ち的に）専業主婦は無理生きていけんと思う。外の世界と関わってないと無理。語弊があるかもしれんけど専業主婦は自分の人生を預けるってイメージだから、それほどの人に出会える気がしないし、その人のために生きるって怖くてできんと思う。仕事と家庭とってあったら、（その場所ごとで）違う自分でおらんといけんから、結果的にそっちの方が楽やなって、一個の場所におるのが不安になる。

・サトウ（一・×）

過去：お母さんは超いい人、これ以上にいい人はおらんなって思ってる。お父さんは客観的にみていい人だと思うんよ、でも一緒には暮らせないかなと、年配の男の人って固定概念押し付けてくることあるじゃん、それがちょっと嫌。

＊母親の家庭への満足度…性格的にどんな環境でも身を削って頑張りそうだから、その場その場でちゃんと幸せを感じれそう。ほんとのところはわかんない、最近になっておばあちゃんのことでちょっと（気苦労みたいな話を）漏れ聞いたから他にもエピソードとかあるんじゃないかって思った、だって状況的にずっと姑と一緒とか絶対しんどいから。

未来：一生専業主婦は絶対に無理だと思う、バリバリ働かんくてもせめてパートとかやりたい。多分お母さんがバリバリ働いてないからってのもあるかもね、今バリバリ働きたいと思ってないの。（でもそれは）お母さんをみてどうとかではなく、もうそれが普通だと思ってた、今も思ってる。

・コバヤシ（実・○）

過去：母親は一番話しやすいし、相談するのもまず母親だし、なくてはならない存在。父親は普段から話しやすいわけではないけど、いざという時には頼りになる感じ、（父親は私と同じ大学で同じ学部で）進路も私と全くおんなじだし、父親と同じ道に進もうとは思ってなかったけど無意識のうちになんとなく影響を受けてるのかもね。

＊母親の家庭への満足度：100 ではないと思う、よく我慢してるから、たまに体調悪いのに無理してやってることはあるから。（母親は）父さんが手伝わないことに対して不満に思ってるとかは少なくとも私は感じてない、私がもう少し母さんの家事を完璧に手伝ってあげれたらとは思うけど。

未来：私の中で充実した人生っていうのが、仕事と家庭を両立してるって感じだから。雰囲気とか家庭内のことに関しては、家族の影響を受けるけど、働き方ってなると関係ないかな、自分で決めたいと思う。

・ハブ（実・×）

過去：父さんは毎週末お母さんと一緒にどこかいってる、海とか、お母さんが全部付き合わされてる、買い物も一緒に行ってるかな、ついていかないと父さんの機嫌が悪くなるのよ、でも母さんもなんだかんだ楽しそうについていってる。仲良いのかな、まあ悪くはないかな、でもそんなラブラブって感じではないけどね。

＊母親の家庭への満足度…普通なんじゃないかな、一緒にいたくないとかはない、でもこの年になってずっと大好きとかそんなんはないじゃん、だから普通なんじゃないかな。

未来：（自分の進路的にも）働かないって選択肢はない、今の時代的に働かないって選択肢あんまりないんじゃないかな、相手の稼ぎだけで生きていけるのかって話だよね。

お母さんみたいな結婚生活は全然あり、私が外に出るのすきだからね、お買い物とか行くの楽しそう、普通に。（自分の両親が夫婦で）ちゃんとしゃべってるのいいなって思う。なんか事務連絡しかしないっていうのはちょっと寂しい。

・イノウエ（一・○）

過去：（母親は）優しいかな、甘いわけではないけど。教育熱心なのかな、（私自身が）一人っ子なのもあるけど私が自分からやるタイプではないからいろいろやってくれる感じ。今は個人的には友達みたいな感じかな。

＊母親の家庭への満足度：不満はないと思う。それなりに満足してたんじゃないかな。

未来：小さいころ親が専業主婦なのもあって自分も家庭を大事にしたいと思って。家庭を持つっていうのが幸せなことだなと思うから。私が結構おばあちゃん家に預けてもらってたから実家の近くに住んでいた方がいいなと思って、それが広島におろうと思ったきっかけではある。

調査対象者の家庭は比較的円満な家庭が多く見られ、母親に対しても良い印象を持っている対象者ばかりであった。必須の設問として、「母親の家庭への満足度」を尋ねた際にも、対象者が目立ってマイナスな印象を受けていたこともなく、対象者の母親は、夫への不満を多少感じながらも自分自身の家庭に満足していたように伺えた。

また、対象者自身が理想としている家庭環境を尋ねたところ、対象者の学生時代における母親の就業形態による影響を示唆できる回答があった。ここで別紙の表②を参照されたい。対象者が中学生～高校生といった学生時代に母親が働いていた、マツムラさん、サトウさんには、家庭の雰囲気に関する言及が見られなかったのだ。

D. 家事や育児など家庭における役割分担

この項目では、両親の家事役割分担について質問した後で、自身が結婚し家庭を持った場合、両親と同じ役割分担でもいいかについて必須で質問をした。

・マツムラ（一・○）

過去：（母親：父親＝）100：0 で母親、（父親は）手伝う素振りすらない、でも口出ししてくる、典型的な亭主関白、お母さんは文句も言わん。

未来：＊親と同じ役割分担でもいいか…100：0 でも全然いい、100：0 でも我慢できるのは相手が口出ししてこなかったらの話だけど。子育てもそう（100：0 でいい）、自分のお腹の中から産まれるんでしょ、他の人に預けたくないって思うもん旦那さんにも怖くて預けれんと思う。

・サトウ（一・×）

過去：家事分担は、父さんが家事をしてるのは見たことない、うちおばあちゃんがいるから結構父方のおばあちゃんがやってくれるんよ。おばあちゃんがすごい働き者で、ご飯

はお母さんかな、おばあちゃんは言わずともやってる、あとは一緒にやってる、お母さんの方が割合は多いけど。

・コバヤシ（実・○）

過去：家事分担は母親が専業主婦っていうのもあるけどほぼ（母親：父親＝）100：0、母さんが体調崩したりしたらやることはあるけど（父親は）全然しないね、ごみ捨てくらいだね。

未来：＊親と同じ役割分担でもいいか…結婚した場合、役割分担は 50：50 かな、私も働くわけだし、そこで私だけ家事をするのはどうなんって思う、最初から分担しとけばこだわりとかもないと思うから。

・ハブ（実・×）

過去：お父ちゃん全くしない、まじでなんもせん、たまになんか作るけど片づけはしない、家事は全然しないね。お金の管理は父親がしてる、（父親が）母さんにお金渡す感じ。

未来：＊親と同じ役割分担でもいいか…絶対に嫌、（自分の進路的にも）共働きになると思うし、家事は分担してやりたい。

・イノウエ（一・○）

過去：私が高校生までは父親と母親は（母親：父親＝）100：0 で父親はほとんど家事とかしていなかったかな。でも今は掃除やごみ捨てはしているらしい、母親も仕事で遅くなる時もあるし、でも料理をしているところは見たことない。

未来：＊親と同じ役割分担でもいいか…50：50 はないと思う、母親が家事をしとったのをみとったから、自分が料理とかはせんといけんって思うし、男の人に料理をさせるのは申し訳ないと思うから料理は私がしたい。料理以外の家事は手伝ってくれたらいいなって感じ。

ほとんどの家庭で、両親の役割分担に関しては、母親：父親＝100：0 といった結果となった。ただ、両親と同じ家事役割分担でもよいかという質問に対しては異なった意見が出た。できるだけパートナーと協力して、自分：相手＝50：50 で分担したいといった回答がある一方で、相手が口出しをしてこないという条件の下では、自分：相手＝100：0 でも良

いといった回答があった。対象者はそれぞれに明確な理由があり、回答している印象であったが、両親の家事分担からの影響や自身の進路の影響など理由は人それぞれであった。また、サトウさんは結婚願望がなく、家庭を持つことも考えていないため、自身が家庭を持った場合の回答はみられなかった。

4. 考察

結婚意識に影響を与える要因として、先行研究では、定位家族の家庭環境とりわけ情緒や愛情といった両親の関係性という要素が示唆されていた。ただ、今回のインタビュー調査では、大学生の結婚意識に影響を与える要素として、新たに、家庭環境も含めた 3 つの要素があるという傾向が見出せた。

まず 1 つに、交際相手という要素である。山内ら（2008）の研究では、恋愛関係が結婚観に与える影響について実証的な検討が行われてこなかったことが示唆されていたが、今回の調査では、結婚相手に求める条件をあげた理由を聞いた際に交際相手の影響が顕著にみられたことから、恋愛関係が結婚観に与える影響は十分にあると考えられる。

次に、先行研究でも指摘された両親の関係性など定位家族の家庭環境という要素である。この要素は､自分自身が家庭を持った際の理想を語る上で強く影響している印象を受けた。ただ、先行研究で示唆された情緒や愛情という両親同士の関係性といった要素よりかは、両親の家庭での役割や立ち振る舞いをみて本人が何を感じたかが重要になっていると考えられる。また､「母親の家庭への満足度」という質問項目についてだが、本調査の対象者は全員が比較的肯定的なイメージを持っており、母親に対して抱いたイメージが自身の結婚を考える際に何かしらの影響を与えているといった結果となった。

最後に、就業観といった要素であるが、就業の中でも、自分自身の就業と母親の就業の 2 つに分けることができる。自分自身の就業形態は、自分が理想としている働き方をもとに、家庭における役割分担を語る際に反映されていたが、母親の就業形態は、必ずしも母親と同じ就業形態を希望するものではなくとも、親元に近い就職先を選ぶといった調査対象者本人の就業形態を決定する要因になっていた。

以上の 3 つの要素から、結婚意識は、親と自分自身のどちらの考えからも影響を受け、総合的に作り上げられていくものだと考察できる。それは、大学生は家庭から距離を取ることで自我が芽生える重要な時期にあるといえるからである。

また、仮説において、特に母親に対する感情が重要であると述べていたが、子どもや夫

との関わりの中で、一人の女性としての生き方や働き方に対して対象者がどのように感じていたのかといった観点から、母親の影響を受けていると考察できた。

5. おわりに

結婚というライフイベントは少子化という社会問題に直接的に関連している。本稿では、少子化対策を考える一つの切り口として、大学生の結婚意識に焦点を当てて調査を行ってきた。ただ、実際にインタビューを行っていく中でも、結婚単体で積極的に考えているよりかは、仕事との兼ね合いで結婚を考える意見が多くみられ、仕事を軸におきたいという意見も少数ではなかった。

結婚は重要なライフイベントではあるが、結婚すること自体は人生選択の一つに過ぎない。むしろ現在は、いかに仕事や家事、育児、趣味を両立していくかが重要になると考える。本稿では、結婚意識に重点を置き調査を行ったが、これからの時代は、ワーク・ライフ・バランスといった視点も合わせて包括的に結婚を考えることが大切になってくる。

文献

R.J.ハヴィガースト『人間の発達課題』、荘司雅子監訳、1995.8、玉川大学出版部

池田かよ子・西脇友子「青年期女子の母性準備性について――家庭環境, 友人関係, 結婚観および出産観との関連について」『母性衛生（Japanese Journal of Maternal Health）』49(1), 48-56, 2008-04-01,日本母性衛生学会

多々納道子・坂田清華・鄭曉静「大学生の家族生活意識の形成」『島根大学教育臨床総合研究』8, 143-151, 2009,島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター

山内星子・伊藤大幸「両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響：青年自身の恋愛関係を媒介変数」『発達心理学研究』19(3), 294-304, 2008,一般社団法人 日本発達心理学会

表 2　母親の就業形態の変遷

調査対象者	幼稚園	小学生	中学生	高校生	大学入学後
マツムラ	正社員	パート	パート	パート → 正社員	正社員
サトウ	専業主婦	専業主婦	パート	パート	パート
コバヤシ	専業主婦	専業主婦	専業主婦	専業主婦	専業主婦
ハブ	パート	パート	専業主婦	専業主婦	専業主婦
イノウエ	専業主婦	専業主婦	パート	専業主婦	パート

第 4 章　ワーク・ライフ・バランスに関する女性大学生の規範調査

永山　葵

1. はじめに

1.1　ワーク・ライフ・バランスとは

本章では女性大学生のワーク・ライフ・バランスに関する規範に着目し、それを過去、現在、未来の視点から考察していく。ワーク・ライフ・バランスとは、仕事と生活の調和をいい、ワーク・ライフ・バランスが実現した社会とは、「老若男女誰もが、仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、様々な活動について、自ら希望するバランスで展開できる状態である。」とされている（男女共同参画会議 2007）。

ワーク・ライフ・バランスは、私たちの生きがいや自己実現にかかわるものであり、人生設計を行っていく上で重要な事柄である。また、女性大学生のライフステージが子どもを持つ母親へと移行すると、このワーク・ライフ・バランスは、仕事と家庭の両立を意味するようになる。政府は、女性の社会進出と出生率の増加の両方を目指しているが、現状では仕事と子育ての両立は難しいことであるという認識が強い。その困難さが、出生率の増加を阻む要因になっているのではないだろうか。多様な選択の 1 つとして、休暇を取得したり、子育てをしたり、そうした一人一人の生き方を尊重するためには、ワーク・ライフ・バランスが大切だと考える。

1.2　問題の所在

女性の働き方に変化が見られ、第 1 子出産後に就業を継続する女性の割合は増加し、それに伴い共働き世帯数も増加した。共働き世帯の女性が抱える問題の 1 つに、子育てと仕事の両立がある。現在の合計特殊出生率は 1.36 であり、少子化が社会問題とされている現在、少子化対策を考える上でも、ワーク・ライフ・バランスは重要視されてきている。

下記の図 4.1 は、男女共同参画局の報告書で女性労働力率と合計特殊出生率の関連を表した図である。合計特殊出生率と女性労働力の間に正の相関関係が見られており、働く女性の割合が高い国ほど、出生率が高くなっている。一般的なイメージでは、女性の社会進出を促進すると、労働の負担が大きくなるために子どもの数が減り、出生率は上がらない

のではないかと考えられているが、実際には異なっていることが分かる。

これからの社会をつくっていく世代である、大学生は就業や家族設計をどのように考えているのか、この調査を通して明らかにする。

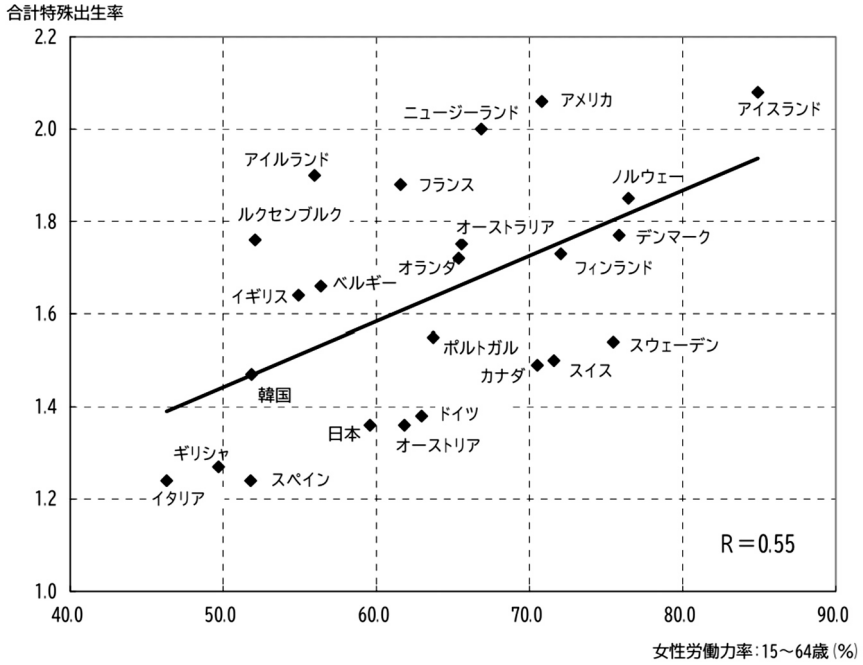

図 4.1　OECD 加盟 24 か国における合計特殊出生率と女性労働力率（15～64 歳）2000 年

2．先行研究の分析

ライフスタイルの多様化、共働き世帯の増加など、ワーク・ライフ・バランスの実現は、少子化対策、子育て支援等と相まって社会全体の重要課題である。大学生が職業選択で重要視するのは、やりがい、収入、安定性であり、理想的なライフスタイルには、家事や子育てを夫婦で両立することだと考えている（志村・時岡 2011）。

理想的なライフコースに女子学生の 65%が子育てと仕事の両立をあげた。現代には、男女ともに仕事と子育てを両立できる社会システムが求められていると述べている（坂本 2008）。

仕事と家庭生活の両立の希望者が 58.4%、就職するが結婚・子育て時に退職し子育て一段落後の再就職の希望者が 21.8%というように、家庭と仕事を両立させて人生を歩んでいくことを希望する女子学生が約 8 割に及んでいる。仕事上でも活躍したいが、ゆとりある

家庭生活や子育ても望んでおり、仕事と家庭のバランスがとれるワーク・ライフ・バランスを希望する人は非常に多い（横田 2016）。

3．調査の概要

3.1　調査の方法

2021（令和 3）年 9 月から 10 月にかけて、女性大学生 5 人を対象にインタビュー調査を行った。調査対象者の属性は次項の表 4.1 にまとめた。

3.2　調査対象者の属性

表 4.1　調査対象者の属性

仮名	年齢	居住形態（現在）	家族構成（高校 3 年時）	父親の就業形態	母親の就業形態	家庭の生活状況（高校 3 年時）	対象者自身が希望する就業形態
イノウエ	20	一人暮らし	父・母・姉・妹	フルタイム正社員	フルタイム正社員	1（豊か）	正社員
サトウ	20	親と同居	父・母・妹	フルタイム正社員	専業主婦	2（やや豊か）	正社員
スズキ	21	一人暮らし	父・母・姉	フルタイム正社員	フルタイム正社員	2	正社員
ハヤシ	21	一人暮らし	父・母・妹	フルタイム自営業	フルタイム正社員	2	正社員
ヤマモト	21	一人暮らし	母・兄	フルタイム	フルタイム	4（豊かではない）	正社員

表 4.1 は、本章の調査対象者についてまとめたものである。本章の調査は、女性大学生に着目した調査であるため、調査対象者はすべて女性とした。この表を見ると、本章の調査対象者の全員が正社員として就業することを希望していることがわかる。5 番のイノウエさんだけが、家庭の生活状況で 1 の「豊か」を選択し、6 番のサトウさんだけが、母親の就業形態が専業主婦であった。また、9 番のヤマモト 4 さんだけが、家庭の生活状況に 4 の「豊かではない」を選択し、ひとり親家庭であったことがわかる。

4. 調査結果

調査結果について、以下の項目に従い検討する。

4.1 調査対象者が小・中学生だった頃の親の就業について感じていたこと（過去）
4.2 将来の進路、職場を選ぶ際に期待すること（現在）
a. 1 つの仕事で専門性を高める or 幅広い業務を経験する
b. 自身の能力に応じた給与得る or 年齢・勤続年数に応じた給与を得る
c. 仕事中心にキャリアを積む or 仕事はほどほどに、自分の自由時間ももつ
d. 創造的仕事に携わる or あらかじめ決められた仕事に携わる
（a、b、c、d の各項目は、今回の調査で使用した調査票に記載されている質問例より抜粋した。）
4.3 どのような働き方、家族設計をしたいと考えているのか（未来）
4.4 ワーク・ライフ・バランスについて
a. ワーク・ライフ・バランスについて
b. 子育てをしながらの共働きについて
c. 仕事とそれ以外の時間にかける労力の比率はどのようにしたいか。
4.5 自分の思い描く生活を送ることのできる社会はどのような社会だと考えるか

4.1 親の就業について感じていたこと

過去の視点から、調査対象者が小・中学生であったときに、親の就業について感じていたことについて以下のように回答した。

イノウエさん

仕事を楽しんでる感じ、休む時は家族と遊んでみたいな感じで、メリハリがあるなぁって思っていた。でも、生徒のことがあるから、時間外の仕事もあって、考えることが多そうやなって……忙しそうで、自分もなりたいなーとは思わなかった。（中略）お父さんもお母さんも帰ってくるのが夜の 8 時くらいで、遅かったから、……（近くに住んでいた）おばあちゃん家に帰って、遊んで、たまにご飯食べて、そして迎えに来てくれて家に帰るみたいな感じやった。家族で過ごす時間は、平日はほとんどご飯食べるくらいしかない。土日は、お父さんの部活がなかったら、一緒にお出かけするけど、お父さんは夕方に帰ってくることが多かったかな……お母さんは（家に）おる時が多かったから、一緒におったりしてた。

サトウさん

お父さんは家でも仕事しとって、働きすぎじゃない？って思ってた。お母さんは、帰ったら家にいたからうれしいって感じだった。……休みの日は休むって感じで、家族で出かけることもあった。

ヤマモトさん

介護職って私の中では、大切な職業だと思ってるけど、月収が低いじゃん、保育園の先生とかもしかり。大変な職業なのに、給料は少ないし、ストレス（利用者、同僚との問題）も多めだったりするから、働くということに対して良い印象はなかった。すごく大変そうだなって思ってた。親は、あんまり家にいなかったし。

4.2 将来の進路、職場を選ぶ際に期待すること

就職を目前に控えている現在、以下の 4 つの項目について期待するものを選択してもらい、その理由を聞いた。

① 1 つの仕事で専門性を高める or 幅広い業務を経験する
② 自身の能力に応じた給与得る or 年齢・勤続年数に応じた給与を得る
③ 仕事中心にキャリアを積む or 仕事はほどほどに、自分の自由時間ももつ
④ 創造的仕事に携わる or あらかじめ決められた仕事に携わる

イノウエさんは、幅広い業務を経験する、年齢・勤続年数に応じた給与を得る、仕事はほどほどに自分の自由時間も持つ、あらかじめ決められた仕事に携わることを期待すると回答した。理由には、以下の回答があった。

収入が高いのは、そんなに考えてない(重視していない)。福利厚生がちゃんとしてたり、残業が少なかったり、やりがいよりは、ホワイトな感じの方が大事。競争が激しかったり、ノルマが厳しかったりするところでは働きたくない。……自分の中では、環境が大事かもしれない。

サトウさんは、幅広い業務を経験する、能力に応じた給与を得る、仕事中心にキャリアを積む、創造的仕事に携わることを期待している。それらの理由には、以下のように解答した。

仕事内容が一番大事で、ある程度の収入と休みはほしい。モチベーションが左右されるから、人間関係がいいところが良くて、チームで仕事をするようなのがいい。

ヤマモトさんは、一つのことで専門性を高める、年齢・勤続年数に応じた給与を得る、仕事はほどほどに、自分の自由時間も持つ、あらかじめ決められた仕事に携わることを期待しており、以下のように語った。

安定した職に就きたいので、そこそこ大きな企業に入りたい（中略）高収入じゃなくてもいいから、安定した収入を得ることと、自分の時間をちゃんと取れること。地方の企業には、週末にボランティアしないといけなくて、自分の時間が取れないってこともあるみたいで……人間関係が円滑な職場に勤めたい。今の生活でも、割と幸福感を感じていて、今みたいな生活は高収入でなくても、続けられるから。お金がたくさんいるとは思わない。（自分の自由な時間を求める理由は）私は、一人の時間が好きで、自分の精神状態を保つために必要だと思う。誰かと過ごす時間をとることも大事だけど、自分一人の時間も必要、多くの収入よりも（ある程度の生活ができるくらいの収入は必要だが、有り余るほどのお金が欲しいとは思わない)。

以上より、就業については、安定性や仕事のやりがいよりも自分の自由な時間を確保できることを重視していることがわかった。

4.3 働き方、家族設計について

未来の視点から、調査対象者はどのような働き方や家族設計をしたいと考えているのかについて聞いたところ、以下のような回答があった。

イノウエさん

大学卒業後、就職して、28（歳）くらいまでには結婚をして、30（歳）くらいまでには子どもを産みたい。（中略）結婚したら、女性の方が男性よりも大変なんだろうなと思う。男性は奥さんが子どもを産んでくれて、働けばいい。そして家事は少ししたらいいから、楽だけど、女性は子どもも生まないといけないし、育てないといけないし、仕事もしないといけないし、大変そうだなって体力も使いそう。男性は育児よりも仕事っていうのは、わからなくもないけど、でもやっぱりお父さんも親やし、お母さんと一緒で、お母さんよりも少ないとはしても、育児してほしい。

サトウさん

結婚したいとは思わない。子どもも別に欲しいとは思わない。自分の時間を割かないといけないから。（子どもができると）やりたいことができないと思う。……もう少しで昇進できそうって時に、あきらめたくない。仮に子どもができたとしたら、子どものためを考えると、親が家にいたほうがいいと思う。

ヤマモトさん

（子どもをつくるかは）安定した職業に就けて、結婚ができた後に考えると思う。そうじゃなかったら（安定した職に就いていなかったら）、自分のことで手一杯だと思う。生まれてきた子どもが、見通しのない社会で苦しんではほしくない、そう考えたら、子どもは産まないほうがいいのかなって思う（中略）今の彼氏となら、結婚はしたい。彼氏がいて、結婚ができる状態なのであれば、結婚はしたほうが、制度的に有効だと思う、所得の面とか。

以上から、対象者は就業や結婚、子どもを持つかという将来設計を自分の意志で自由に考えていることがわかった。親の価値観や性別役割分業などの既成概念にとらわれず、それぞれが異なる将来設計を持っていて、多様な選択が可能になってきているのではないだろうか。

4.4 ワーク・ライフ・バランスについて

a.ワーク・ライフ・バランスについてどのように考えるか

イノウエさん

ワーク・ライフ・バランスで（生活が）充実するんじゃないかなと思う。もっと仕事がプライベートに寄り添ってほしい、生活に寄り添ってほしいと思う。仕事だけの生活はいや。

ヤマモトさん

ワークでやりたいくないことをやって、ライフの方で楽しいことをやるっていうイメージがある。だから、（ワークの方で）やりたいことがない人の方がいいんじゃないか……大人って大変だなって思う（やりたいことがあったとしても、やりたくないことに多くの時間を割かないといけないと考えるから）。ワークもライフも楽しい人って少ないんじゃないかなって思う。

b.子育てをしながらの共働きについて

イノウエさん

（仕事に復帰したら）前と同じくらいの仕事量に戻りたい、定時では帰りたいけど、子どもに夜ご飯を作りたいから……土日は子どもと遊ぶこともあると思うから、休みは子どもと家族と過ごしたい。（中略）一度育児休暇を取得してしまったら、次に仕事に戻る時にブランクがあるから、周りに迷惑をかけてしまうかもしれないという大変さがあると思う。仕事がもっと子育てに対してもっと優しく、融通が利く（ようになったらいいと思う。）何で（子育てで）仕事を休むのかという感じではなく、申し訳ないと思わなくていいくらい、普通なことになってほしい。

サトウさん

子どもが増えるとお金がかかるから、共働きせざるを得ないっていう場合もあると思う。（中略）共働きで子どもちゃんと見られてるのかな？（自分は）家に一人でいることがなかったから、寂しくなかったけど（サトウさんの母親は専業主婦である）。（バイト先で）子どもがいる人が休みを取ると、人手が足りなくて、子どもがいる人と子どもがいない人で対立してる。理想（出産や子育てのしやすい環境が整っていること）と現実は違うと思う。

c. 仕事とそれ以外の時間にかける労力の比率はどのようにしたいか。

スズキさんは、5:5 にしたいと回答し、以下の理由をあげた。

やってみたい仕事があって、仕事を頑張りたい。本当は、もっと仕事をしたいって思うだろうけど、子どもがかわいそうだから。（子どもができると、自分のことだけすればよいわけではないから）

ヤマモトさんも 5:5 にしたいと回答したが、理想は、4:6 だが、現実は 7:3 になるのではないかと答え、以下の理由を付け加えた。

（現実と理想に違いがある理由は、）ちゃんと働くってことは、それだけ多くの時間を費やさないといけないと思うから。

以上から、調査対象者は、ワーク・ライフ・バランスによって、生活が充実するのではないかと考えていることがわかる。しかし、ワーク・ライフ・バランスに賛成する一方で、理想と現実は異なると感じている人もいることがわかった。

4.5 自分の思い描く生活を送ることのできる社会はどのような社会だと考えるか

サトウさん

残業が減って、休みが取れるとか、働きたい人が仕事を続けられるようになってほしい。好きな仕事を頑張って、ご褒美として休みがあって、その休みも充実して、仕事が頑張れるってなるといい。

ハシモトさん

（休みを取ることに）ちゃんと協力が得られる社会。さまざまな選択肢が与えれられていて、（それぞれがそれぞれの選択をすることに）理解がある社会

ヤマモトさん

働き方は、人それぞれにあるものだから、その人に合った働き方を尊重できるといいと思う。（中略）人間を労働力とだけ見なすのでなく、一人の人間として考えて……子どもにすべての大人が責任を持っていれば、どんな（様々な状況に置かれている）子どもでも育てられるんじゃないかって思う。

5．考察

先行研究では、職業選択において重要なものに収入があったが、本章の調査では、収入よりも自分の自由な時間を重視することがわかった。先行研究とは、数年の差ではあるが、今回の調査では現在の大学生が、より多様な将来設計を思い描いていることがわかった。

6．おわりに

ワーク・ライフ・バランスの実践には、労働力が減ることをどのように対策するかという視点も必要だと考える。ワーク・ライフ・バランスが進むと、労働力が減り人手不足になることが推測される。AI 技術の導入や提供している 24 時間営業などのサービスの方法を見直すなど、同時に対策も講じることで、私たちが思い描くライフスタイルを送ることに近づくと考える。

私たちにとって、仕事以外の場面での、新たな経験や趣味における人間関係も生きていく上で、大切なものである。そして、妊娠・出産・子育てと仕事の両立は、簡単なことではないという印象を持っている。多様性が認められるようになった社会で、多様な働き方、家族設計、多様な生き方を尊重するためにも、ワーク・ライフ・バランスは重要である。

文献

男女共同参画会議　仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する専門調査会、平成19年7月、『「ワーク・ライフ・バランス」推進の基本的方向報告』

内閣府男女共同参画局、平成19年、『少子化と男女共同参画に関する社会環境の国際比較報告書』

男女共同参画局、平成19年、『少子化と男女共同参画に関する社会環境の国際比較報告書』

坂本祐子、2008、「ライフコースにおける仕事と子育ての位置づけ――短大・大学生の意識調査を通じて」『地域政策研究』10(3)、77-86

志村結美・時岡晴美,2011,「大学生のワーク・ライフ・バランスと生活実感に関する一考察」日本家庭科教育学会第54回大会・2011例会 抄録

横田明子、2016、「女子大学生のキャリア形成意識とワーク・ライフ・バランス」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』65: 265-271

樋口美雄・府川哲夫編、2011、『ワーク・ライフ・バランスと家族形成――少子社会を変える働き方』東京大学出版会

第 5 章　女性大学生が求めるゆたかな人生について

加藤　陽菜

1. はじめに

1.1　背景

現在、育児休業制度の改変、管理職への女性の登用拡大など、男女共同参画社会の実現のための様々な政策が実施されている。そのような政策によってもたらされる男女共同参画社会の理念は、ひとりひとりのゆたかな人生である。しかし日本においては、女性の多くは非正規労働で働いている、男女ともに有休消化率は高くないなど、いまだに様々な課題が見受けられる。

大学は多くの学生にとって、社会人として社会に出る直前の段階である。大学生という、実社会のしがらみにとらわれる前の段階において、女性はどのような生き方をゆたかな人生として望んでいるのか。本章では、女性大学生がどのような理想を持ち社会に出ようとしているのかを明らかにすることで、女性大学生がゆたかな人生をおくるための実際に必要な支援を検討する。

1.2　本調査の内容

4 年制大学に在籍する女性大学生を対象に、現時点で理想とする将来について調査を行った。質問内容は大きく、高校生時点の文理選択、現在の理想の将来の 2 つである。前者から過去の考え方を聞き取り、後者の現在の将来観と比較した。

1.3　本調査の概要

2021 年 9 月から 2022 年 1 月にかけてインタビューを行った。イズミ、マミヤ、タツベ、アマノ、フルヤは対面で、マミヤへは Zoom を用いて実施した。調査対象者の属性は下記表 5.1 の通りである。名前については仮名を用いている。

表 5.1　調査対象者の属性

名前	年齢	学部	文理(高校時)	理想の就業形態	理想の家庭
イズミ	21	社会科学	文	正社員	結婚・子
ナカタ	21	人文科学	文	正社員	未定
マミヤ	21	社会科学	理→文	正社員	DINKS
タツベ	21	理工学	理	正社員	未定（相手次第）
フルヤ	21	社会科学	文	正社員	DINKS
アマノ	21	生物,化学	理	正社員	非婚

2. 先行研究の分析

2.1　学業に関して

河野（2009）が高校生に行った調査では、文理選択にあたって重視したものが、文系女子では ①「自分の希望」(59.4%)、②「希望進学先の入試科目」(42.8%)、③「苦手科目を学ばなくてよい」(25.6%) の順、理系女子では、①「自分の希望」(71.1%)、②「希望進学先の入試科目」(53.3%)、③「大学入学後に学ぶ内容」(44.4%) の順となっている。

また、それに関して河野は「理系には男子、文系には女子が多いという現状の中で、あえて少数派を選択する者は、その選択へのより強い希望をもっていると考えられる。」としている。

2.2　就職に関して

横田（2016）は大学卒業後のライフコースに関して調査を行い、理想では①「仕事と家庭の両立」(58.4%)、②「子育て 1 段落後の再就職」(21.8%)、③「卒業後または結婚・子育て時退職後の専業主婦」(15.3%)、④「非婚就業継続」(3.0%) という結果を示している。

また、実際には自分がどのようなライフコースを歩むことになるかという質問を行い、①「両立」(40.4%)、②「再就職」(37.9%)、③「専業主婦」(9.4%)、④「非婚就業継続」(11.3%) と、両立が大きく減少、「人生が希望通りにいかないとあきらめている人がいる

ということになる」としている。

このことから、理想では家庭と仕事を両立したいと考えているものの、実際には両立は厳しいと考えている人が多いことが分かる。

2.3　家庭に関して

2.3.1　結婚に関して

第 1 回 21 世紀成年者縦断調査（2002）において、独身者の結婚意欲に関して、20～24 歳の女性は「絶対したい」(37.4%)、「なるべくしたい」(34.2%)、「あまりしたくない」(6.9%) となっている。

また、第 15 回出生動向基本調査においては「結婚の利点」として女性が上位にあげたのは「子供や家庭を持てる」（49.8%)、「精神的安らぎの場が得られる」（28.1%)、「親や周囲の期待に応えられる」（21.9%)、「経済的に余裕が持てる」（20.4%）であった。

2.3.2　子供に関して

森本ら（2000）は女性大学生の結婚、出産、育児及び就業に関する意識調査において、『「出産したくない」と回答した者の中では、自分の生き方に対する積極的な理由と、妊娠・出産・子育てに対する不安があるという消極的な理由が見られた』としている。

2.4　ジェンダー観と将来観

土肥（2020）は大学教員など学生と接する人々を対象に、キャリアに関するジェンダー問題や学生の実態を尋ねた。その結果から得られた回答の一部に、伝統的な夫婦役割分担を親が行っている家庭の学生が多かったこと、その結果、そうでないジェンダー役割にとらわれない夫婦像のイメージが学生にとって難しいという見解を挙げている。

3．本章の分析

3.1　学業に関して

本調査では、河野（2009）の調査と同様、自分の希望で文理選択をする学生が多いことがうかがえた。そのなかでも、文系に進学した女性大学生は自分の選好や得意科目を重視している。文系の 3 名は「好きな科目」（3 名)、それに次いで「苦手科目を学ばなくて良

い」（2 名）を挙げていた。

一方、理系に進学した女性大学生は自分の科目ごとの成績や選好ではなく、将来設計のしやすさを重視しているという特性が見られる。例えば、理系から文転はしやすい、専門職に就きやすく安定している、などである。この「将来設計の組み立てやすさ」は理系選択への「強い希望」とは言えないと考えられ、その点において先行研究と異なる結果となった。

以下に文系のイズミ、フルヤ、ナカタの 3 名の語りを見る。

> ずっと社会問題とか、社会のことに興味があって。小学生の時ぐらいから社会が好きで、ずっと。それプラス理科があんまり好きじゃなくて。（イズミ）

> 国語が得意だったから。そして数学が嫌いだったから。苦手ってゆっても（小学校のテストで）百点取れないっていうそれくらい。（フルヤ）

> なんかもう小学生ぐらいのときから国語のほうが好きやなと思っとたし。数学ができなさすぎるし。消去法ってわけじゃないけど、興味があることと苦手なことが合って、自然と。（ナカタ）

次に理系のマミヤ、タツベの 2 名の語りを見る。

> 将来が定まってなくてあんまり。でそれでぱっと理系の方行きたいなあと思った時に文系におったら動けんじゃん。理系の方におったら文転できるなって言うので選んだ。（マミヤ [1)]）
>
> 性格的になんか安定してる方が良かった。自分の成績が安定してたとかじゃなくて、まじでなんて言うんだ、職業とかがかな。（タツベ）

3.2　就職に関して

本調査では、横田（2016）と同様、理想と実際にギャップを感じている様子が見られた。しかし、ギャップの内容は、横田とは異なる結果となった。すなわち、理想では非婚就業であるが、実際では両立型の可能性という回答が多かった。理想のライフコースの内訳と

しては、①「DINKS（2 名）」②「非婚就業継続（1 名）」、「仕事と家庭の両立（1 名）」（未定 2 名）であった。対して実際に歩みそうなライフコースを尋ねると、「将来何があるかわからないから、実際という言葉とは適切ではないが」という語りが 2 名あり、2 名とも選びうる将来として「仕事と家庭の両立」の可能性があると答えた。

このことから本調査では、理想としては、調査対象者の半数が子供を持たず、仕事と自身の余暇の両立を望むということがわかる。そのうえで、実際には仕事と家庭の両立型かもしれない、というものであった。これは家庭と仕事の両立を理想とし、実際は再就職と考える対象者の多い横田とは大きく異なる。このことから、現在の女子学生の間では、横田の調査における「理想」が彼女たちにとっての「実際」に変化しつつあり、過去の横田のいう「理想」はもはや仕方なく選び取る現実でしかないという、新しい時代に移行しつつあることが考えられる。

加えて、本調査では、仕事を選ぶ際に重視するものとして、「内容」と回答した者が 1 名、「ホワイト、環境、楽さ」などと回答した者が 4 名であった。また、後者 4 名にその理由を尋ねたところ、「家庭（子供）のため」という回答が 1 名、「自分の余暇のため」という回答が 3 名であった。以下に家庭のためと答えたイズミの語りを見る。

子供も生まれて、子供も育てながら仕事も続けていって。60 とかそこらへんまで仕事を頑張って、みたいな。（イズミ）

次に「自分の余暇のため」と答えたフルヤ、マミヤ、アマノの語りを見る。

正直働きたくない。モラトリアムして働きたくねー。でもお金は欲しいからとりあえず年間休日 120 日でまあ手取りもそこそこ。私はそうね肉体的精神的な安寧を望んでいます。……子育てしながらフルタイムって無理そうとは思う。からやっぱり私は子供よりも自分を優先するので。（フルヤ）

仕事を頑張って趣味とかも充実させつつ。まあでも仕事やな基本はね。50 手前で結婚。でなんかいい具合に退職して年金貰いながら慎ましく穏やかな日々を送りたい。犬飼いたいどっかの一人の暮らしのところで。猫でも可。（マミヤ）

結婚はできたらって（昔から）書いてた気がするなぁ。もう 20 代から働いて 20 後半で昇進してお金貯めて犬を買うって（思ってた）。で野球の試合見に行く。……（研究職希望だから）昇進とかあるんだけど（今は）そこまで（昇進したいわけではない）かなと思う。……犬飼いたい。お金がたまったら。犬飼って、隠居生活したいです。てか一個夢があるのは、働いてある年で区切りつけて世界 1 周したい。結構夢かも。（アマノ）

3.3　家庭に関して

3.3.1　結婚に関して

本調査においては、結婚に対し、積極的な「したい」1 名、「どちらかといえばしたい」2 名、「どちらかといえばしなくてよい」2 名、「未定」1 名であった。

本調査における「したい」と答えた 3 名の語りをみると、「子供が欲しい」1 名、「親から離れたい、世間体」1 名、「自然とそうなるなら」1 名であった。

このことから、現在の女性大学生は結婚に「精神的安らぎの場が得られる」とはあまり感じていないことがうかがえる。一方、結婚に対する「親や周囲の期待」はいまだ存在している様子もうかがえる。まず、子供が欲しいと答えたイズミの語りを記す。

結婚したいってのはずっと。今でもある。ずっと思って。中学生の時はまじで子供が 6 人ぐらいいるお母さんになりたかった。……（今は）子供は 2、3 人くらい（ほしい）。……結婚はできるか分からん。……この結婚できるかっていうのが、この自分が思い描く普通の生活の一番の問題かなって思う。一人暮らしって誰にも気を使わんでいいじゃん……なんかその同棲したり一緒に住みだしたら、ストレスがたまるなって。（イズミ）

次に、「親から離れたい、世間体」と答えたフルヤの語りを記す。

家族と同じ墓に入りたくない。……あと世間体。結婚しないと一般的な人生を外れるみたいな、怖さがある。（フルヤ）

最後に、結婚したいとは思わないと答えたアマノの語りを記す。

そう（夢や仕事の実現）考えるとこれについてくれるパートナーいない。ついてこいとは別に言わんし。（アマノ）

3.3.2　子供に関して

本調査でも先行研究と同様、「出産したくない」と明言した者の理由に関しては、積極的な理由・消極的な理由のいずれもが見られた。以下にマミヤとフルヤの語りを記す。

子供おったら離婚とか身動きとりづらくなるし、健康な子供が生まれてくるかわからんし教育って洗脳やと思うし……。（マミヤ）

フルタイム（勤務）が良い。けど、子育てしながらフルタイムって無理そうとは思う。（フルヤ）

同時に、出産したくない理由として、出産しない理由を問うという質問そのもののから女性は出産することが前提とされていると感じ、それを疑問視する学生もいた。そのため、少なくとも学生の時点において、女性のなかには出産に対して消極的な理由があるだけではなく、結婚と同様に、子供を持つことが当然ではない、という考え方が現れつつあると思われる。

なんかインタビューの前提が結婚して子供が居るっていうのが怖いよ。（フルヤ）

3.4　ジェンダー観と将来観

本調査では、3.2 及び 3.3 で上げたように、土肥（2020）の、ジェンダー役割にとらわれない夫婦像のイメージが学生にとって難しい、家族の多様化を自分とは関係のない話と捉えている、という結果とは一致しなかった。むしろ、本調査では家族の多様化を自分事として強く感じ取っている様子がうかがえた。この点に関して、原因と考えられるのは、土肥の調査は大学教員など学生に接する人に行った質問であり、学生本人に行った質問ではないため、「世界一周旅行をしたい」などの夢を含んだ将来像を答えにくかったためではないか、ということが考えられる。

また、親が伝統的役割分担を行っている学生が多く、そのことによるロールモデルの偏

りが夫婦像のイメージに起因しているとする土肥の見解とは、異なる意見が見られた。本調査では、親が伝統的役割分担を行っている学生も含め、仕事中断再就職を理想または実際にあげた学生はいなかった。さらに、親がジェンダー観に強い関心がある、または全く関心がない家庭で育った学生ほど、家庭の多様化を自分事として感じ取っている傾向が見られた。このことから、親が伝統的役割分担を行っているかどうかではなく、親や周囲がどのような考え方を持ちふるまって見せるかということが、ジェンダー役割にとらわれない家庭及び将来の想像に関係すると考えられる。以下に、親のジェンダー観が特異であった 2 名、フルヤとアマノの語りを記す。

（父親が子供に対して）女やけん殴らん、女の子は高校生なったら殴らん、男はいつまでも殴る。それが 1 番（印象に）残ってる。（DINKS 希望、フルヤ）

私は、親がたぶん私を女子高に入れたのはそういう理由があって。受験とかで共学やったらさ、やっぱどうしても男子が優先される時もあるやろ。女子高ならそれがないっていうか。……（複数の学校の生徒が集まる討論会で）男子学生が何人かいてて、で同じ班になった時に最初（同じ女子高の生徒が）喋ってなかったんやけど、途中からみんなずかずか意見言い出して。普通女子とかやったら男子がおったらちょっと遠慮したりうんうんとか言うのに私の友達がまず、私班長やります、じゃあ私がタイムキーパーやります、みたいな。なんか男子の面子を気にしない感じ。そんなことをしてた。自分が負けないっていうか、遠慮しない。ある程度ね。（非婚希望、アマノ）

4．考察

過去の将来設計である文理選択に関しては、自分の選好や得意科目、または将来設計のしやすさで選択をしていることが分かった。

結婚に関しては、「相手がいても結婚じゃなくて良い」などと結婚にあまり意義を感じていない学生が多く、また自己実現のために結婚を理想の将来の要素から外すといった考えも見られた。このように結婚は当然のものでなくなってきているが、同時に、いまだに結婚しないと一般的ではない、という風潮も感じ取っている。

就職に関しては、「理想」と「実際」が変化し、より自由度の高い「理想」を求め、「実

際」においても就職継続は当然と考えている姿が見られる。

このように、今の女性大学生は、いまだ変わらないジェンダー観を感じ取りながらも、過去の将来選択から現在の将来選択に至るまで、自由な時間や好きなことをしたいという思いを中心に理想の将来を描いている。それと同時に、今後周囲や自分が変わる可能性も視野に入れた、多様な将来設計を行っている。また、社会の多様性が認められ、それを自分事と捉えるようになってきたからこそ、現時点で強く固まった将来の理想を持つ人は少なくなっている。

5.おわりに

こうした実態を踏まえると、女性がゆたかな人生をおくるためにはワーク・ライフ・バランスの充実が不可欠である。本調査では就労形態として全員が正社員を希望していた。そのうえで、早期退職や育児との両立を理想としている。このように、女性にとって社会進出は今や当然のこととして受けとめられている。しかしそれは働くことだけを意味するのではない。ジェンダー役割や旧来の風潮にとらわれない、仕事と余暇（子育ても含む）の両立、そして勤労や家庭だけではない精神的ゆたかさの追求が、現在の女性大学生の求めるゆたかな人生である。今後のワーク・ライフ・バランスの促進のためには、正規雇用の安定性の中にも、労働時間や勤務形態の柔軟性が求められている。

注

1) マミヤは大学入学に際し、文系に転じている。

文献

土肥伊都子「ジェンダーの視点に立ったキャリア教育を考える」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』41-56,2020,神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会
file:///C:/Users/Hina/Downloads/J1_06dohi.pdf

河野銀子「女子高校生の「文」「理」選択の実態と課題」『科学技術社会論研究 第 7 号』21-33,2009-10,科学技術社会論学会
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlsts/7/0/7_21/_pdf/-char/ja

国立社会保障・人口問題研究所『現代日本の結婚と出産――第 15 回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書』2017
https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf
（2022/1/16 閲覧）

厚生労働省『第 1 回 21 世紀成年者縦断調査（国民の生活に関する継続調査）』「独身者の結婚意欲」
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/judan/seinen02/kekka2.html
（2022/1/16 閲覧）

森本恵・中嶋由加里・山地健二「大学生女子の結婚、出産、育児及び就業に関する意識調査」『高知医科大学紀要』16,65-76,2000,高知医科大学
https://kochi.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository_action_common_download&item_id=2943&item_no=1&attribute_id=17&file_no=1&page_id=13&block_id=21
（2022/1/16 閲覧）

横田明子「女子大学生のキャリア形成意識とワーク・ライフ・バランス」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』65: 265-271,2016,広島大学
http://core.ac.uk/reader/197306360
（2022/1/16 閲覧）

職業観編

第 6 章　大学生の進路決定に見る青年期の精神的自立

平谷　佳子

1. 大学生の進路決定

本章では大学生が進路決定時に抱える悩みに着目し、青年期の精神的自立との観点から大学生の自立を考察する。現代社会において学校卒業後に定職に就かず、アルバイトで生計を立てている青年（フリーター）や、就学も就業もせず、就業のための職業訓練も受けていない青年（ニート）が増加している。定職に就かない青年の増加は働くことをそれほど必要としない「豊かな社会」が実現したこと、あるいは急速な技術革新や情報化が進展する社会が実現したことが原因としてあげられる。社会的背景が指摘される一方で、青年個々人が自らの適性を見定め、いかなる職業生活を送るべきなのかという職業アイデンティティ（職業アイデンティティとは、職業人として自分はどのように仕事と関わっていくか、職業を通して自分らしさをいかに育んでいくのかという社会に対する公的な自己定義を指す。アイデンティティについては後述する。）を確立できていないという問題点も指摘されている。

青年は親への依存からの脱却を求められ、一人の人間として社会へと巣立っていくことが期待される。経済面だけでなく、精神面でも自立できない青年はどのような問題を抱えているのだろうか。本章では、とくに精神面に焦点を当て、青年の自立の問題について、大学生の将来の進路設計との関りから考察したい。

1.1　問題の所在

2011 年 3 月の大学卒業者の就職率は最低を記録し、就職した若者の離職率も高く、新卒後 3 年以内に大卒の 3 割が離職している（最新現代資料集 2017）。「つくべき仕事がわからない」「将来の展望が描けない」といった不安を持つ青年は少なくない。

本多陽子（2008）は大学生の進路決定時の不安要素を分析し、大学生が進路を決定する時に抱える悩みの特徴の一つとして、自己が確立していない曖昧な自分についての悩みを明らかにした。自分のやりたいことがわからず、未来の自分に確信が持てず、進路を自己決定すべき自分自身の判断にも自信が持てないという悩みはアイデンティティの確立が達

成されていない状態の問題であるとしている。「進路決定は変更してはいけない」という柔軟性に欠ける固定的な信念や「社会的評価が決められてしまう」という受け身的なとらえ方は、自分自身がはっきりしない、頼りないという、アイデンティティの確立にまつわる悩みに影響している可能性があると指摘した。

このような状況を踏まえ、本章では、どのような場合に将来の進路に不安が少ないのかという問いを提起し、どういった要因がアイデンティティの形成、ひいては精神的自立に影響を及ぼしているのかを検討していきたい。

1.2　青年の精神的自立

本項では、まず筆者が精神的自立をどのように捉えているかを明らかにしたい。精神的自立に関する先行研究を取り上げながら次の 3 点を説明する。第 1 に、精神的自立には①親や周囲との関係をうまく保ち、②親とは別の個人として自信を持って考え行動する、という 2 つの要素が重要であること。第 2 に、2 つの要素は互いに関連性があること。第 3 に 2 つの要素を満たし精神的に自立している状態であれば、将来に対する不安が少ない状態であるということだ。図 6.1 は精神的自立の捉え方を示したものである。

第 1 について、山田・宮下（2007）は、青年の自立に関する様々な理論を俯瞰し、多くの理論に共通している要素を抽出し、青年の自立とは「親や周囲との関係をうまく保ちながら、認知・情緒・行動という様々な領域で、親とは別の個人として自信を持って考え、行動し、その責任をとれるようになること」とまとめた。以上の理論を参考にし、本章では、精神的自立に関して

①親や周囲との関係をうまく保つ

②親とは別の個人として自信を持って考え行動する（アイデンティティを確立している）

という 2 つの要素に焦点を当てる。また、②の要素はアイデンティティを確立していると言い換えることができると考える。アイデンティティについて詳しくは 1.3 で述べる。

第 2 について、要素①親や周囲との関係をうまく保つと要素②アイデンティティを確立している、の二つの要素が相互に関連していることを示す二つの調査を紹介する。宮下・渡辺（2001）は、青年期には友人がアイデンティティの形成に大きな影響を与える「重要な他者」であることを指摘しており、精神的自立に必要な要素①周囲との関係をうまく保つことが、要素②アイデンティティの確立に影響を与えることを示している。高橋（2001）は、青年期前期にある青年ではアイデンティティ発達の程度が高いとき親に対する親和性

が高いことを指摘しており、要素②アイデンティティの確立が、要素①親との関係をうまく保つことに影響していることを示している。以上より、精神的自立に必要な 2 つの要素は相互に関連性があることも指摘されている。

最後に、本章ではこれら二つの要素を満たし精神的に自立している状態を、将来の進路に対しての不安が少ない状態と捉える。

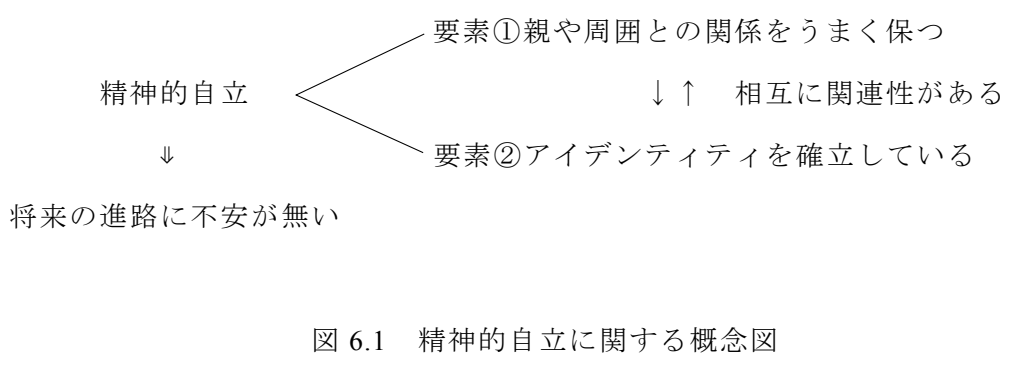

図 6.1　精神的自立に関する概念図

1.3　アイデンティティ

次にアイデンティティが何を指すかについてみていきたい。アイデンティティとは「自分らしさ」のことであり、「私は誰なのか」「私はいかにして社会に貢献するのか」に対する答えに当たるものである。Erikson によれば、「アイデンティティは自分が自分であることの自信を形成する基盤となるものであり、この自信は過去の自分と現在の自分との時間的な一貫性と社会（仲間）の中で自分の存在が認められているという感覚によって形成されていく」[1)]。アイデンティティの形成は、自己を正しく理解し、自らの意思に基づき社会的に許される形で行動できるようになることで、青年の精神的自立の重要な要素である。

谷冬彦（2001：49，265-273）は、Erikson の記述に基づき、「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」をアイデンティティ感覚の 4 側面として捉えた。「自己斉一性・連続性」とは、自分が自分であるという一貫性および時間的連続性についての感覚を意味する。「対自的同一性」は、他者から見られているだろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚を意味する。「対自的同一性」は、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものが明確に意識されている感覚を意味する。「心理社会的同一性」は、現実社会の中で自分自身を意味付けられるという、自分と社会との適応的な結び

つきの感覚を意味する（谷 2001：49，265-273）。本章では、以上の 4 側面をアイデンティティ形成測定の尺度として参考にする。

2. 本章の分析枠組み

本節では以上の分析を踏まえたうえで、青年期の精神的自立をめぐる作業仮説を設定するとともに、本章の分析枠組みについて述べたい。

2.1　作業仮説の設定

これまで述べてきたように、大学卒業後の進路決定において大学生が抱える悩みには精神的自立の問題が関連している。精神的自立には①親や周囲との関係をうまく保ち②アイデンティティを確立する、という 2 つの要素が重要であると考え、本章では以下の 2 つの作業仮説を設定した。

【仮説 1】親や周囲の人と良好な関係を築いている人は大学卒業後の進路に対する不安が少ない。

【仮説 2】アイデンティティを確立している人は大学卒業後の進路に対する不安が少ない。

2.2　分析の方法

2021（令和 3）年 8 月～10 月に、大学生 7 人を対象にインタビュー調査を行った。調査対象者の属性は別紙の表 6.1 に記載する。まず最初に、将来設計と進路への不安を明らかにし、仮説 1 に対しては過去・現在において、親や家族、友人等、周囲の人たちとどのような人間関係を築き、将来どのような関係を築きたいと考えているかを質問し、仮説 2 に対してはアイデンティティを 4 つの側面（自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性）から捉え、過去・現在・未来における調査対象者のアイデンティティ感覚について質問する。調査対象者の将来設計と不安については 3.1 項で、仮説 1 に関しては 3.2 項で、仮説 2 については 3.3 項で結果を分析する。

3.　将来の進路に対する不安が少ない人の特徴――分析結果から

本節ではまず、聞き取り調査から明らかになった調査対象者の将来の進路にまつわる考えを示し、2 つの仮説を検証する。

3.1　将来設計と進路に関する不安について

調査対象者の将来設計の内容、計画性、進路に対する悩みは別紙の表 3 に記載した。

概ね不安が無いと答えたウエダさん、ヤマダさんは、どちらも共通して、やりたいことがあり、実現に向けて取り組む過程で生じうる心配事に対して想像の範囲であるが、対処できると考えている。オカモトさん、フジイさんが抱える不安は、自分個人というよりは自分を取り巻く周囲の環境の変化に対する不安が挙げられている。ナカムラさんのみ自分にまつわる不安、将来自分の意欲が変わることへの不安を示した。

3.2　家族や友人との親和性

仮説 1 を検証するために、調査対象者が、過去、現在においてどのような人間関係を築いているか質問したところ、以下の回答があった。

> （学部内で仲良くなった数人と）お泊りとか。家行き来とか。自分から誘うときもあれば、あっちからご飯行こうとか言われたりすることも。誘われて、暇だったら行くって感じですね。私自身、一人でいる時間、全く苦に感じないので、家で一人とか。友達が全くいない、とかだったらしんどいんですけど、ある程度会おうとすれば会えるような友達もできたんで。（フジイ）
>
> （学部内での友人関係について）いろんな人と話したいと思ってたので、いっぱい話しかけてはいました。話しかける方が多かったです。広く深く。いろんな人（高校時代の友達や、バイトの人）と関わるようにしているけど、ちゃんとひとりひとり大切に関わりたいなとは思います。（高校の友達を自分の一人暮らしの部屋に）呼ぶこともあるし、呼ばれて向かうこともあります。（ナカムラ）

アルバイトやサークル、部活動における自分の役割に関する回答もあった。

> 【過去】中・高ともに副部長をしていて、部長がおおらかな人、みんなを緩くま

とめる人だったので、僕はその点厳しくルールに乗っ取ってちゃんとやる、怒るとかそういうポジションだった。

【現在】軽音部の部長として、まとめ役。結構みんな指示待ち、というか誰かが方針を決めた後で行動するってのが大半だから、まず方針を決めるってのと、一人の独断って言うのも良くないから、ある程度全体の意見も取り入れつつテンポが遅くならんように後押しする、引っ張っていく。バイトを通しては、経験が他の人よりもある分、細やかな指示出しであったり、これからずっと使えるような動き方を教える、ということが自分の役割かなと感じています。（オカモト）

（現在所属している部活動において）もう一人の役員なんやけど、けっこう頼ってくる。そいつ自身、自信家やから一人でなんでもこなしちゃうけど、でも頼るときは自分を頼ってくるし、そういう面では必要としてくれてるんかなって思うし、逆にこっちも必要としとるよね[2]。（ヤマダ）

次に、調査対象者が築く人間関係の中で親密性を探るため、進路を相談する相手について質問したところ、多くの回答者は家族に相談しつつ、自分と似た進路に進む先輩や特に深い仲の友人や恋人と話をしていることが分かった。

先輩とかナオ（仮名）君とか、ちゃんと働いている人とかに相談しますね[3]。（ナカムラ）

当時一緒に動いていた子は文系の子だったんですけど、私の一番仲良い子は理系にいて、相談はこの子です[4]。お昼は一緒に食べてました。（フジイ）

【過去】（本人が関心のある職種に詳しい）叔父には、大学行くまでには結構聞いていた。父親が就職するのに苦労したというか、大変やったんかな。高校の時までは公務員とか堅実な職を勧めてきて、他の職種に対しては否定的なとこはあったかな。母親とかが、「この子の人生なんだし、自由に決めさせてそれを支えるんが一番なんじゃない」みたいに言ってくれて、そっから（父が）変わった、みたいな。大学入ってからは具体的に進路見つけ出して、目標もできたから、そこまで言うこともなくなった。

【現在】今は彼女かな。基本的に大体のことは話せます。一個年上やから、就職

のこととか話しやすいしね。

オカモトさんは、以前は進路に対して親から干渉があるように感じていたが、希望進路を自分で調べるようになってからは個人の意見を尊重してくれるようになったと話す。
一方で、親とは全く進路の話をしない事例もある。

家族には特に何も言ってないです。反対されることはないし、応援してくれてるとは思います。その、お金面とか。なんか、親に話しかけられるとうざくなるんですよね。もう、反抗期ですよね。いつからかわからんけど反抗期だから。で、家の部屋で一人で過ごすようになって、必要なこと以外喋らない。塾の先生や学校の先生はほぼ毎日喋ってました。塾は個別の塾だったので。

親に感謝しつつも一切会話をしないナカムラさんの例から、そもそも親との親和性とはどういったものなのか根本的なところから検討し直す必要性が伺える。また、ナカムラさんが将来の不安に関して、他の回答者と異なるタイプの不安（将来自分の意欲が変わることへの不安）を示していることも特徴的であった。

（将来の不安は）お金をちゃんと稼げるか、とまあそれくらいっすかね。標準より上です。でも、（稼げる仕事を選んで）やってみたらたぶん違うんすよね。たぶんしんどかったらやめたくなっちゃうかもしれない。

周囲の人との親和性とはどういったものなのか、不安の種類（自分にまつわる不安と周囲の環境にまつわる不安など）は精神的自立とどう関連しているかも検討の余地がある。
その他に、周囲に相談することは少ないという回答もあった。

【過去】親は本当に、良い意味でほっといてくれてたというか、あんたの生きたいように生きなさいみたいな。常に応援はしてくれました。あとは、高校の友達で3年間一緒に通学した子がおって、その子に話したり。もちろん進路の話もしたし、勉強教えてもらったりしたかな。
【現在】親が一番大きい。相談というか意思表明っていうか、（高校教員）目指し

とるわ、みたいな感じ。もちろん部活の同級生にも言ってる。自分の中でもう確定ていうか、けっこう気持ちが強いから相談することはあんまない。（ヤマダ）

俺は母親は細かいと思っとるから、ほどほどに（報告は）手を抜けばよいという考えで、とりあえず、（志望校を決める際）ここの大学の工学部出しとくわ、くらいの話はしてるけど、こういう理由があってこういう学部に行きたいんだ、みたいなことは特に話してない。止めてはこんけど、ちゃんと考えとん？みたいなのを通知してくる。経験的にこれもやっとかんと、みたいなの（親の心配）があるんやろうけどそれに対しては特に回答しない、みたいな。お父さんはほぼノータッチ。まあ放任やな。耳には入れとるやろうけど。（ワタナベ）

自分の中で意思を確立し、周囲に意思表明するだけであまり相談しないヤマダさんとワタナベさんの例からは、子どもの進路に関して子ども個人の判断に委ねる家庭背景がうかがえる。

図 6.2 は、以上の調査結果を仮説 1 と照らし合わせ、パターン分けしたものである。

（a） 親や周囲の人と良好な関係を築いており、おおむね将来の不安が無い（ウエダ、ヤマダ、ワタナベ）

（b） 親や周囲の人と良好な関係を築いているが、将来に不安がある。自分を取り巻く周囲の環境の変化に対して不安を抱いている。（オカモト、フジイ、エンドウ

（c） 周囲の人と良好な関係を築いているが親とは良好な関係を築おらず、将来に不安がある。自分の意欲が変わることに対して不安を抱いている。（ナカムラ）

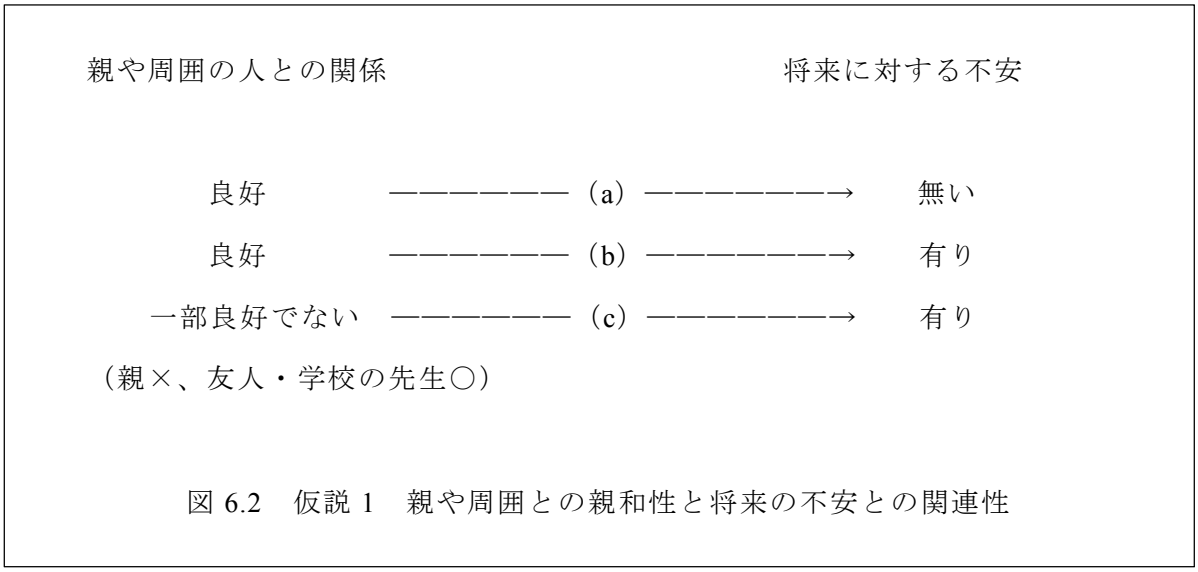

図 6.2　仮説 1　親や周囲との親和性と将来の不安との関連性

周囲の人との親和性が高いほど、進路について相談・報告できる範囲が増えることは確かだが、親や周囲との関係が良好だからと言って必ず不安が解消されるわけでは無く、仮説 1 は立証されなかった。

3.3　アイデンティティ感覚

アイデンティティ感覚を 4 項目（自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性）から質問し、将来の不安との関連において調査対象者間で見つかった共通点について述べる。

第 1 に、第 1 項目の自己斉一性・連続性が高いと第 3 項目の心理社会的同一性も高いという関連性を指摘できる。

> 【自己斉一性・連続性】小学校低学年ぐらいの自分と小学校高学年の頃の自分は大きく違うし、高学年からと今のこの感じになるまでも違うし。違うようになったきっかけみたいなのもなんとなく自分で覚えてるし。過去の中でいろんな出来事を踏まえ変わっていったなっていう意味で関連性はあるけど、変わっていってるから一貫性はそんなに無いかなみたいな感じ。悪いとは思ってないんやけど、大きな失敗をしないようすごい考えちゃうから、何となく自分の限界じゃないけど、自分ってこういう人間で、こういうことが得意で苦手でみたいな、なんとなくわかって。その範疇に収まることばかりしてきた訳なんよね。

【心理社会的同一性】自分の表面的な感じだったら普通に受け入れられるだろうなって思う。自分が頑張ってることに対してはそれを認めてもらって評価してもらう環境は今までも、今もあるかなぁとは、ありがたいことに思う。もうクセなんやろうけど、よくない癖なんやろうけど、私がどう思うかより他人がどう思うかみたいなのを気にする癖がある。だから、自分が大変でもよっぽどのことが無い限り「来ないで」みたいなこと（周りの人を拒絶したり社会とのつながりを断ち切ったりするような行為）はないと思う。（ウエダ）

【自己斉一性・連続性】高校までは自分から発信することはあんまりなかったかな。大学から、けっこう、改善した方がええところを案出したりだとか、いろいろ自分から発信…まあ主将をやってるからってのもあるかもしれんのやけど。振り返ってみて、だいたい思ったことは、やりたいこととか目標とかがあったら、ちゃんとプロセス立てて、それに向けて着実に進めてる気はする。あまり無理のない目標を立て続けてるから、そういうのを将来的にも続けていきたいかな。

【心理社会的同一性】技術的なことはわからへんけど、人間性とか性格的なところで言えば、社会に順応できる、合ってるかな、と思う。コミュニケーション能力だったり、他の人と意見合わせたりだとか。（オカモト）

【自己斉一性・連続性】自分の性格、特徴としては粘り強いというか、一度始めたらとにかく続けるってこと。小さい時からこれはずっとで、習い事とかいっぱいやってたんだけど、嫌だなあって思うことはあっても結局やめずに続けてた。あとは、けっこう理論づけて行動してるのがあって。子どもの頃からずっと。水泳とかさ、なんで泳げんのやろうって思ってパソコンで動画見てイメージトレーニングしたり、部屋で寝転んで足動かしたり。別に好きではなかったけど、なんでできんねやろうってめっちゃ考えとった。親からもそう言われた。（理論が理解できて実際にできるようになると）楽しいってより、満足。それが、今の剣道にもつながっとるんかなって[5)]。

【心理社会的同一性】正直に言うと自信（社会に適応する）はあるかな。（教員として）知識の面で劣ることはあると思うけど、生徒に東大の入試問題とか持ってこられて解ける自信ないし。それでも、あくまで想像やけど、そうなった時に努力す

るだろうなって。自分が始めたことだからなんとかして答えを導くだろうなって。だから社会で十分にやっていくんじゃないかなと。（ヤマダ）

ウエダさん、オカモトさん、ヤマダさんは概ね自分のことを理解しており、将来困難にあった時に自分がどう対処するか自信を持っており、社会に適応できると回答した。特にウエダさん、ヤマダさんは将来に対する不安はおおむね無いと回答しており、自己斉一性・連続性と心理社会的同一性の高さが社会生活における不安が少ないことに関係していると言える。

第 2 に、他のアイデンティティ感覚に比べ、対他的同一性、とくに他者が見る自分と本来の自分が一致しているかという項目について否定的に回答する事例が多かった。

他者から見た自分と自分が思ってる自分が一致するかっていうとあんまり一致してないんじゃねって自分では思う。周りからはありがたいことに重宝してもらうことも多かったりするんだけど、過大評価しすぎじゃねって思う。そんな大した人間じゃないけどなぁみたいな。（ウエダ）

けっこう気にしちゃうタイプなんで、あの時言ったこと大丈夫だったかなとか。でも周りからはなんも考えてない、ってよく見られます。苦手って意識してる子にはとくに考えて接してました。（フジイ）

人の話を聞いてるときに、ボーとしてるって言われることが多いけど、逆に俺めっちゃ考えよって。なんで（目の前で話している相手は）こういうことを言うんだろうって、考えよるから周りから話聞いてないって言われることがあるんかなって。（ヤマダ）

対他的同一性を問う項目を否定的に答えるこれらの回答には、周囲の空気を読むことを求める日本社会の特徴が表れているのではないかと考察する。他者から切り離された独立的な自己の確立に価値を置く欧米と比べて、日本においては、他者との関係の中で相互依存的な自己の確立に価値を置くとされている [6)]。他者との「関係」を重視する日本の社会では、「個」としての自己の確立と他者との「関係」の中での自己の確立のどちらも重視しており、現実の自分の在り方と「関係」の中での理想の自分の在り方との間に差異が生じやすいとされている（谷 1994）。本調査において対他的同一性（他者が見る自分と本来の

自分が一致している）を問う項目を否定的に答える回答者が多かったが、個としての自己と、他者との関係の中での自己、の二面的にアイデンティティを確立する日本においては多く見られる傾向なのかもしれない。

ただし、4 項目全てにおいて高い評価をした回答もある。オカモトさんは対他的同一性について、個としての自己と他者との関係の中での自己、の二面性があるがどちらの本来の自己として統一できていると答えた。

> 大学の自分もバイトの自分も本来の自分やけど、出すべきところ、控えるべきところはあるから、それを隠しているというかは、ただちゃんと控えてるだけって感じもある。出しどころは考えていて、でもどこでも本来の自分は出せてると思う。ちゃんと休憩できる場所がいろんなところにあるから（彼女や家族など、本来の自分を出せる場所があるから）無理はせずできてる気はします。

以上の調査結果を仮説 2 と照らし合わせると、アイデンティティ感覚を問う 4 項目に全て肯定的に回答しているオカモトさんは将来の不安があり、一方で、将来の不安が無いウエダさん、ヤマダさんはアイデンティティの 4 項目すべては肯定的に回答しておらず、仮説 2 は立証されなかった。ただし、ウエダさんとヤマダさんに見られた共通点から、自己斉一性・連続性、心理社会的同一性が将来に対する不安の軽減に影響している可能性は指摘できる。

3.4　将来の進路に対する不安が少ない人の特徴

精神的自立に必要な 2 つの要素（①親や周囲の人と良好な関係を築くこと、②アイデンティティを確立していること）を満たしていれば大学卒業後の進路に対する不安が少ない、という仮説は立証されなかったが、部分的に確かめられた要素について述べる。仮説 1 については、親や身近な大人、友人など話しやすい相手は人それぞれだが、進路に関して意思表明できる環境があると不安は軽減されること、仮説 2 については、自分の特徴を理解していると、将来の困難に対しても自分なりに適応することが想像できるため、進路に対する不安が軽減されること、アイデンティティ形成には独立的な自己と他者との関係における自己の二面性があることが確かめられた。一方、本調査において親との親和性が高い状態の定義と不安の種類と精神的自立との関連性の 2 点が曖昧であり、調査前に意味を定

義し、定義に基づいて質問項目を検討する必要があった。

4. まとめ

以上の考察より、本章では次の 2 点を大学生の進路決定時の不安軽減に向けた一方策として提案したい。第 1 に、親は子どもの進路を考える上で、子どもと一対一の個人として対話する姿勢を持つこと。第 2 に、自分の特性の理解を深める経験を日常的に積むことだ。

第 1 の、親が子どもと 1 対 1 の個人として対話をする姿勢を持つことについてはオカモトさんとヤマダさんの例を参考にしたい。両者は共通して、親は自分の進路決定において、自分の人生だから自由にしなさいという姿勢で接していたと話した。進路に関する子どもの考えを聞き、個人としての意見を子どもに伝えるが、あくまで一個人の意見であり、押し付けはしない。このような、親と子という関係でありながらも、子どもの意見を一個人の意見として一旦受け止める姿勢で接することで、子どもは、自分の意見が受け入れられるという感覚を持つことができる。青年期には、「親とは別の個人として自信を持って考え、行動し、その責任をとれるようになること」が求められる。もちろん、子どもより長い年数を生きてきた大人の立場から子どもに助言できることはたくさんある。しかしそれは子どもを自分と同じ価値観に育てるためではなく、一人の自立した大人を育てるための助言でなければならない。自分の考えが受け入れられる、認められるという感覚は、親とは別個の個人として考え行動するために必要な感覚であり、進路に関して意思決定する際の自信につながる。オカモトさんとヤマダさんの親に見る、自立した個人として子どもと対話をしようとする姿勢は、親が子どもの精神的自立、ひいては将来の進路を支える最善の在り方だと考える。

第 2 に、自分の特性の理解を深める経験を日常的に取り組むことについて述べる。仮説 2 の検証から、自己斉一性・連続性、対自的同一性が高いと進路の不安が少ないことが指摘される。例えばヤマダさんは毎日部活動に取り組む中で自分の弱さや強みを分析し続けており、自分の粘り強さや論理的に行動する傾向が一貫していると自分の特性について話した。得意なことや幼少期から継続して取り組んでいることなどが何か一つでもある人は、自分の特性を取り組みの中で意識することが多いかもしれないが、そのようなケースは決して多くはないと考える。オカモトさんやフジイさん、ヤマダさんは幼少期からやりたいことがあり、実現に向けてこれまでの進路を選択してきたが、それ以外の人からは幼少期

から一貫しているような志望は聞き取れなかった。

進路決定を前に「自分の強みや自分があるべき将来像が描けない」と不安に感じている人の多くは、自己理解ができてない自分に対して自信を失っているのではないだろうか。これは、自分についての分析を言語化する機会がなく、多くの大学生の場合、初めて自己理解を言語化する機会が就職活動や進路決定時に訪れるため、戸惑ってしまうのだと考える。本来は、サークル活動やアルバイト、ボランティア活動などの社会的経験や、友人・恋人との交際などの日常的経験から、ふとしたタイミングで自分らしさが表れ、自己理解が深まる場面は多くあるのではないかと考える。そこで、日常的に自己理解の内容を言語化することが自己を確立する上で重要だと考える。例えば、個人的に取り組むものとして、日常の振り返りを書き起こすことが挙げられる。その日に受けた講義から何を感じ、どのように課題に取り組んだか、友人や周囲の人とどのような付き合いがあり、その中で何を思ったかを記すのである。社会的に取り組むものとしては、講義のグループワークやサークル、部活動、アルバイトなど集団の一員として活動したときに、自分の言動を振り返ることに加え、チームメンバー同士でおたがいの良いところを伝え合い客観的に評価し合う、というものだ。日ごろから自分の特性について振り返り、言語化することで、自分についての理解を深め、将来の進路に対しても自信が持てるようになると考える。

以上の 2 点を、青年期における精神的自立を助け、進路決定時における不安を軽減させるための策として提案して本章を終わりたい。

注

1)「E. H.エリクソン（1902-94）とはアメリカの精神分析学者である。人生を 8 つの発達段階を持つライフサイクル（人生周期）ととらえ、青年期の発達課題はアイデンティティの確立であり、モラトリアムなどの言葉を用いて青年期の心理的特徴を明らかにした」（第一学習社 2017：8）。

2) ヤマダさんは所属している大学の運動部で、学年の主務を務めている。中四国地方の大学生大会を運営する団体において、所属大学の代表として、ヤマダさんと、ヤマダさんが特に親しい部員が役員を務めている。

3) ナオ（仮名）はナカムラさんの 2 歳年上の幼馴染で、同じ小・中・高校に通い、現在も同じ大学の他学部に在籍しており、同じアルバイト先で働いている。

4) フジイさんは授業などは文系の 4 人グループで行動していたが、相談することが多い友人はグル

ープ外におり、昼休憩はその友人や所属していたバレーボール部の友人と過ごしていた。

5）ヤマダさんは、中学校の部活動で剣道を始め、大学生の現在も継続している。自分が課題だと思ってることを、本やインターネットで調べたり、自分よりレベルの高い部員から話を聞いたりして分析し練習メニューを工夫している。

6）Marcus & Kitayama（1991）が提唱した「相互独立的自己観とは、“個人は他者から分離しており、他者から独立して独自性を主張することが必要”とする自己観であり、欧米諸国に典型的である一方、相互協調的自己観は、“個人は互いに結びついていて個人的ではなく、さまざまな人間関係の一部になりきることが大切だ”とする考えで、日本を含むアジアの文化で前提とされるものである」（高田・大本・清家 1995：24，157-158）。

文献

大久保摩里子, 2009,「青年期の延長に見る親子関係の変化」名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究，12.

第一学習社編集部, 2017「最新現代社会資料集　新版」第一学習社，52，59.

————,2017「最新　倫理資料集　新版」第一学習社，8.

高田・大本・清家, 1995,「相互独立的—相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成」奈良大学紀要，24，157-158.

高橋由利子, 2001,「青年期のアイデンティティの発達と親子関係について」日本教育心理学総会発表論文集，43，220.

谷冬彦, 2001,「青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成—」教育心理学研究，49，265-273.

————, 1994,「『個』—『関係葛藤尺度の作成』」新潟大学現代社会文化研究科

本多陽子, 2008,「大学生が進路を決定しようとするときの悩みと進路決定に関する信念との関係」青年心理学研究，20，87-100.

Markus, H.R., & Kitayama, S, 1991. *Culture and the self: Implications for cognition, motivation, and emotion*. Psychological Review，98，224-253.

宮下一博・渡辺朝子, 1992,「青年期における自我同一性と友人関係」千葉大学教育学部紀要，40，107-111.

山田裕子・宮下一博, 2007,「青年の自立と適応に関する研究：これまでの流れと今後の展望」千葉大学教育学部研究紀要，(55)，7-12.

表 6.1　調査対象者の属性と進路に関する悩み

仮名	学年	性別	将来希望する進路	進路に関してこれまでの取り組みと現在	進路にまつわる不安
ウエダ	3 年	女	エンタメ業界	エンタメコンテンツの視聴は趣味でもあり長い時間を割いている。 インターンシップ等に参加。	新卒採用人数が少ない業界で最初から希望進路に就けなくても、いずれ希望職種に就けたら良いと思っている。
エンドウ	3 年	女	公務員	母親が国家公務員。 現在公務員講座を受講し、勉強している。	
オカモト	3 年	男	航空機関連の技術職	幼少期からの希望進路で大学も関連学部を選んで入学。 就職後必要になる英語を勉強している。	勤務地が不便でワークライフバランスを優先できるか。 現在勉強している英語が将来通用するかということ。
ナカムラ	1 年	男	大学院進学後、 民間もしくは教員	人並より裕福な生活を送りたい。	人並より多くお金を稼げるか。 仕事がしんどいと感じた時に、モチベーションを保てるかということ。
フジイ	1 年	女	地方公務員	両親が地方公務員で子どもの頃からの希望進路。 大学も関連学部を選んで進学。	勉強上の不安はない。景気が悪くなると民間就職枠が減り公務員の受験者数が増えるので、受験年に倍率が高くならないか心配。
ヤマダ	3 年	男	大学院進学後高校教員	教員として部活動指導を希望。 中学から現在まで剣道に打ち込む。 主専攻と並行して教員の勉強を進める。	就職先の学校で剣道の部活動指導を任命されるかできるかという不安はあるが、教えることが好きなので悩んでいない。
ワタナベ	3 年	男	大学院進学後 民間技術職	機械工学に興味があり関連学部を選んで進学。	院進学ができるかということ。

第 7 章　大学生の地元志向とその背景

鍵山　敬一

1. はじめに

1.1　問題の所在

現代日本においては、東京をはじめとした大都市への人口集中が進んでいる。また一方で若者の間では地元志向も高まっていると言われる。大都市への人口集中については統計データから明らかである。例えば、総務省（2021）によると、日本における日本人住民の数は令和 3 年 1 月 1 日現在で 1 億 2384 万 2701 人であるというが、このうち東京大都市圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）に居住するのは 3564 万 4613 人とされていて、日本に居住する日本人の実に 3 分の 1 近くがこの 4 都県に集中していることになる。このようななかにあって、若者の間での地元志向の高まりも指摘されている。一見すると矛盾しているように見えるこの 2 つの傾向は、現代日本にあってともに存在している。

そもそも日本の人口の大都市圏への集中が始まったのは高度経済成長期であると言われる。山口・松山（[2015] 2018）は「住民基本台帳人口移動報告年報」や「国勢調査」、「学校基本調査」のデータを長期的に分析することで戦後の日本の人口移動の傾向について明らかにしている。それによると、まず国内の人口移動全体については、1950 年代後半から移動者数が急増したことが指摘されている。特に高度成長期には県をまたぐ長距離移動が活発になり、地方圏から大都市圏 [1)] への移動が相当数存在したことが確認される。さらに、地方圏から三大都市圏への移動のうち、大阪圏、名古屋圏への移動が高度成長の終わりとともに停滞し、この 2 つの大都市圏では対地方圏転入超過がほとんど見られなくなる一方で、東京圏では総数こそ減少しながらも継続して一定の対地方圏転入超過が見られることも示される。加えて、こうした移動の中心が就職・進学に伴う若年層の移動にあり、総数の減少及び大学進学移動の割合の増加などの変化はありながら、傾向自体は少なくとも 1970 年代以降 2011 年まで一貫していることも同様に示されている。

そのようななかにあって、近年では若者の地元志向の高まりが指摘されている。先ほども述べたように、東京圏外の若者が東京圏内へ移動するパターンを筆頭として、若者は就職・進学に際して地域移動をしやすいということが言われているため、若者の地元志向の

高まりは矛盾しているようであるが、しかし地元志向は確かに指摘されている。例えば、轡田（2009）は、「多くの統計データは、若者の地元志向の強まりを支持している」と述べている。また、横田（2017）は学生用就職情報サイト「マイナビ」（2012-2015）が大学学部4年生及び大学院博士課程2年生を対象に2011年から2014年に実施した調査の結果を引用して、各年ともに調査の回答者全体の約7割が卒業後の地元での就職を「希望する」あるいは「どちらかというと希望する」と回答したことを伝えている。

ここまで見てきたように、現代日本では、以前より若者の地域移動可能性の高さ、特に地方圏の若者の大都市圏（とりわけ東京圏）への移動可能性の高さが指摘されながら、同時に、近年若者の地元志向の高まりも指摘されるようになっている。なぜ若者の都会志向のなかに、地元志向は食い込んできているのだろうか。

そこで本章では若者の地元志向について、特に大学生に対象を絞って、その背景に存在するものを明らかにすることを目的に議論を進めたい。大学生は進学に際して地元に留まっている場合と地元を離れている場合とがあり、この両者を比較できるという点などから、大学生に注目することには一定のメリットがあると思われる。以下では、筆者が大学生を対象に行った調査の結果をもとに、大学生の地元志向とその背景について分析していくことにする。

1.2　分析の視角

分析に際しては先行研究の知見から、大学生の地元愛着と、大学生の家族関係に着目することにした。まず地元愛着についてであるが、先行研究では地元に対して愛着を持つことは地元志向を強める可能性があると言われている。例えば、松元（2018）は、愛着を「内発的で自己完結する、地域への肯定的な意識」と定義したうえで、こうした主観的で自己完結する地元への愛着が強ければ、大学生の地元就労意向は強まる可能性があるということを指摘している。

次に、大学生の家族関係についてであるが、これについても複数の先行研究が地元志向への影響を指摘している。例えば、横田（2017）は、近年の少子化傾向が親子関係、とりわけ母子関係を親密化させ、結果的に子の成人後も親子が互いに身近で暮らすことを望むようになっている可能性について指摘している。

以上のように、地元愛着と家族関係とは大学生の地元志向に少なからず影響を与えていると考えられる。こうしたことから、分析の中心にはこの2点を置くことにした。なお用

語についてであるが、本章では、地元愛着については前述の松元（2018）の定義を援用することにする。また、地元志向についてであるが、これは一般的には地元、すなわち生まれ育った地域に住み続けようとする意向のことであると考えられるが、ある地域に定住することはその地域で職を得ることと密接に関係しており、就職活動をする大学生にとってはこの点が特に大きな意味を持つことになると考えられるので、以下では基本的に地元志向を地元就職の意向と同義に用いることとする。このとき、地元の範囲は特に断らない限り都道府県を単位とする。これらの点を踏まえて、次節以降では実際の調査と分析に関して具体的に述べていくことにしたい。

2. 調査の概要

筆者は若者、特に大学生の地元志向とその背景について明らかにすることを目的に、4 年制大学である X 大学に通う大学生に対してインタビュー調査を行った。X 大学は地元の県のほか、西日本を中心に全国から学生の集まる総合大学であるため、県内進学の学生と県外進学の学生の両方を調査するのに都合がよいと思われた。また、インタビュー調査については、各調査対象者に対して過去及び現在における地元に対する考えや家族関係、さらに将来設計などについて尋ね、1 人当たり 40 分から 1 時間 30 分程度の時間で聞き取りを行った。調査は 2021 年 7 月から同年 10 月の間にそれぞれの調査対象者に対して個別に実施した。

3. 調査対象者の基本情報

3.1 調査対象者の基本属性

調査は 5 人に対して行った。5 人の属性については表 7.1 に示す通りである。第 1 節では、ある人物の生まれ育った地域のことをその人物の地元と述べたが、ここでは、調査対象者の実家のある県を調査対象者の地元ということにした。本章では地元のことを都道府県単位で捉えることとしており、また多くの場合、実家のある県と生まれ育った県とは一致するからである [2)]。なお、記載されている情報はすべて調査当時のものである。

表 7.1　調査対象者の基本属性

各調査対象者の基本属性	年齢	性別	学年	大学種別	居住形態
A さん	20 歳	女性	3 年	国立	一人暮らし（地元外）
B さん	20 歳	男性	3 年	国立	一人暮らし（地元外）
C さん	21 歳	女性	3 年	国立	一人暮らし（地元外）
D さん	21 歳	女性	3 年	国立	両親と同居（地元内）
E さん	20 歳	女性	3 年	国立	両親と同居（地元内）

3.2　調査対象者の地元志向

具体的な調査結果の分析に入る前に、本章では地元志向が重要なテーマであるため、各調査対象者がどの程度地元志向の意識を持っているのかという点についてあらかじめ示しておくことにする。詳細は表 7.2 の通りである。

表 7.2　調査対象者の地元志向の度合い

	地元志向の度合い	備考
A さん	強い	地元近辺で就職したい、慣れたところで暮らしたいとのこと。
B さん	弱い	大学の所在する県（広島県）で就職したいとのこと。ただし、彼の出身県（香川県）は大学の所在する県からさほど離れていないため、横田（2017）の言うところの「広義の地元志向」[a)] には含まれるかもしれない。
C さん	強い	地元で就職したい、実家から職場に通えるぐらいが良いとのこと。
D さん	中程度	東京に出るか、地元に残るかで悩んでいるとのこと。
E さん	中程度（D さんよりは強い）	地元就職希望ではあるが、就業地よりも仕事の内容を重視したいので、必要な場合は移動をいとわないとのこと。

（注 a）横田（2017）は、大学生の新卒での地元就職希望を「狭義の地元志向」、また地元の近県での就職を希望すること及び 1 度都会で就職したのちに地元に U ターンして再就職することを希望することを「広義の地元志向」として定義している。

4. 調査結果とその分析

第 1 節で述べたように、大学生の地元志向には本人の地元愛着と本人と家族との関係が影響を与える可能性がある。そこで以下では、各調査対象者の回答を地元愛着、家族関係のそれぞれから分析し、これらと地元志向との関係について見ていくことにする。

4.1 地元愛着と地元志向

先行研究では、地元愛着の強さは地元志向の強さに関係すると言われている。この点を軸として、調査対象者の回答から地元愛着と地元志向との関係について詳しく見ていく。

まず調査対象者の回答全体を見渡したところ、A さん、C さん、E さんは相対的に地元愛着が強く、一方 B さん、D さんは弱いという結果が得られた。彼らの実際の語りから彼らの地元愛着の実相に迫っていくと次のような結果となる。なお、調査対象者によって、また文脈によって語りのなかで用いられる地元という表現の指す空間的範囲には幅があった。そこで、調査対象者の回答について説明する際、地の文では「地元」と「地元地域」という表現を使い分けることにする。ここでは仮に、「地元」という表現は調査対象者の出身県を指すこととし、「地元地域」という表現はそれより小さな単位である市町村や、あるいはさらに小さな小学校区などを指して用いることとする。

先に地元愛着の比較的強かった A さん、C さん、E さんについて見ていく。まず A さんであるが、A さんは基本的に地元が好きであるという。小学生、中学生のころは自らの生まれ育った環境を所与のものとみなし、それを特に嫌うこともなく、それなりに地元のことを好ましく思っていたようである。高校生になると、大都市圏外に位置する県の郊外地域に住んでいた A さんは都会へのあこがれを抱くようになったが、必ずしもこれによって地元に対する A さんの主観的イメージが悪くなることはなかったという。一貫して地元のことは割合に好きだったということである。

大学進学を機に地元を離れ、現在 A さんは一人暮らしをしているが、このことは結果的に A さんの地元への愛着を強めることになったという。A さんは次のように述べている。

> （地元を離れたことで地元に対する主観的な評価は）めっちゃ上がった。好感度爆上がりやわ。離れてみて（その大切さが初めて）わかるみたいなことよ。

また、そのように地元に対する主観的な評価が向上した理由について尋ねたところ、次

のような回答があった。

（地元を好ましく思う要素の第 1 は）やっぱり、方言かな。（大学のある地域の言葉は）やっぱり耳なじみがないから。（中略）あと、Y 湖[3)] かな。（地元で）いつも身近にあったものが（地元を離れると身近に）無くなるのは、やっぱりちょっと寂しいかな。

続いて C さんであるが、C さんも A さんと同様、過去から一貫して地元好きの傾向にあったようである。ただ、C さんは小学校に入る前に県をまたいだ地域移動を 2 度経験しており、生まれた県や幼少期を過ごした県と、実家のある県は一致しない。とは言え、小学校入学以降大学進学までは同一の地域で暮らしていたということであり、現在も実家はその地域にあるということだった。また、インタビューの間もその地域を地元地域として捉えた話が多かったので、実家のある県を地元と考えてよさそうである。

C さんが高校生のころやそれ以前の時期に地元地域を好きだった理由として挙げたのは、そこが慣れ親しんだ地域であるということだった。C さんは次のように述べた。

（実家のある地域は）ずっと小学生のころから遊んでた（ところで）……ショッピングセンター……とか、近くの公園とか慣れてたから、そういう暮らしやすいのがいいですね。

また、C さんは大学進学に際して県外進学を選択しているのだが、このことは現在の C さんの地元地域への愛着を強める方向にはたらいたようである。ここでの C さんの語りにおける地元という表現は、おそらく市町村単位で用いられていると思われる。

地元って大事だなって思うようになりましたね。（中略）普通に育った地元なんで何も思ってなかったんですけど、やっぱり 1 回離れると大事だなって思うようになりますね。地元がやってること……地元でやってるお店とか……もっと地元にしかないものに注目したいなって思うようになりました。

地元愛着が比較的強かった 3 人の最後は E さんであるが、E さんも過去から一貫して地

元地域のことを好ましく思っているようである。E さんの特徴としては、地元地域を好ましく思う理由として地域の人間関係を挙げたことである。なお、ここでの地元地域とは小学校区ほどのかなり狭い範囲である。

（地元地域のことは）好きか嫌いかで言うと、好きだったと思います。（中略）町内会長が割と親密な関係にある親戚だったので、町を歩いたら「○○の△△ちゃんだ」ってかわいがってもらっていたというのがあるので。（中略）どこが親戚でどこが親戚じゃないのかも曖昧なくらい（地域の人々の）仲がよく……人どうしのつながりで言うと、すごく好きだなと今でも思います。

また E さんは大学進学に際して県内進学を選択し、現在でも実家で暮らしているため、高校生のころやそれ以前の時期から現在まで地元に対する主観的イメージは変わっていないとのことである。また、地元地域については「ここから早く出たいなということは、未だに思ったことはないですね」と述べている。

ここまで、相対的に地元愛着の強かった A さん、C さん、E さんの 3 人について見てきたが、ここからは地元への愛着が相対的に弱いとみられる B さん、D さんについて見ていくことにする。まず B さんについてであるが、B さんは高校生のころ及びそれ以前の時期において地元地域に対してあまり良い印象を持っていなかったようである。この印象はさらに、地元の県全体にも及ぶ。

（地元は）すごい田舎なのかなと思ってたのと、すごい狭いというか、あまり行く場所がないようなイメージを持っていました。（地元に対する主観的評価は）だいぶネガティブにはなってたかな。（地元に）そこまで愛着はなかった。

ただ一方で、大学進学に際して県外進学をした B さんは、進学を契機とした居住地移動を通して地元に対する主観的イメージを一定程度向上させたようである。B さんは次のように述べている。

（地元に対する主観的評価は）さっきネガティブって言ったと思うんですけど、（大学進学後）だいぶポジティブな方向に（変化した）。特産品とか、X（X 大学の所在す

る県）と比較して（地元にも）いいところがあったり（するということがあるので）、前よりは地元もいいなというふうに考えるようになったと思います。例えば、（地元は）うどんがこっち（X 県）より断然おいしかったり、あとはこっちにはないもの、地元にしかないもの……例えばしょうゆ豆っていうのがあって、そういうのとかが食べたくなったりします。

続いて D さんについてであるが、D さんは C さんと同様に父親の仕事の関係で都道府県をまたいだ居住地移動を経験しており、その回数は D さんが小学 5 年生になるまでに 3 度であったという。よって、現在実家のある県と生まれ育った県がぴったり一致しているとは言い難く、その点では D さんの地元は明確には特定しづらい。けれども、D さんが最も長く居住しているのは現在実家のある X であり、D さんは現在でも実家で家族と同居していることから、実家のある X を D さんの地元と捉えることで問題はなかろうと思われる。いずれにせよ、D さんの特徴はこのように各地を転々としてきたことからくると思われる、土地に対するこだわりの低さである。D さんは次のように述べている。

いろんなところを転々としてきて、「ここの土地が好き」とか、そういうのはあまり感じたことがなくて、愛着が湧くか湧かないかっていうことよりも、いかにその土地になじむかってことの方を重要視してたかな。愛着って……あまり湧いたことないっていうのが正直なところかな。

D さんのこのような感覚は、過去から現在までほとんど変わっていないということである。

ここまで 5 人の調査対象者の地元愛着について見てきたが、調査結果は以上の通りであった。以下では、この結果からわかることを簡単にまとめていく。まず第 1 に、A さん、C さん、E さんの 3 人と、B さん、D さんの 2 人との間の比較から、地元愛着が強いことは地元志向を強めることになる可能性が示された。これは、松元（2018）の調査結果などとも一致している。

第 2 に、県外進学によって地元を離れることは地元に対して良い印象を持つことにつながる可能性が示された。県内進学をしている D さん、E さんが大学進学の前後で地元に対する主観的イメージをほとんど変化させていないのに対して、県外進学をしている A さん、B さん、C さんは、地元愛着の強さこそ 3 人の間で異なるが、3 人とも大学進学の前後で

地元に対する主観的イメージを多少なりとも向上させている。

県外進学と地元愛着の関係に関して、松元（2018）は、群馬県に所在する大学に在籍する群馬県内出身学生と県外出身学生の間の地元愛着に関する意識の違いの比較から、県外出身の学生は地元に愛着を感じる理由として出身地域の自然や人々に関する事柄を挙げる場合が多いと述べている。このことは、群馬県外出身学生が進学に伴い群馬県に移動するなかで地元地域の自然や文化に対する主観的イメージを向上させている可能性を示唆していると思われる。この点を踏まえて、再び A さん、B さん、C さんの分析に戻る。地元に対する主観的イメージの向上の背景に A さんは Y 湖と方言を挙げ、B さんは地元の特産品や独特な食文化を挙げた。また、C さんは、回答のなかで地元という表現を一貫して都道府県よりも狭い、市町村やさらにそれよりも狭い範囲を指して用いており、地元という言葉から連想している空間の範囲が前二者とは異なっているため、地元イメージの向上の背景にあるものとして挙げたものも前二者とは性質が多少異なってはいるが、地元地域のお店や地域を盛り上げる活動、文化その他地元地域にしかないものに注目したいと思うようになったことを挙げた。このように見てみると、3 人とも傾向として、地元を離れたことに伴って地元イメージが向上したのは、特に地元の地域の自然や文化に対する主観的イメージの向上によるものと言うことができるのではないだろうか。すると、これは松元（2018）の調査結果が示唆していたこととおおむね一致することになる。したがってこの点から、一般的に県外進学をした大学生は地元を離れたことで地元の自然や文化に対する主観的イメージを向上させやすいことが考えられる。

第 3 に、B さんの事例から、地元を離れることによって地元に対する主観的イメージが向上することは、必ずしも地元志向にはつながらない可能性が示された。A さん、C さんは地元を離れたことによって地元に対する主観的イメージを向上させ、それが地元愛着の強化、さらに地元志向につながっている。しかし B さんは、地元を離れたことで地元に対する主観的イメージがポジティブな方向に変化したと述べているが、一方で地元志向は弱く、現在在籍している大学の所在する県での就職を希望している。この点について、先行研究でも同様の事例が報告されている。山口（［2012］2018）は、山形県出身で U ターンを経験した県内在住者と、他出後 U ターンをせずに東京大都市圏に居住している者とに対して行ったグループインタビューの結果から、非 U ターン者も必ずしも山形を拒否しているわけではなく、「山形を好意的に評価しているのに、それが必ずしも U ターンに結びつかない」（山口［2012］2018: 120）場合が多いことを指摘している。

また山口（[2012] 2018）は地元への好意的な評価と地元志向が結びつかないことに関して、非 U ターン者は仕事を自己実現の場とする生活に価値を見出す傾向にあり、そうした自らの望む自己実現を山形ではできないと考えることが山形に対する好意的な評価と U ターンとを切り離しているのではないかと指摘している。さらに先行研究を見ていくと、山下（2018）は石川県の高校生に対するアンケート調査の結果から次のように述べている。

> 生態系サービスや地域の伝統文化との接触……によって醸成されるであろう『地域愛着』（本研究では具体的言及なし）なる感情は、自身の人生観が介在した場合に、現在置かれている地元の環境を不利と考える心理の緩和には直結しない可能性が示された。（山下 2018: 221）

こうしたことから、地元にいることを自己実現のために不利であると考える意識が介在した場合には、地元の自然や文化に良い印象を持ち、地元を好意的に評価することは、必ずしも地元志向につながらないのではないかということが考えられる。B さんはマスコミ業界への就職を希望しているのであるが、その語りからは仕事を通した自己実現のために地元にいることを不利だと捉えている傾向がみられる。例えば、地元よりも大学の所在する県での就職を望む理由について、B さんは次のように述べた。

> Z（B さんの地元）より X（B さんが現在通っている大学の所在する県）の方がそういう（就職の）場所とか機会が多いっていうのはあるのと、あとは X に本社があるものがあったり……X（にある企業）の方が、（傾向として事業を展開している地域の）範囲が広いというか、いろんなものとか場所に関わることが多いかなと思ったからかな。（中略）（X にあるような大企業の存在は）Z ではあまり聞かない。というか、知らないだけかもしれないけど。

したがって、B さんの地元に対する主観的イメージの向上が地元志向につながらないのは、先行研究から考えられたことと同様に、地元にいることを不利だと考えることがこれを妨げているためであると考えられる。

また山下（2018）は買い物格差や情報格差といった日常生活における不便も、高校生が自らの生まれ育った環境を将来の自己実現のために不利だと考えるようになる要因の 1 つ

であるとしている。このことを踏まえると、本項の手前の部分で引用したようにBさんが高校生のころやそれ以前において、地元のことを田舎であって、狭く、行く場所がないようなところであるとしてネガティブに捉えていたということは、Bさんが地元にいることを自己実現のために不利であると考えていることに影響している可能性がある。こうしたことから、高校生以前に抱いた地元への否定的な認識が地元にいることを自己実現のために不利だと考えることにつながり、それは地元を離れることで生じる地元に対しての主観的イメージの向上によっても解消されないという可能性が示された。

ここまで、調査結果の分析を通して得られる地元愛着と地元志向との関係についてまとめてきた。では、次項では大学生の家族関係と地元志向との関係について見ていくこととする。

4.2　家族関係と地元志向

先行研究では、近年の少子化傾向に伴う親子関係、特に母子関係の親密化傾向という現象によって若者の地元志向傾向が強められていると言われている。以下では、この点を軸に調査対象者の回答を通して大学生の家族関係、及びそれと地元志向との関係について詳しく見ていく。

まず、すべての調査対象者の回答を見渡したところ、全体的に調査対象者とその家族とは良好な関係にあるということがわかった。この点に関して、各調査対象者とその家族との関係の実態に迫っていくと次のようになる。

最初はAさんであるが、Aさんは自身と両親との関係について「まあ良好」と答えた。家族の親密さを測る指標として、話をする頻度や、相談事を両親に持ちかける頻度、帰省の頻度や期間について尋ねたところ、互いに話をすることやAさんから両親に悩みごとの相談をすることは少ないということであったが、帰省については大学の夏季休業、春季休業、年末年始の休みのたびにその期間を通して実家で過ごすという回答があった。Aさんによれば、「休みの間はほぼ（実家に）帰ってる。（中略）帰りたいってなんねん」ということであった。また、両親からAさんに対して過去の大学進学の際や現在の就職活動に際して積極的に意見を言われることがあるかということについても尋ねてみたが、それについてはほとんどないということであった。

続いてBさんであるが、Bさんも家族との関係は良いようである。Bさんについても、両親と話をする頻度、Bさんから両親に相談事を持ちかける頻度、実家に帰省する頻度や

期間について尋ねた。すると、まずBさんは両親と話をする頻度が高いということがわかった。Bさんによると「親がすごい心配性というか、心配してくれるので」「最近は3日に1回ぐらい」、多い時は「ほぼ毎日」両親から電話がかかってきて話をするということであった。また、相談事については、Bさんはもともと誰かに相談を持ちかけることが少ないということであるが、相談するとすれば、相手は両親か、Bさんには弟がいるということなので、その弟が多いということであった。帰省については、大学の休業期ごとに2週間程度を実家で過ごすという。また、就職活動などについて両親から意見を伝えられることがあるかということについて尋ねたところ、次のような回答があった。

> 両親とか祖父母に公務員になった方がいいんじゃないっていうふうなことはよく言われる……地元に残ってほしいっていうのがたぶん親の希望としては大きいと思うので、公務員になるとしても県庁（に勤める）とかの地方公務員になってほしいっていうのが大きいと思います……母親の方からよく（地元に残ってほしいと）言われますね。

このように見たところ、Bさんの場合、家族関係、親子関係が親密と言えそうなのは間違いないが、それは特に両親、とりわけ母親からBさんへの接近度が高いことが大きな要因になっていると思われる。

続いてCさんであるが、Cさんについても家族、両親との関係は親密なものとなっていると言えそうである。両親と話をする頻度や両親に相談事を持ちかける頻度、帰省の頻度や期間について尋ねたところ、話をしたり相談事を持ちかけたりする頻度は低いということであったが､大きな悩みを抱えたときの相談相手は基本的に母親だということであった。帰省をするのは大学の休業期ごとが基本で、実家での滞在期間は1度の帰省で2週間から3週間ほどだという。また、両親から就職活動などについて意見を伝えられることがあるかと尋ねたところ、あまり強くはないが意見はされるとのことであった。地元にいてほしいということやどのような職業についてほしいということなどを言われるということであるが、Cさんは基本的にはそれに従ってきたということであった。

続いてDさんであるが、Dさんについても家族との関係は良好だということである。両親に相談事を持ちかけることがあるかどうかと尋ねたところ、悩みごとを相談するのは基本的に母親が多いということであった。また、両親から過去の大学進学の際や現在の就職

活動に際して積極的に意見を言われた、あるいは言われることがあるどうか尋ねたところ、大学進学については、母親から地元の国立大学である X 大学への進学を勧められたという回答があった。就職活動についても母親から、ストレートには言われないが、できれば地元に残ってほしいとにおわせるようなことを言われることがあるという。

最後に E さんであるが、E さんについても家族との関係は良好であるということであった。家族と話をするような場面はよくあると言い、相談事を持ちかけることもあるという。相談をする相手は母親が多いということであったが、意見を求めるようなかたちで父親や、E さんには兄がいるということなので、その兄に話を持ちかけることもあるということであった。また、両親から現在の就職活動に際して、あるいは過去の大学進学の際に積極的に意見を言われるようなことや、そうした経験があるかどうか尋ねたところ、E さんの側から相談を持ちかければ両親からアドバイスは返ってくるが、そうでない場合に意見を言われるようなことはないということであった。

ここまで述べてきたことを踏まえると、A さんから E さんまでのすべての調査対象者について、家族関係の親密化はある程度見いだされそうである。特に、母親との関係が親密になっている場合が多いようである。一方、その親密さがどこまで大学生の地元志向につながっているのかという点について明確な回答を得ることは、本調査の結果からは難しいようである。家族関係が親密で、母親から地元就職の勧めを受ける B さんと D さんの地元志向の傾向が、調査対象者のなかで相対的に弱いということなどがあるからである。

ただし、家族関係の親密さが地元愛着の低い大学生の就職活動を地元の近くに引き寄せる機能を一定程度果たしている可能性についてはある程度示されたと言えそうである。B さん、D さんは前項で見たように地元愛着の度合いが調査対象者のなかで相対的に低かった。一方で B さんの希望就業地である X 県は B さんの地元である Z 県の近県であり、B さんは「広義の地元志向」であるとも言える。D さんは東京での就職を考えつつも、地元就職の選択肢も捨てていない。B さんは地元の近県での就職を望む理由のひとつとして地元に近いところの方が帰省に便利であることを挙げており、また D さんは地元就職の選択肢を捨てない理由として、地元で就職すれば家族の近くにいられるということを挙げている。親密な家族関係が大学生を地元近辺に引き留める力を持っている可能性は示唆されているのである。

4.3　まとめ

地元愛着と地元志向の関係については、松元（2018）の調査結果から推測されるように、地元地域に愛着を持つ大学生は地元志向になりやすくなるということが示された。また大学進学を機に地元を離れた学生は地元を離れたことをきっかけに、地元の自然や文化などに対する評価が向上して、地元に良いイメージを持ちやすくなるということも示された。ただし、この評価の向上は、高校時代以前に地元に対するネガティブなイメージを確立させている場合には、そのネガティブイメージを根底から覆すことはかなり難しく、地元志向には結びつかない可能性がある。

また、家族関係（特に親子関係）と地元志向との関係については、明確にその関係を論じることは今回の調査結果からはできないが、ただ傾向として、家族関係の親密さが大学生の希望勤務地を地元、あるいはその近辺にさせる可能性についてはある程度示されたものと言える。

5. おわりに

本章では、4 年制大学に通う大学生に対するインタビュー調査の結果をもとに、大学生の地元志向について地元愛着と家族関係という視点から分析をしてきた。その結果、地元愛着と家族関係の親密さはともに大学生の地元志向に影響を与えていることが確認された。なお、両者の違いとして、地元愛着は大学生を地元に直接つなぎ留めやすく、対して親密な家族関係は家族を媒介として大学生を地元につなぎ留める一方、大学生に必ずしも地元の県にとどまりたいと思わせるとは限らないという可能性も示された。

ただ､地元愛着と家族関係は､それら単体で地元志向に影響を与えているわけではない。例えば、本章で論及した点としては地元地域を自己実現のために不利と考えるかどうかということが関わってくる。よって、地元愛着及び親密な家族関係と地元志向との関係は複雑になる。また、大学生の地元志向には、今回の調査では分析の対象としなかったが、大学生の出身地域、地域間の経済格差、さらには大学生の親からの精神的自立の度合いなどの要因も関わってくるだろうと思われるので、問題はさらに複雑になる。その点では、本章の分析はまだまだ課題を残している。それでも、大学生の地元志向に関する普遍的な傾向を示すという点では、本章の分析結果も意義あるものであったのではないか、というのは筆者の希望である。

注

1）総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告」に準じ、大都市圏とは東京圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）、名古屋圏（愛知県、三重県、岐阜県）、大阪圏（大阪府、兵庫県、奈良県）の三大都市圏とする。なお、地方圏とは三大都市圏に含まれない道府県のことである。

2）ただし、C さん、D さんについては幼少期に父親の仕事の関係で県をまたぐ居住地移動を経験しており、必ずしも実家のある都道府県と生まれ育った都道府県は一致しない。

3）Y 湖は A さんの出身県に存在する大きな湖で、同県民にとってとても大きな存在となっていると言われている

文献

轡田竜蔵，2009,「地元志向と社会的包摂・排除――地方私立 X 大学出身者を対象とする比較事例研究」樋口明彦編『若者問題の比較分析――東アジア国際比較と国内地域比較の視点』，151-170.

松元一明，2018,「若者の地元定着に関する考察――大学生の地元への愛着と誇り、ボランティア意向と就労意向の相関から」『高崎商科大学紀要』33：53-68.

総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告　用語の解説」（2022 年 2 月 2 日取得: http://www.stat.go.jp/data/idou/2.html）

総務省，2021,「【日本人住民】令和 3 年住民基本台帳人口・世帯数、令和 2 年人口動態（都道府県別）」（2021 年 1 月 21 日取得: https://www.soumu.go.jp/main_content/000762466.xlsx）

山口泰史，2018,『大学生の就職移動と居住地選択――都会志向と地元定着』古今書院.

山口泰史・松山薫，2015,「戦後日本の人口移動と若年人口移動の動向」『東北公益文科大学総合研究論集』27: 91-114.（再録：2018,「若年層移動の概要」『若者の就職移動と居住地選択――都会志向と地元定着』古今書院，29-53.）

山口泰史，2012,「山形県出身者の U ターン者と非 U ターン者の意識構造」経済地理学会北東支部編『北東日本の地域経済』八朔社，305-322.（再録：2018,「地方出身者の U ターン者と非 U ターン者の意識構造」『若者の就職移動と居住地選択――都会志向と地元定着』古今書院，111-130.）

山下良平，2018,「石川県を事例とした高校生世代が有する境遇へのネガティブな認識の規定要因」『農村計画学会誌』37：217-223.

横田明子，2017,「大学生の就職活動における地元志向に及ぼす家族関係の影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』66：223-230.

付録 1　大学生の生活と意識に関する調査

調査票

2021 年度「社会調査演習Ⅰ・Ⅱ」（広島大学）

大学生の生活と意識に関する調査

「大学生の生活と意識を考える会」
代表研究者　園井 ゆり（広島大学准教授）
実 施 期 間　2021 年 4 月～ 2022 年 3 月
調査実施日（　　）年（　）月（　）日

調査ご協力のお願い

大学生の皆様

謹啓　時下、皆様におかれましてはご清祥の段、お慶び申し上げます。

この調査は、大学生の皆様が現在どのような生活をし、将来をどのように展望しているかをお聞きするものです。私ども「大学生の生活と意識を考える会」は、2021 年度広島大学「社会調査演習Ⅰ・Ⅱ」授業の担当教員（園井ゆり）および受講学生により構成された研究会です。この研究会の目的は、大学生の皆様に対する調査を通して、これからの日本社会を担う若い世代の人々の価値意識を明らかにし、今後の日本社会の将来展望を見出すことです。

この研究会では、現代の大学生がどのような価値意識（例えば、職業観や家族観、友人観等）を持っているのか、これらの価値意識はどのような社会的背景のもとで形成されたのか、ということ等を社会学的に把握するために研究を進めています。そのため、この調査では、大学生の皆様の価値意識を、①大学入学前までの生活（過去）、②大学入学後の現在の生活（現在）、③大学卒業後の将来の生活（未来）の 3 つの時点においてお聞きします。その上で、若い世代の人々はどのような将来的展望を持っているのか、どのような職業政策あるいは家族政策を必要としているのか、といったことを分析し、提言することを目指しています。つきましては、ご多用の中、誠に恐縮ですが、本調査の趣旨をご理解くださり、皆様のお考えをお伺いさせていただきたく、お願い申し上げる次第です。

この調査は匿名でご回答頂きますので、どの調査結果が誰のものかを調べることは致しません。ご回答内容が皆様の学校やご家庭で問題になることは決してありません。調査結果の公表に際しては、皆様のプライバシーを厳守し、個人情報等の記載は一切致しません。ご回答は全て統計的処理を行い分析し、学術的な研究目的のみに使用させて頂きます。以下のご回答方法をご確認下さり、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

敬具

【ご回答方法】

・それぞれの設問に沿って、選択肢の中から回答を選択するか、数値を所定の欄にご記入ください。

・「その他」をご選択いただいた場合は、（　）の中にその内容をできるだけくわしくご記入ください。

【お問い合わせ先】

「大学生の生活と意識を考える会」事務局
〒 739-8521 東広島市鏡山 1-7-1　広島大学総合科学部　園井ゆり研究室内
TEL: 082-424-6418

Ⅰ　インタビュー調査

質問例[1]

（過去）大学入学前までの生活

1.　現在の所属大学／学部へ進学しようと思ったのはなぜ（*Why*）ですか。

2.　大学への進路選択の時は、誰（*Who*）からの助言が役に立ちましたか。

3.　中学、高校時代では、（勉強以外では）何（*What*）に最も力をいれていましたか。

（現在）大学入学後の現在の生活

1.　今の大学生活では何（*What*）に最も力をいれていますか。

2.　どのような（*What*）授業を中心に履修していますか。それはなぜ（*Why*）ですか。

3.　大学在学中に達成したい目標（目指している資格）は何（*What*）ですか。

4.　今の大学生活の中で最も気にかかること（悩んだりしていること）は何（*What*）ですか。
（例えば、授業や勉強のこと、友人関係、家族関係、収入等経済関係、卒業後の進路等）

5.　あなたのご家族は、あなたの生活や将来の進路選択にどの程度（*How much*）関わっていますか。

（未来）大学卒業後の将来の生活

1.　大学卒業後はどのような（*What*）進路を希望していますか。将来の進路はいつ（*When*）頃から考え始めますか（あるいは考え始めましたか）。

2.　将来つく仕事には、何（*What*）を最も期待しますか。
（例えば、① 1 つの仕事で専門性を高める、or 幅広い業務を経験する
② 自身の能力に応じた給与を得る、or 年齢・勤続年数に応じた給与を得る
③ 仕事中心にキャリアを積む、or 仕事はほどほどに、自分の自由時間も持つ
④ 創造的仕事に携わる、or あらかじめ決められた仕事に携わる等。）

3.　将来の生活について最も気にかかること（不安に思っていること）は何（*What*）ですか。
（例えば、就職することができるか、十分な収入が得られるか、自身や家族の生活や健康等）

4.　将来結婚したり、家族を作ったりすることについてどのような（*What*）見通しを持っていますか。

[1] 上記はインタビュー調査時の質問例です。質問例を参考に、5W1H の要素が含まれるような聞き方をして、自由にインタビューを行ってください（教科書 p.220 参照）。過去、現在、未来の 3 時点における調査対象者の考えやその変化を時間軸に沿って聞いてください。

II　アンケート調査

あなたの大学生活についておうかがいします。

問 1. あなたの年齢、性別、学年等を教えて下さい。

年　齢	（　　）歳	性　別	男性　・　女性
大学種別	（国立　・　私立　・　公立）大学	学　年	学　部（　　）年生

問 2. 今の大学にはどのような入試で入学しましたか。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

1	一般入試
2	指定校推薦
3	公募制推薦
4	AO 入試
5	附属高校からの内部進学
6	2 年次編入
7	その他（具体的に：　　）

問 3. その大学では主に何を学んでいますか。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

1	理学・工学
2	農学
3	社会科学 （経済学・政治学・法学・商学・社会学など）
4	人文科学 （文学・外国語・哲学・歴史学・心理学など）
5	教育学
6	生活科学 （家政学・食物学・住居学・被服学など）
7	医学・歯学・薬学・看護学
8	芸術学（美術・音楽・デザインなど）
9	その他（具体的に：　　）

問 4. あなたは現在どのように暮らしていますか。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

1	親と同居
2	大学の寮
3	一人暮らし
4	その他（具体的に：　　） 〔記入例： 友人とアパートで共同生活〕

問 5. あなたは現在、学費や生活費をどのようにまかなっていますか。A と B のそれぞれについて、あてはまる比率 (%) を、合計が 100% になるように記入して下さい。

	親	貯金や アルバイト	奨学金や ローン	その他
〔記入例〕 親から 80%、アルバイトで 20% 賄っている場合	**80** %	**20** %	**0** %	**0** %
A. 生活費・・・・・・・・・・・・・・	%	%	%	%
B. 学　費・・・・・・・・・・・・・・	%	%	%	%

II　アンケート調査

問 6. 大学でのあなたの成績はどのくらいですか。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

ほとんど優 （A: 80~100 点）	平均すれば良 （B: 70~79 点）	平均すれば可 （C: 60~69 点）	不可（落とした単位）が多い （D: 0~59 点）
1	2	3	4

あなたのご家族についておうかがいします。

問 7. あなたが高校 3 年生のときの家族構成について、あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。
また兄弟姉妹（**E~H**）については、（　　）内に人数も記入してください。

〔記入例〕
父は単身赴任で別居、母、姉 2 人と母方の祖母と同居。父方の祖父母とは別居。

	いる		いない	合計人数（同居も別居も含む）	いる		いない	合計人数（同居も別居も含む）
	同居	別居			同居	別居		
A.　父または養父	1	2	3		1	(2)	3	
B.　母または養母	1	2	3		(1)	2	3	
C.　祖父・・・・	1	2	3	（　　）人	1	(2)	3	（ **1** ）人
D.　祖母・・・・	1	2	3	（　　）人	(1)	(2)	3	（ **2** ）人
E.　兄・・・・・	1	2	3	（　　）人	1	2	(3)	（　）人
F.　弟・・・・・	1	2	3	（　　）人	1	2	(3)	（　）人
G.　姉・・・・・	1	2	3	（　　）人	(1)	2	3	（ **2** ）人
H.　妹・・・・・	1	2	3	（　　）人	1	2	(3)	（　）人
I.　その他・・・	1	2	3	（　　）人 （具体的に：　　）	1	2	(3)	（　）人

問 8. あなたが高校 3 年生のときのご家庭の生活状況はいかがでしたか。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

豊か	やや豊か	あまり豊かではない	豊かではない
1	2	3	4

問 9. あなたのご両親の最終学歴について教えて下さい。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

	高校	高専	専門学校・短大	大学	大学院
父	1	2	3	4	5
母	1	2	3	4	5

（次ページに続きます）

II　アンケート調査

あなたの将来の生活についておうかがいします。

問 10. 女性の仕事と結婚に関して、あなたはどうすることがよいと思いますか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1	仕事をせず、結婚して家庭に入る
2	結婚したら、仕事はやめて家庭に入る
3	子どもができたら、仕事はやめて家庭に入る
4	子どもができたら、いったん仕事をやめ、子どもに手がかからなくなったら仕事を始める
5	結婚して子どもができても、仕事をつづける
6	結婚しても子どもをつくらず、仕事をつづける
7	結婚しないで、仕事をつづける
8	その他（具体的に：　　）

問 11. 家族のなかでの男性の役割に関する次のような意見について、どう思いますか。**A～E** のそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	とても そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
A.　男性が家族を養うべきだ・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
B.　安定した仕事についていない男性は、結婚すべきではない	1	2	3	4
C.　家事や育児は女性にまかせて、男性は仕事に専念すべきだ	1	2	3	4
D.　男性が家庭に入り、家事や育児に専念してもよい・・・・	1	2	3	4
E.　父親が子育てにかかわることは大切なことだ・・・・・・	1	2	3	4

問 12. あなたは 30 歳ごろになったときに、どのような働き方をしていたいと思いますか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1	正社員として働きたい
2	自分で事業を起こしたい
3	親の家業をつぎたい
4	独立して一人で仕事をしたい
5	契約社員や派遣社員、アルバイトやパートで働きたい

1～5の方は次ページ付問 **12-1** へお進み下さい。

6	専業主婦／主夫になりたい
7	その他（具体的に：　　）

6と7の方は以上で質問は終わりです。
ありがとうございました。

II　アンケート調査

付問 12-1.【問 **12** で 1 ～ 5 と答えた方におうかがいします。】
あなたは 30 歳ごろになったときに、どのような職業についていたいと思いますか。
あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

農業・林業・漁業

1	農・林・水産に関わる職業

技能的職業

2	工場などの生産現場での技能職
3	自動車整備士、電気工事作業員など
4	大工・左官・配管工など建築関係の技能職

販売的職業

5	デパート店員やセールスマンなどの販売員
6	小売店、スーパー、コンビニなどの店員
7	喫茶店、飲食店、ブティックなどの店主

事務的職業

8	営業マン、銀行員、商社員、事務員など
9	公務員

管理的職業

10	会社の重役、部長、課長など
11	企業の経営者
12	政治家

サービス的職業

13	理容師、美容師など
14	料理人、コックなど
15	客室乗務員、ホテルマンなど

保安的職業

16	警察官、消防官、自衛官
17	警備員

運輸・通信的職業

18	トラックの運転手、電車の運転士、パイロットなど
19	通信士、郵便配達員など

専門・技術的職業

20	医師
21	薬剤師、栄養士、看護師、臨床検査技師
22	ケースワーカーやカウンセラーなど福祉に関わる職業
23	弁護士、検事、裁判官など
24	税理士、会計士など
25	外交官
26	科学者、研究者、大学の教員
27	小学校、中学校、高校の教員
28	幼稚園教諭、保育士
29	システムエンジニア、コンピューターのプログラマーなど
30	機械・電気や建築・土木関係の技術者
31	記者、ジャーナリスト、編集者
32	テレビ、ラジオなど放送に関わる職業
33	デザイナー、スタイリスト、カメラマン
34	小説家、作家、漫画家
35	芸術家
36	歌手、タレント
37	スポーツ選手

その他

38	（具体的に：　　）

以上で質問は終わりです。ご協力いただきありがとうございました。

「大学生の生活と意識に関する調査」

調査項目の出典

園井　ゆり

本調査票作成において参照した先行調査の出典は下記の通りである。

1. ベネッセ教育総合研究所, 2008,『大学生の学習・生活実態調査, 2008』(調査番号: 0721) 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブ.
2. 電通育英会, 2013, 『大学生のキャリア意識調査，2013』(調査番号: 0913) 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブ.
3. 東京大学大学経営・政策研究センター, 2007, 『全国大学生調査，2007・2009』(調査番号: 0893)（本調査）東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブ.
4. 東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト, 2005, 『東大社研・高卒パネル調査（JLPS-H）Wave 3，2005.10』(調査番号: PH030)（調査票 C）東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブ.

付録 2　大学生の生活と意識に関する調査

項目別集計表

項目別集計表

問 1 年齢

	人数	有効パーセント
18	2	5.3
20	16	42.1
21	18	47.4
22	2	5.3
合計	38	100.0

問 1 性別

	人数	有効パーセント
男性	9	23.7
女性	29	76.3
合計	38	100.0

問 1 大学種別

	人数	有効パーセント
国立大学	34	89.5
私立大学	3	7.9
公立大学	1	2.6
合計	38	100.0

問 1 学年

	人数	有効パーセント
1	3	7.9
2	1	2.6
3	31	81.6
4	3	7.9
合計	38	100.0

問 2 今の大学への入学方法

	人数	有効パーセント
1 一般入試	34	89.5
2 指定校推薦	1	2.6
4 AO 入試	3	7.9
合計	38	100.0

問 3 今の大学で学んでいる分野

	人数	有効パーセント
1 理学・工学	8	21.1
3 社会科学（経済学・政治学・法学・商学・社会学など）	11	28.9
4 人文科学（文学・外国語・哲学・歴史学・心理学など）	11	28.9
5 教育学	3	7.9
7 医学・歯学・薬学・看護学	1	2.6
9 その他	4	10.5
合計	38	100.0

問 4 現在の居住形態

	人数	有効パーセント
1 親と同居	11	28.9
2 大学の寮	1	2.6
3 一人暮らし	26	68.4
合計	38	100.0

問 5 生活費：親から

	人数	有効パーセント
0	2	5.3
20	2	5.3
30	1	2.6
40	1	2.6
50	2	5.3
60	2	5.3
70	1	2.6
75	1	2.6
80	6	15.8
85	2	5.3
90	9	23.7
100	9	23.7
合計	38	100.0

問 5 生活費：貯金やアルバイトから

	人数	有効パーセント
0	9	23.7
5	1	2.6
10	11	28.9
15	2	5.3
20	7	18.4
30	2	5.3
40	2	5.3
50	1	2.6
60	1	2.6
80	1	2.6
100	1	2.6
合計	38	100.0

問 5 生活費：奨学金やローンから

	人数	有効パーセント
0	33	86.8
20	1	2.6
40	1	2.6
50	2	5.3
90	1	2.6
合計	38	100.0

問 5 生活費：その他

	人数	有効パーセント
0	38	100.0
合計	38	100.0

問 5 学費：親から

	人数	有効パーセント
0	4	10.5
20	1	2.6
50	3	7.9
75	1	2.6
80	1	2.6
100	28	73.7
合計	38	100.0

問 5 学費：貯金やアルバイトから

	人数	有効パーセント
0	36	94.7
10	1	2.6
50	1	2.6
合計	38	100.0

問 5 学費：奨学金やローンから

	人数	有効パーセント
0	30	78.9
20	1	2.6
25	1	2.6
50	2	5.3
80	1	2.6
90	1	2.6
100	2	5.3
合計	38	100.0

問 5 学費：その他

	人数	有効パーセント
0	38	100.0
合計	38	100.0

問 6 大学での成績

	人数	有効パーセント
1 ほとんど優	15	39.5
2 平均すれば良	19	50.0
3 平均すれば可	2	5.3
4 不可（落とした単位）が多い	2	5.3
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：A．父または養父

	人数	有効パーセント
1 同居	32	84.2
2 別居	3	7.9
3 不在	3	7.9
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：B．母または養母

	人数	有効パーセント
1 同居	38	100.0
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：C. 祖父

	人数	有効パーセント
1 同居	3	7.9
2 別居	28	73.7
3 不在	7	18.4
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：C. 祖父の合計人数

	人数	有効パーセント
0	7	18.4
1	16	42.1
2	15	39.5
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：D. 祖母

	人数	有効パーセント
1 同居	3	7.9
2 別居	30	78.9
3 不在	1	2.6
4 その他（同居と別居 1 人ずつ）	4	10.5
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：D. 祖母の合計人数

	人数	有効パーセント
0	1	2.6
1	15	39.5
2	22	57.9
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：E. 兄

	人数	有効パーセント
1 同居	7	18.4
2 別居	3	7.9
3 不在	28	73.7
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：E. 兄の合計人数

	人数	有効パーセント
0	28	73.7
1	9	23.7
2	1	2.6
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：F. 弟

	人数	有効パーセント
1 同居	10	26.3
3 不在	28	73.7
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：F. 弟の合計人数

	人数	有効パーセント
0	28	73.7
1	9	23.7
2	1	2.6
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：G. 姉

	人数	有効パーセント
1 同居	6	15.8
2 別居	3	7.9
3 不在	29	76.3
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：G. 姉の合計人数

	人数	有効パーセント
0	29	76.3
1	9	23.7
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：H. 妹

	人数	有効パーセント
1 同居	12	31.6
3 不在	26	68.4
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：H. 妹の合計人数

	人数	有効パーセント
0	26	68.4
1	10	26.3
2	2	5.3
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族構成：I. その他

	人数	有効パーセント
3 不在	38	100.0
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の家族形態

	人数	有効パーセント
三世代世帯	7	18.4
核家族世帯（夫婦と子）	30	78.9
核家族世帯（ひとり親と子）	1	2.6
合計	38	100.0

問 7 高校 3 年生時の同居世帯人員数（本人含む）

	人数	有効パーセント
3	8	21.1
4	22	57.9
5	6	15.8
6	2	5.3
合計	38	100.0

問 8 高校 3 年生時の家庭生活状況

	人数	有効パーセント
1 豊か	14	36.8
2 やや豊か	16	42.1
3 あまり豊かではない	7	18.4
4 豊かではない	1	2.6
合計	38	100.0

問 9 父の最終学歴

	人数	有効パーセント
1 高校	8	21.1
3 専門学校・短大	5	13.2
4 大学	24	63.2
5 大学院	1	2.6
合計	38	100.0

問 9 母の最終学歴

	人数	有効パーセント
1 高校	8	21.1
3 専門学校・短大	8	21.1
4 大学	21	55.3
5 大学院	1	2.6
合計	38	100.0

問 10 女性の仕事と結婚に関して

	人数	有効パーセント
3 子どもができたら、仕事はやめて家庭に入る	1	2.6
4 子どもができたら、いったん仕事をやめ、子どもに手がかからなくなったら仕事を始める	11	28.9
5 結婚して子どもができても、仕事をつづける	21	55.3
6 結婚しても子どもをつくらず、仕事をつづける	1	2.6
8 その他	4	10.5
合計	38	100.0

問 11 男性の役割：A．男性が家族を養うべきだ

	人数	有効パーセント
1 とてもそう思う	2	5.3
2 まあそう思う	13	34.2
3 あまりそう思わない	19	50.0
4 まったくそう思わない	4	10.5
合計	38	100.0

問 11 男性の役割：B. 安定した仕事についていない男性は、結婚すべきではない

	人数	有効パーセント
1 とてもそう思う	2	5.3
2 まあそう思う	9	23.7
3 あまりそう思わない	17	44.7
4 まったくそう思わない	10	26.3
合計	38	100.0

問 11 男性の役割：C. 家事や育児は女性にまかせて、男性は仕事に専念すべきだ

	人数	有効パーセント
3 あまりそう思わない	15	39.5
4 まったくそう思わない	23	60.5
合計	38	100.0

問 11 男性の役割：D. 男性が家庭に入り、家事や育児に専念してもよい

	人数	有効パーセント
1 とてもそう思う	18	47.4
2 まあそう思う	17	44.7
3 あまりそう思わない	3	7.9
合計	38	100.0

問 11 男性の役割：E. 父親が子育てにかかわることは大切なことだ

	人数	有効パーセント
1 とてもそう思う	29	76.3
2 まあそう思う	7	18.4
3 あまりそう思わない	1	2.6
4 まったくそう思わない	1	2.6
合計	38	100.0

問 12 30 歳ごろにしていたい働き方

	人数	有効パーセント
1 正社員として働きたい	37	97.4
5 契約社員や派遣社員、アルバイトやパートで働きたい	1	2.6
合計	38	100.0

付問 12-1 30 歳ごろについていたい職業

	人数	有効パーセント
1 農林・林業・漁業：農・林・水産に関わる職業	1	2.6
8 事務的職業：営業マン、銀行員、商社員、事務員など	7	18.4
9 事務的職業：公務員	12	31.6
10 管理的職業：会社の重役、部長、課長など	2	5.3
26 専門・技術的職業：科学者、研究者、大学の教員	1	2.6
27 専門・技術的職業：小学校、中学校、高校の教員	3	7.9
29 専門・技術的職業：システムエンジニア、コンピューターのプログラマーなど	1	2.6
30 専門・技術的職業：機械・電気や建築・土木関係の技術者	2	5.3
31 専門・技術的職業：記者、ジャーナリスト、編集者	3	7.9
32 専門・技術的職業：テレビ、ラジオなど放送に関わる職業	2	5.3
38 その他	4	10.5
合計	38	100.0

（作成 寺岡桃花）

2021 年度 広島大学総合科学部「社会調査演習 I・II」研究成果報告書
大学生の生活と意識に関する調査研究

2022 年 3 月 31 日発行

編　者　園 井 ゆ り
発行元　広島大学総合科学部
〒739-8521 広島県東広島市鏡山 1-7-1
電話 082-424-6394

印刷・製本　三原プリント株式会社